明治大学人文科学研究所紀要　第七十二冊（二〇一三年三月三十一日）縦　一―三十頁

都市・都市文化と日本の近代文学

――回想された風景　芥川龍之介の横須賀――

佐藤義雄

—— *Abstract* ——

City/its culture and modern literature

(Akutagawa Ryunosuke − Recollections of Yokosuka and its scenery −)

SATO Yosio

Akutagawa Ryunosuke spent the period from December 1916 to march 1919 as an instructor at the *Kaigun Kikann Gakkou*(Naval Engineering School). While *Jigoku-hen* may be most representative of Akutagawas eary period, starting from that work, Akutagawa completed writing masterpieces on a moment deep impression with the theme of an artists glory during this period: it was the most heightened point of his literary work. Despite his negative remarks on it, Akutagaw's Yokosuka period should be looked upon as a period when young, newly-married Akutagawa lived vividly, continually writing inspired texts.

The text most deeply connected to the topos of Yokosuka is *Mikan*: this text,while inheriting themes from his early novels has a sense of newness, freshness using materiel based on what I have encountered as well as being a text of an archetypal moment of a transgression into a utopia.

Akutagawa left more texts on Yokosuka after leaving it: *Yasukiti Mono* (Yasukiti pieces) for the most part are texts of quotations from Yokosuka,but in these works, the view of Yokosuka has been painted over with a single shade of grey. Akutagawas Yokosuka period was to be his most promising, but even that was to be repainted grey in his later years. Recollections of Yokosuka and its scenery have been re-dyed, strongly reflecting his state of mind in his later years.

《個人研究第1種》

都市・都市文化と日本の近代文学

――回想された風景　芥川龍之介の横須賀――

佐藤義雄

芥川龍之介は大学卒業後の大正五年から足掛け四年、海軍機関学校の英語教官として、横須賀と関わった。芥川と横須賀と言えば、「蜜柑」がまず想起されるだろうが、執筆は後のこととはいえ、芥川の横須賀を舞台とした。テキストはほとんど〈保吉もの〉と重なり、つまり、〈保吉もの〉の大半は〈横須賀もの〉ということになる。私小説へと傾斜した〈保吉もの〉は芥川晩年への大きな転換点とされているが、その最初の「保吉の手帳から」の発表は大正一二年、横須賀から離れて四年後、このことが何を意味するか。日本の近代そのものとも見え、また特殊な異空間とも見える軍港都市横須賀に、芥川は何を見たのか。フィールドを歩き、「都市と文学」の視点から芥川横須賀のテキストを読みなおしてみたい。

（1）芥川龍之介の横須賀

芥川の横須賀での生活と創作について、まず、略年譜を確認することから稿を起こしてみたい。

一九一六（大正五）年24歳
一二月　海軍機関学校嘱託教師、鎌倉和田塚の野間クリーニング店（海浜院ホテル隣）に下宿。漱石葬儀に参加。塚本文と婚約。
一九一七（大正六）年25歳
三月　佐藤春夫来訪。
四月　「偸盗」。父芥川道章と京都旅行。
五月　第一創作集『羅生門』刊行。
六月　「さまよへる猶太人」。軍艦「金剛」で山口へ航海。日本橋「鴻之巣」で『羅生門』出版記念会。谷崎潤一郎などが出席。
九月　「二つの手紙」、「片恋」。「或日の大石内蔵助」。横須賀市汐入五八〇番地（現在一丁目一番地）に下宿。
一一月　志賀直哉「和解」に感心。「戯作三昧」。第二創作集『煙草と悪魔』。
一九一八（大正七）年26歳
一月　「西郷隆盛」、「首が落ちた話」。室生犀星を知る（その関係から堀辰雄、中野重治を知ることになる）。
二月　文と田端で挙式。

三月　大阪毎日新聞社社友。　鎌倉大町の小山氏別邸に移転、新婚生活。
四月　「袈裟と盛遠」「地獄変」。
五月　高浜虚子に師事し句作を始める。
七月　「蜘蛛の糸」「開化の殺人」。
九月　「奉教人の死」。このころから赴任当初からの念願であった東京への移転の願いが強まった。慶應義塾への移籍話や海軍拡張の波が関連しているようだ。
一〇月　「枯野抄」「邪宗門」（未完）。
十二月　スペイン風邪に罹患。
一九一九（大正八）年27歳
一月　「毛利先生」「あの頃の自分の事」「犬と笛」第三創作集『傀儡師』。
二月　「開化の良人」。
三月　実父新原敏三がインフルエンザで死去。海軍機関学校退職。大阪毎日新聞社入社（菊池寛も）。田端に移転。「きりしとほろ上人伝」。
五月　「私の出遭つたこと」（「沼地」「蜜柑」の原題）。

下宿のあった汐入は海軍工廠横須賀製鉄所（という名の造船所）に近く、

「僕はいつも煤の降る工廠の裏を歩いていた。どんより曇った工廠の空には虹が一すじ消えかかっていた。僕は踵を擡げるようにし、ちょっとその虹へ鼻をやってみた。するとーかすかに石油の匂がした」（「横須賀小景」「虹」　大正一五・五「驢馬」）。

と、のちのちまで灰色の風景としてくりかえし叙述される。芥川にとっての横須賀の〈原風景〉であった。〈灰色の風景〉とは、多分に芥川好みの心象のそれだが、実際横須賀海軍工廠（製鉄所＝造船所）のもたらした風景でもあった。横須賀と言えば私たちは一般に、帝国海軍の鎮守府や海兵団をはじめとする軍事施設を想起しがちだが、工廠は万をはるかに超える従業員を誇る横須賀最大の施設であり、ガントリークレーン（移動式クレーン）や工廠の排出する煤煙が横須賀の象徴となっていた。

「汐入は明治23年（一八九〇）に不入斗に要塞砲兵第一連隊が設置されたことにより、工員軍人相手の商店が並んで商店街が形成された。震災後には道路沿いに看板建築・出桁造りが軒を連ねて、その九割を商店が占めた。また人口の増加で住宅不足が進むと、谷戸の奥に工廠の職工長屋や下宿や・貸家などが立ち並んで幹部クラスの洋館なども建設されていった」（『横須賀市史』）。汐入の下宿の主人尾鷲梅吉は海軍工廠の御用商人で、「龍之介の横須賀へ転居するころには、横須賀共済会と横須賀海軍工廠の看板を立てて人の出入りも多く、庭に池や石橋が作られた立派な構えをしていた」（『追跡芥川龍之介とその横須賀時代』　菊池幸彦　神奈川新聞社　一九八八）という。現在の汐入の商店街にはまだ看板建築の商店も残り、横須賀工廠の工員や軍人相手に賑わった当時の面影をたっぷりと残し続けている。

周囲を山に囲まれ出口がない寒村横須賀村が大きな変貌を遂げたのは、むろん、慶応元年（一八六五）のこと。勘定奉行小栗上野介忠順が、日米修好条約批准交換使節として渡米した際に見聞した、欧米の圧倒的な技術力への驚愕に端を発している。小栗がフランス権益を幕府との関係の中で進めていた公使レオン・ロッシュのバックアップで、上海にいた技師長ヴェルニーを呼んで本格的な造船所の建設に乗

り出してからの事であった。かつての逸見海岸は、今は「ヴェルニー公園」として整備され、小栗上野介とレオン・ロッシュの像が横須賀湾に対して並んでいる。横須賀湾が選ばれたのは、ロッシュとフランス艦隊司令官ジョレスの、この地とフランスの代表的な軍港ツーロンがよく似ている、という判断からであったようだが、横須賀製鉄所は幕府瓦解の後も、新政府によって順調に発展していった。ここを破壊しようとした徳川慶喜を諌めて「蔵つきの家は云々」と言って守ろうとした小栗上野介の逸話は大変有名である。

拡大を続けていた軍港都市横須賀が飛躍的に発展したのは明治17年、横浜から東海鎮守府が移転してきてからであった。海兵団（明治22年、逸見）、砲術練習所（明治26年、逸見）、水雷術練習所（明治26年、田浦）などが鎮守府を中心に設置され、海軍だけではなく、陸軍要塞砲兵第一連隊（明治23年　不入斗）、東京湾要塞司令部（明治28年）も置かれ、横須賀は日本第一の軍港都市へと急変貌していった。海軍機関学校が汐留に設置されたのは明治二六年のことであり、その後も半島の東半分は、病院や軍法会議を含めた教育訓練施設に、西半分は海軍工廠へと、整備されていった。（地図参照）

これに伴い、本来平地が少ないこの町では埋め立てが進行し、大滝町・若松町・米が浜通り・本町・汐入などの民間地も歓楽街としてにぎわっていった。大滝町は製鉄所造営にかかわる外国人相手に江戸幕府が設置した遊郭がかつてあり、米が浜通りは花町としてにぎわった。むろん客層は軍人であり、かつて〈海軍料亭〉と呼ばれた「小松」は現在も営業を続けている。本町・汐入は湿地帯であったが、本町は「ドブ板通り」として、今は横須賀の観光名所であり、芥川龍之介が下宿した汐入は、今もレトロな雰囲気を漂わせた商店街として独自の雰囲気を漂わせている。芥川が赴任した頃の町の様相は、日露戦後にほぼその性格が出来上がっていたようである。〈戦争を知らない〉私たちは、大工業都市横須賀をなかなか思い浮かべられない。最先端の軍港都市は、軍艦に集約される総合工業都市であったのであり、工廠とは国内で最先端最大規模の工場であったのである。横須賀は軍需産業を背景としたため、日露戦争を終えた明治末期ごろから軍の機能が増大した。明治四〇年には人口六二、八七六を数え、横須賀海軍工廠には一五〇〇〇人の職工が働く大工業都市へと変貌を遂げた。横須賀にはこの頃から造船所や鎮守府を訪れる訪問客が目立つようになり、街の中心街には日用雑貨店や旅館が軒を連ねるようになった。それに比べると、生産会社や工場は地元を対象とする以外にこれといった特色がなく、ますます軍施設と官営工場に依存する消費都市としての性格を強めていった（『横須賀市史』）。

「あばばばば」（大正一二）は、「正真正銘娘じみて」いた乾物店の「硯友社趣味」の若女房が、出産後「度胸のよい母」、「一たび子のためになったが最後、古来如何なる悪事をも犯した、恐ろしい「母」の一人」に変貌する姿を描いた、芥川文学の底流となっている〈母の主題〉の一翼を担うテキストだが、店内の様子は

天井の梁からぶら下つたのは鎌倉のハムに違ひない。欄間の色硝子は漆喰塗りの壁へ緑色の日の光を映してゐる。板張りの床に散らかつたのはコンデンスド・ミルクの広告であらう。正面の柱には時計の下に大きい日暦がかかつてゐる。その外飾り窓の中の軍艦三笠も、金線サイダアのポスタアも、椅子も、電話も、自転車も、スコツトランドのウイスキーも、アメリカの乾し葡萄も、マニラの葉巻も、エジプトの紙巻も、燻製の鰊も、牛肉の大和煮も殆ど見覚えのないものはない。

と描写される。いかにも軍港都市らしい〈ハイカラ〉さを漂わせた大正モダンの世界。色ガラスを透かした午後の光に照らし出されて「美しい緑色の顔をしてゐる」女と「交渉」する保吉の小道具もココアの「Droste」と「Fry」である。のみならず、保吉は、店で借用した受話器を耳に当てながら、「かう云ふ店の光景はいつ見ても悪いものではない。何処か阿蘭陀の風俗画じみた、物静かな幸福にあふれてゐる」と感じながら、「彼の愛蔵する写真版の De Hoogehe の一枚を思ひ出し」たりしている。

軍港都市横須賀は、当時の総合技術の集約である造船技術から派生して、都市基盤整備の先進地でもあった。明治改元早々から始まった造船所の、本格的トンネルを利用した水道が払い下げになったのは明治三九年、明治一六年から始まっていた造船所の電灯事業が民間で始まったのが、夏目鏡子が夫に内緒で家庭に電気を引いたのより早い、明治三八年、郵便事業は相当に早く明治四年といったような状況であった。鎮守府の開設、それに伴う訓練・教育施設の設置は、当然さまざまな建築群を必要とするが、藤森照信によれば、〈横須賀派〉と称すべき技師たちによって、歴史主義建築としての庁舎・官舎のみならず、工場・倉庫・土木など、横須賀は近代建築の宝庫であったという（『横須賀市史』別編『文化遺産』）。日本一というトンネルの数も、工廠の土木技術を背景としているはずである。横須賀の近代建築の伝統は、時代はだいぶ遅れるが、現在でも例えば聖ヨゼフ病院（旧横須賀海仁会病院）などに残っている。山がちな地形を生かしたみごとな湾曲状の美しさを持ったこの昭和モダニズム建築は、石本建築事務所に籍を置いた立原道造のデザインであるらしい（『新建築』第一四巻第七〇号）。

芥川が赴任した頃の横須賀は凡そ右のような様相だったが、下町本所や田端とは全く異なった町での新しい生活が文夫人との恋愛結婚とともに始まった。結婚の経緯はここでは省略するが、全集第十巻に収録された文宛書簡を通読してみると、まだ若い「文豪」の〈純情〉が微笑ましい限りという感に尽きる。

夏目さんの方は向うでこつちを何とも思つていないごとく、こつちも向ふを何とも思つていません。僕は文ちやんと約束があつたから、夏目さんのことを断るとか何とか言ふのではありません。約束がなくつても断るのです。文ちやん以外の人と幸福に暮すことができようなぞとは、もとより夢にも思っていません、僕に力を与え僕の生活を愉快にする人があるとすれば、それはただ文ちやんだけです。むかしの妻争いのように、文ちやんを得るために戦わなければならないとしたら、僕は誰とでも戦うでしよう。さうして勝つまではやめないでしよう。それほどに僕は文ちやんを思つています。僕はこのことだけなら神様の前へ出ても恥ずかしくはありません。僕は文ちやんを愛しています。文ちやんも僕を愛してください。愛するものは何事をも征服します。死さえも愛の前にはかなひません。（大正六・九・九）

実生活とテキストは別というのが今日のテキスト研究の「常識」だが、さまざまな経緯を取りつつ実現した新婚生活が昂揚をもたらさなかったはずはない。中央文壇の動向への焦り、自由な文学者としての軍学校への反感、そうしたものとは別に、芥川龍之介生涯の最も幸せな時期であり、そのことと横須賀・鎌倉での生活の記憶は結びついているはずである。結婚後、汐入から移り住んだ鎌倉大町は、海軍の高級軍人の町として知られた所である。

八畳二間、六畳一間、四畳半二間で、水蓮の浮く池や、芭蕉があり、松の木のある広々とした庭がありました。主人はその頃文壇に出ておりましたので、こんな所にいたら時代おくれになるといって、一年住んだだけで田端へ帰りました。私は田端へ帰らず鎌倉にもっといたかったのですが・・・。主人は亡くなる年の前に何となく急に「鎌倉を引き上げたのは一生の誤りであった」と言ったりしました（芥川文『追憶芥川龍之介』）。

機関学校での教官生活は、一方で、「生徒はみな勇猛な奴ばかりであらゆる悪徳は堂々とやりさえすればいつでも善になるかのごとき信念を持っています（略）だから私のあげ足をとるのでも私を凹ますのでも堂々とやっつけられます」（夏目鏡子あて　大正六・二・八）と不満を持ちつつ、一方では、〈自由〉な海軍の気風もあって、案外のびのびとしたものでもあったようだ。内田百閒の次のような、機関学校の春の一日のスケッチが雰囲気をよく伝えてくれている。

その内に、機関学校の桜が咲いた。門を入った両側の、大木の並木に万朶の花が咲き乱れて、その突き当りに明るい海がまぶしい海（ママ）を寄せている。雨が降れば、教官室の濡れた窓の外を、海鳥が低く掠める様に飛んで、一時間目の休み毎に、耳を澄ますと波の音が、段段大きくなるように思われる事もあった。

お昼の食堂で、機関中将の船橋校長と芥川が文学談を始めて、なかなからちが明かなかった。「校長、そりゃ駄目です」と芥川が云った。「面白いという意味が違いますよ」老校長は芥川のいる方にまともに向かって、にこにこ笑いながらいつまでも負けていなかった。「そんなことを言ったところがだ、つまり誰も読まんだろう。人が読まんでもいいかね」満堂の高等官たち、すなわち海軍士官の教官や職員と文官教授とが食堂の茶を飲み、煙草を吹かしながら、二人の議論を聞いているのである。老校長は面白がって芥川龍之介にからまっているらしく、芥川はそれを承知して老閣下を一本決めつけようと掛かっている様子である。云っていることは他愛もない子供の議論のような事だけれども、両方とも攻撃的態度で話し合うのだから、果てしがつかない」（『芥川龍之介雑記帖』）

諏訪三郎による聞き書き「敗戦教官芥川龍之介」（『中央公論』昭和二七年三月）は、のびのびと自由な〈教官〉生活を送っていた、機関学校教官時代の芥川の様相を浮かび上がらせている。教え子篠崎礒次によれば、摂政時代の昭和天皇が見学に訪れた際も「横向きになって、左足を上に持たせるように足をくみ、その左足の足首のところを右手で軽くにぎって」といういつものスタイルで講義したという。その講義ぶりは「ひどく高踏的」で、訳読も「ひどい意訳で、試験の答案などでも、ばか丁寧に直訳そのままのものには、点数がひどく苛酷であった」。校外演習でも「好きな生徒をつれて、「散歩に行こう」と誘っては、よく呑み屋にでかけた」。授業中でも課外の講話でも、軍人の養成学校であるにもかかわらず、軍人を「頭からこきおろ」してはばからず、近松の心中ものを引きつつ「男と女が愛しあって死ぬことは、人生にとって最も美しいもの」と語ったり、という調子であったという。篠崎は、「生徒たちは重い漬物石のような武官教官ばかりの多い中に、芥川、豊島（与志雄　注付加）の、若いピンポン玉のように軽くハネかえるような教官を迎えたことが、当時どれほど嬉しかったか、何十年の後の現在まで忘れられぬ印象を持っている」と語っている。〈自由〉な海軍の気風に芥川龍之介も一役買っていたということになる。〈教官〉として、かなりはねっかえりであったよう

だが、「川上教頭」が相当な人物で、「憤慨する武官教官をおさえて、芥川教官の発言に干渉しようとはしなかった」という。そればかりか、芥川の行き過ぎの後始末をいちいち処理していたという。「敗戦教官」というのは生徒たちがつけたあだ名で、新任早々、「生徒の士気を鼓舞激励する」機関学校の英語教材を一掃して、謄写版を使って「敗戦の物語」「衰亡の歴史」の教材ばかりを読んだことから発しているという。軍事の素人芥川の「日本軍の在り方の大きな欠陥」に対する批判からのことのようだが、芥川なりの情熱を傾けていたのである。

機関学校は現在の三笠公園、横須賀学院の一帯にあった。「その突き当り」は現在、旗艦三笠が繋留（といってもコンクリートで固められてしまっているが）されている付近。機関学校の痕跡はほとんどないが、横須賀学院構内に碑があり、「海軍機関学校跡　記念碑建設の由来　海軍機関学校の沿革は明治二年に遡るのであるが明治三四年九月一日白浜校舎が現在地に落成し日夜機関生徒の訓育にあたりその後大正一二年九月一日関東大震災により校舎を全焼し江田島に移転するまでの二二年間延べ一、三二四名の卒業生を送り機関科将校揺籃の地として寔に意義深く記念すべき場所であるので当横須賀学院のご厚意と同窓生諸賢の熱意によって校跡を後世に残したく旧校庭の一角にこの記念碑を建立した次第である」とある。

このあたり一帯は横須賀でも景勝の地であり、百閒のスケッチは短文ながら、その様相をよく映し出している。陸軍とは違って、職名に「殿」をつける慣習が、海軍にはなかった。「芥川龍之介が老校長と張り合った時「校長」「しかし校長」としきりに呼びかけた声の調子が、かすかに耳の底に残っている」と記述する百閒の調子も懐かしげである。

第一次大戦後、まだ日中戦争の兆しもない時代、軍港都市横須賀は、新婚生活ということもあって、つかの間の幸せに満ちた空間であったようである。晩年近くの灰色の心象風景のなかに、しかし、文夫人の回想、「引き上げたのは一生の誤りであった」という横須賀への愛着を漂わせた回想が〈保吉もの〉の底に流れていることを確認しておくことは重要である。

「灰色の風景」は後年の回想なのであって、まだ文壇にデヴューしたばかりの若い芥川龍之介にとって、心地よくないことはない横須賀は、「こんな所にいたら時代おくれになる」という焦りを募らせる空間でもあった。大正六年の第一創作集『羅生門』刊行の翌月七月には日本橋「鴻之巣」で出版記念会が佐藤春夫の発起で、漱石門だけではなく、谷崎潤一郎や有島武郎なども加わって開かれたが、むろん、第一創作集『羅生門』は第一創作集にすぎないと意識されていたはずである。

漱石門下の「九日会」のみならず、「三十会」（岩野泡鳴主宰、宇野浩二・広津和郎の「奇蹟」グループが中心、江口渙・菊池寛・久米正雄ら「新思潮」もこれに加わり、小島政二郎や佐々木茂作や南部修太郎など「三田文学」のメンバーも参加した。大正期新人作家の勢ぞろいという感がある。また、秀しげ子もこのメンバーであった）や「星座」（佐藤春夫主宰の同人雑誌）、グループと関わりを持ち、さらには谷崎潤一郎訪問など、頻繁に上京して、中央文壇、特に新人の動向をうかがっていた。わざわざ我孫子にまで訪問したのはやや後の事になるが、むろん、志賀直哉への目配りも怠っていない。

〈生活の残滓〉を超えての〈刹那の感動〉に芸術の主題を求めた「奉教人の死」「戯作三昧」が、初期芥川のひとつのピークとなっている様相は、三好行雄などによって丁寧に論じられているが（注一）、もっとも芥川龍之介的ともいえる、日常の中にふときざしてくるエゴイズムの心理をきめ細かに描いた「或日の大石内蔵助」や「枯野抄」も横

須賀時代に書かれた。漱石門の鈴木三重吉に誘導されて、「蜘蛛の糸」などの児童文学の領域にも芥川龍之介は応えていった。〈芸術至上主義〉を高らかに宣言した、初期芥川の最高傑作「地獄変」は言うまでもないが、停滞を拒んで、「開化の殺人」や「開化の良人」といった〈開化期もの〉も試み、ついには機関学校退任のころからは、「毛利先生」や「あの頃の自分の事」などを書き、現代小説に立ち向かおうとする姿勢を取るに至っている。

こうした意欲的な執筆活動にとって、比較的自由とはいえ、やはり機関学校の教官生活は、かなり負担であった。「全速力で小説を書いている　なかなか苦しい　第一朝の早いのにはやりきれないぜ　六時に起きるんだからな　久しぶりで辞書をひいて訳を考えていると一高時代を思い出す」（久米正雄宛大正五・一二・三）。「学校と小説と両方一緒じゃ　実際少し仕事が多すぎます　だから将来は一つにする気もあります　もありますじゃない　気が大いにあるのです」（塚本文宛大正六・九・一九）。

こうした〈創作三昧〉の充実した苦しい生活の中で、短歌作りや俳句作りは、師漱石の漢詩と同じく、芥川龍之介にとってはなぐさめであった。芥川龍之介の俳句については多くの考察があるが、この時期の玩具としての短歌は、器用な才能を伺わせて、いかにも芥川龍之介風である。

斉藤茂吉調（モズク採り）

宵月は空に小さし海中にうかび声なき漁師の頭

北原白秋調

漁師の子ONANIZUMしてひるふかし潟はつぶつぶ水はきらきら

吉井勇調

夕月夜片目しひたる長谷寺の燈籠守もなみだするらむ

与謝野晶子調

星月夜鎌倉人の恋がたり聞かむととべる蚊喰鳥かな

そもそも大正七年二月、師漱石に学んで大阪毎日新聞社と契約を結んだころから、芥川は作家生活に専念したいという気持ちになってきているのであり、また、大正七年十一月、第一次世界大戦の休戦条約の成立以降、軍備拡大計画が進行し、機関学校も当然その波に巻き込まれることになったことも、あるいは機関学校英語教官退任に関係しているかもしれない。「公務の煩雑になることを予想し、また作家活動に専心しにくくなることを予想して辞任の意思を固めてくる。慶應大学の方へ意を向けたのもこのころであったが、果さなかった」（『追跡芥川龍之介・その横須賀時代』）という経緯もあったが（小島政二郎あて書簡　大正七・九・二二、同一〇・二一、大正八・二・二三）、一九一九（大正八）年三月、辞表を出し、「最後の授業をしてから教科書出席簿その他皆ストーヴに抛りこんで」（岡栄一郎あて　大正八・三・二八）、横須賀を去ることになる。「入社の辞」が、「不良教師」云々は挨拶としても、芥川の心情をよくあらわしているだろう。芥川龍之介が横須賀時代を直接に振り返った、いわば〈正史〉的第一次資料である。

予は過去二年間、海軍機関学校で英語を教えた。この二年間は、予にとって、決して不快な二年間ではない。なぜと言えば予は従来、公務の余暇をもつて創作に従事し得る恩典あるいは創作の余暇をもって公務に従事し得る恩典に浴していたからである。（中略）予はほかに差支えない限り、正に海軍当局の海のごとき

大度量に感泣して、あの横賀工廠の恐るべき煤煙を肺の底まで吸いこみながら、永久に「それは犬である」（It is a dog ナショナル・リーダー巻頭文）の講釈を繰返して行つてもよかつたのである。が、不幸にして二年間の経験によれば、予は教育家として、ことに未来の海軍将校を陶鋳すべき教育家としていくら己惚れてみたところが、到底然るべき人物ではない。少くとも現代日本の官許教育方針を丸薬のごとく服膺できない点だけでも、明らかに即刻放逐されるべき不良教師である。もちろんこれだけの自覚があつたにしても、一家眷族の口が乾上る惧がある以上、予は怪しげな語学の資本を運転させて、どこまでも教育家らしい店構えを張りつづける覚悟でいた。いや、たとえ米塩の資に窮さないにしても、下手は下手なりに創作で押して行こうという気が出なかつたなら、予はいつまでも名誉ある海軍教授の看板を謹んでぶら下げていたかも知れない。しかし現在の予は、すでに過去の予と違って全精力を創作に費さない限り人生に対してもまた予自身に対しても、すまないような気がしているのである。それには単に時間の上から言つても一週五日間、午前八時から午後三時まで機械のごとく学校に出頭している訳に行くものではない。そこで予は遺憾ながら、当局並びに同僚たる文武教官各位の愛顧に反いて、とうとう大阪毎日新聞へ入社することになった。（中略）春風はすでに予が草堂の簷を吹いた。これから予も軽燕とともに、そろそろ征途へ上ろうと思っている（大八・三）

初級英語教育の繰り返し（「それは犬である」）の退屈さ、「官許教育方針」への不満、武官教官との軋轢など、退官の理由についていろいろと述べてはいるが、要するに漱石先生に見習った方法で執筆に専念したいということであり、芥川文学は、教員生活の傍らというようなスタイルではいかんともしがたいほど充実した、そのピークを迎えていた。「現在の予は、すでに過去の予と違って全精力を創作に費さない限り人生に対してもまた予自身に対しても、すまないような気がしている」という昂揚感が決してメディア向けのサービスではなかったことは、海軍機関学校教官時代のテキスト自身が明白に物語っている。

（2）〈人生の残滓〉を超えるもの

横須賀時代のテキストのうち、「戯作三昧」（大正六年十一月）「地獄変」（大正七年五月）「奉教人の死」（大正七年九月）というテキストの系列が「刹那の感動」を主題とした〈芸術至上主義〉のテキストとして、初期芥川文学を代表するテキストであることは、今日の常識と言っていいだろう。

「戯作三昧」は、家族を含めて市井の人々のなかにあって孤独な芸術家が、「人生」の「残滓」を振り払って、〈芸術即人生〉の心境に入っていく、その姿を描いたテキストである。「僕の馬琴は唯僕の心持を描かむために馬琴を仮りたものと思はれたし」（渡辺庫輔宛書簡　大正十一年一月一九日付）とあるが、「竜之介自身の作家としての思想なり感情なりを、馬琴に託して盛りこむことにあった」と、早く吉田精一が指摘した通りのものであろう（『近代文学注釈体系　芥川龍之介』有精堂　一九六三）。

近江屋平吉との対話（二節・三節、以下「節」略）で示されたものは作者にとっての読者の厄介さの問題であろうし、眇目の男の「馬琴なんぞの書くものは、みんなありや焼き直し」で、一九や三馬のように「天然自然の人間が出て」おらず、「小手先の器用や生噛りの学問

で捏ちあげたもの」という「フイリツピクス」（悪罵）（四）が、初期芥川龍之介に向けられた批判を馬琴に重ねたものであることは言うまでもない。

書肆和泉屋市兵衛の原稿依頼に書けないと断る馬琴に、商人和泉屋市兵衛はあの手この手で書かせようと、獄門になったばかりの鼠小僧次郎太夫の話題を持ち出したり（後に芥川は「鼠小僧次郎吉」（大正八年一二月）を書いた）、種彦の評判を持ち出したりして、躍起になっている（六・七・八）。書肆和泉屋市兵衛という「メディア」によって作者もテキストも左右されるしかない状況は、既に馬琴の時代からあらわになっていたということだろうが、より正確には芥川龍之介自身が置かれていた状況でもあったはずである。和泉屋市兵衛を適当にあしらいながら馬琴は、「下等な世間に住む人間の不幸は、その下等さに煩はされて、自分も亦下等な言動を余儀なくされる」と気分は沈むばかりなのだが、「下等な世間に住む人間の不幸」とは、芥川龍之介の常套句のようなものだとして、さすがに和泉屋市兵衛は戯画化されているとはいえ、文壇や商業ジャーナリズムと関わって生きるしかない大正作家の宿命を、芥川龍之介はこういう虚構の中で捉えようとしている。

長島政兵衛なる作家志望の地方青年の弟子入り希望の逸事の記憶もまたその繰り返しである。己の勝手な欲望が、思い通りにならぬと見るや「猛烈な非難」を浴びせかけるこの青年の「情無さ」は、しかしこれに振り回されて、激しい言辞を彼に浴びせてしまう「彼自身に対する情無さ」でもあった。あるいはまた、馬琴の「或疑問」、己の小説は「先王の道」の芸術的表現であって、「先王の道」と「芸術」に矛盾はないが、「時折磅礴する芸術的感興に遭遇すると、忽ち不安を感じ出した」という芸術と倫理の問題も、「地獄変」に見られるように、馬琴に仮借しての初期芥川龍之介自身の問題でもあった。

「下等な世間に住む人間の不幸」と言いつつ、「下等な世間」に夢を賭ける姿勢も、「毛利先生」や「蜜柑」に共通する。己と同じく、「行ける所迄行くより外はない」と覚悟している渡邉崋山という〈同行者〉の存在によって、馬琴は「一種の力強い興奮を感じ」、「行ける所迄行」って「討死」しようと覚悟する。馬琴と異なり、崋山にとって「世間」は政治的事情をも意味しており、そのことを馬琴は理解しているのだが、こういう友人関係を結べる以上、世間は「下等」というばかりでもない（一〇、一一、一二）。

崋山との対話は馬琴に「興奮」をもたらし、その興奮を弾機に馬琴は「八犬伝」の稿を書き継ごうとするのだが、より根源的な疑問――自己の才能への不安に襲われ、「難破した船長の眼で、失敗した原稿を眺めながら、静かに絶望の威力と戦いつゞけ」（一三）る。そういう彼を救ったのが孫の太郎の「勉強しろ。癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ」という、浅草の観音様が言ったという、からかいの言葉なのだが、この言葉によって馬琴は「厳粛な何物かが刹那に閃いた」。「この時、この孫の口からかう云ふ言葉を聞いたのが、不思議なのだという（一四）。こうして馬琴は〈戯作三昧〉の心境へ入っていく。

あるのは、唯不可思議な悦びである。或は恍惚たる悲壮の感激である。この感激を知らないものに、どうして戯作三昧の心境が味到されよう。どうして戯作者の厳かな魂が理解されよう。こゝにこそ「人生」は、あらゆるその残滓を洗つて、まるで新しい鉱石のやうに、美しく作者の前に、輝いてゐるではないか（十五）

様々な〈人生の残滓〉を超えての馬琴の〈戯作三昧〉は、「唯僕の心持を描かむため」の理想の境地だったのである。たとえ女房のお百

の「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ」という呟きを末尾に置いたとしても。というより、この呟きを最も切実な〈人生の残滓〉として置くことによって、〈戯作三昧〉の境地を際立たせようとする、〈新技巧派〉としての昂揚をこそここに読みとるべきだろう。

横須賀時代には「尾方了斎覚え書」（大正六年一月）、「さまよへる猶太人」（大正六年六月）、「奉教人の死」（大正七年九月）「るしへる」（大正七年十一月）「きりしとほろ上人伝」（大正八年三月）と、多くの「キリシタンもの」を書きあげている。「尾方了斎覚え書」「さまよへる猶太人」「るしへる」という系列は悪癖の衒学趣味ないしエキゾチズムのもたらしたものにすぎないと言っていいが、「奉教人の死」は〈刹那の感動〉を主題としたテキストとして、これらのテキスト系列とは一線を画している。

とは言っても、衒学趣味が全く見られないというわけでもない。「「奉教人の死」の方は、其督教徒の手になった当時の口語訳平家物語にならつたもの」（「風変わりな作品について」大正十四年十二月）と自ら語っているように、まず文体の「風変わり」さにおいて際立ったテキストであるし、二における「予が所蔵に関る」以下の依拠資料の捏造も技巧や遊びというには、あるいは若さゆえの事と言っても、余りにも悪質というしかない。後年、「風変わりな作品について」において、「日本の聖教徒の逸事を仕組んだものであるが、全然自分の想像の作品である」と告白しているにしても。言われているように、新詩社の長崎旅行に始まるエキゾチックな南蛮趣味に便乗しての試みであることは否定のしようもない。中村孤月の「海軍機関学校教官の余技」（読売新聞　大正六・一・十三）という批判は「尾方了斎覚え書」をめぐってのものだが、細田源吉の「好事家的傾向を排す」（『中央公論』臨時増刊号大正七年七月）などの批判が相次いだのも不当とは言い切れないのかもしれない。

典拠については吉田精一の鷗外『諸国物語』説、木村毅の白隠和尚の逸話説、上田哲の「聖マリナ童貞伝」、柊原一の「サンタマリナノ御作業」安田保雄のラマルティーヌ「ジョスラン」フランシス「シルヴェストボナールの罪」など様々だが、いずれも仮説に過ぎず、結局「全然自分の想像の作品である」という説に従うしかない。

前半部は全体的に推理小説的なスタイルで書きすすめられている。「ろおれんぞ」の出身・生育環境などは一切隠され、それは最後まで明かされることはない。故郷は「はらいそ」（天国）父の名は「でうす」（天主）という自身の説明は、信仰の堅固さにおいて担保され、「天童の生れかはりであらうず」と、人々は受け入れていく。

それに続く場面は、傘張の翁の娘との関係とその身ごもり、そして「ろおれんぞ」に対する破門と迫害の場面。この試練によって後半部の殉教者としてのイメージがくっきりと浮かび出る、そのための布置である。

こうして火事における殉教の場面がクライマックスとして展開され、そして「ろおれんぞ」が女性であることが明かされる。こういう展開については志賀直哉の批判があった。

> 作中人物同様読者まで一緒に知らせずにおいて、仕舞ひで背負投げを食わすやり方は、読者の鑑賞がその方へ引つ張られるため、そこまでもつていく筋道の骨折りが無駄になり、損だと思ふと私は云つた。読者を作者と同じ場所で見物させて置く方が私は好きだ。（略）私は夏目さんの物でも作者の腹にはつきりある事を何時までも読者に隠し、釣つて行く所はどうも好きになれなかつた（「沓掛にて」）

根本的な文学観の相違と言って済ますことができない問題で、推理小説に関心を示し、みずから多くの推理小説を書いた芥川と、推理小説に一切の興味を持たず、例えば「剃刀」や「范の犯罪」など、謎めいた世界もあくまでも〈人間の行為〉として、リアリスティックに追い求めた志賀直哉（注二）との相違が、こういうところにもあらわになっている。「正直」な志賀直哉から見れば、こういう〈トリック〉は、つまらぬ作為にしか見えなかったということである。

〈トリック〉の問題にとどまらない。いかにもという作為性は、初期芥川龍之介に見られる一つの傾向であって、「地獄変」に対する〈ボンバスティック〉に過ぎるという自身の感想は、あるいはこのテキストに対しても持ったかもしれない。火事における殉教について後年の芥川は、

その火事のところは初めちつとも書く気がしなかつたので、ただ主人公が病気か何んかになつて、静かに死んで行くところを書くつもりであつた。ところが、書いてゐるうちに、その火事場の景色を思ひついてそれを書いてしまつた。火事場にしてよかつたか悪かつたかは疑問であるけれども。（「一つの作が出来上るまで」大正九年三月）

と語っている。そういう構成で書いて〈殉教の美〉が描き切れたかどうか疑問も残るし、こういう問題はついに答えが出るというのでもなかろうが、芥川龍之介が書きたかったのは、やはり最後の数行、

なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極まるものぢや。暗夜の海にも譬へようず煩悩心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫の中に捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。

という〈刹那の感動〉にあるだろう。ついにわからぬ「ろおれんぞ」の出生・生育の謎も、「しめおん」の友情も、また「えけれしあ」（寺院）の「すぺりおれす」（長老）や「いるまん」（法兄弟）たちの非難も、町衆による「刀杖瓦石の難」も、そして傘張の翁の娘の虚偽も、〈こひさん〉（告白）も、すべて〈人生の残滓〉なのであって、それらのすべてを超えたところに「ろおれんぞ」の微笑があるというのである。むろんこの微笑は宗教に支えられた微笑だが、それに限定されてのものではないことは云うまでもない。この微笑が刹那のもの、瞬間のものであっても「ろおれんぞ」はその瞬間においてすべての人生を味わいつくしている。

後年芥川は、「殉教者の心理はわたしにはあらゆる殉教者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。」（「西方の人」昭和二）と語っている。〈病的な〉という認識が何を語っているのか、テキストのありようを〈ボンバスティック〉と見るかどうかという問題とともに、今は保留しておくしかないが、「奉教人の死」を書く作家自身が、ある昂揚感の中にいたことだけは否定できない。

「戯作三昧」の芸術家の栄光と孤独、あるいは栄光の中の孤独というテーマは「枯野抄」の主題でもある。このテキストについての成立事情についても芥川龍之介は、「一つの作が出来上るまで」で語っている。

はじめに考えていた構想や主題が全く別のものになってしまうこともあれば、内容が微妙に変わってしまうこともある。最初に書こうとした「土瓶がそのまま出来上がることもある」。しかし「その土瓶

にしても蔓を籐にしようと思つてゐたのが竹になつたりする」こともあり、「枯野抄」はそういうテキストなのだという。書こうとしたものは「芭蕉が死ぬ半月ほど前から死ぬところまで」だが、「勿論、それを書くについては、先生の死に会ふ弟子の心持といつたやうなものを私自身もその当時痛切に感じてゐた。その心持を私は芭蕉の弟子に借りて書かうとした」。当初は「芭蕉の死骸を船に乗せて伏見に上つて行くその途中にシインを取って、そして、弟子たちの心持を書こうとした」が果たせず、「「芭蕉涅槃図」からヒントを得て、芭蕉の病床を弟子たちが取り囲んでゐるところを書いて漸く初めの目的を達した」のだという。

だとすれば、「土瓶」すなわち〈主題〉は「先生の死に会ふ弟子の心持」であり、蔓すなわち〈構想〉（シイン）は、伏見への船中から、蕪村の筆になる「芭蕉涅槃図」ふうのものへと変わったが、つまり、〈主題〉自体は「先生の死に会ふ弟子の心持」であり、それは変わることはなかったというのである。

「先生の死」、（直接的には漱石の死が呼び起こしたものと芥川は語っているが）が炙り出す「弟子の心持」が人間に潜むエゴイズムであることは言うまでもなく、しかし、一口にエゴイズムと言ってもその様相は様々であり、そのいわば〈百態〉を絵画的明晰さにおいて描き出して見せたところにこのテキストの面白さがある。「ここで描かれているさまざまな反応は、ひとりの人間に同時に喚起された心象風景と見る方がはるかにすっきりする」（三好行雄）という意見は、〈栄光の中の孤独〉のテキスト「或日の大石内蔵助」に徴してみても諾える意見だが、素直に百人百態の面白さと見ても一向に構わないだろう。

死の瞬間に訪れる「来る可きものが遂に来たと云ふ、安心に似た心もち」（木節）、「垂死の芭蕉の顔」に感じる「云ひやうのない不快」（其角）、師の介抱に尽くしたという自己満足（去来）、慟哭のなかの「一種の誇張」に対して感じる不快（乙州）、「師匠を悼まず師匠を失った自分たち自身を悼んでいる」と解析する「皮肉屋をもって知られた東花坊」（支考）、死に対する恐怖に襲われるばかりの惟然、師の「人格的圧力の桎梏」からの「解放の喜び」（丈艸）。これらが臨終にいたる芭蕉最後の様相に対する門人の手記や談話を収録した文暁の偽作「花屋日記」によるものであることは、芥川自身が語っているところだが、今ここでは「花屋日記」その他の原拠との差異を測る余裕はない。だが、これらが、現在なら間違いなくトラブルを引き起こすような、随分思い切った〈創作〉であることは言うまでもないことであろう。あるいは「ひとりの人間に同時に喚起された心象風景」ならぬ、漱石門下の人びとを密かに想定しての設定かもしれないなどという三流週刊誌並の興味がわかないでもないが、むろん愚論である。

いずれにしても、モデル詮索は意味をなさない。「枯野抄」は個の内面に蠢くエゴイズムを理知の眼によって犀利に捉え、文学的出発以来の〈新技巧派〉あるいは〈新現実派〉のテキストに磨きをかけた、そういうテキストである。やや逆説めいた言い方になってしまうが、エゴイズムを理知によって捉え、テキストとして構成していく作家の状況それ自体は、ある充実した状況にあるのであって〈エゴイズムの苦悩〉の状況下にあるわけではない。

テキストの大半をエゴイズムの〈百態〉に費やしつつ、しかしそれらは「布置」に過ぎないのであって、三好行雄が「彼らのエゴイズムが実は〈枯野〉に窮死した芭蕉の孤独を実現するためにのみ必要だったという小説の脈絡だけは正確におさえておかなければならぬ」、「こうした技巧に惑わされてはならぬ。その奥にたゆたうのは人生の枯野に窮死する芭蕉への感動に他ならない」と指摘している通り、それらをも〈人生の残滓〉としての芭蕉の孤独の中の栄光を描くことにこそ

モティーフがあったはずである。念のため繰り返せば、宿痾のように取りつかれたエゴイズムをも〈人生の残滓〉とし、その向こうにある芸術家の栄光を捉えようとするある昂揚感の中に作家は立っていたということである。

芸術家小説ではないが、「或日の大石内蔵助」も百人百様の〈人生の残滓〉を払っての〈栄光の中の孤独〉を描いたテキストという意味で、「枯野抄」の姉妹作であるとみていい。

細川家家臣の手になる「堀内伝衛門覚書」（『続史籍集覧』等所収）を主たる依拠資料とするこのテキストも、多くの同時代評に見られる通り、大石内蔵助の実像ではなく、主題に合わせて作り上げた虚像であることは、いちいち立証するまでもない。

このテキストもまた、いかにも〈技巧の美学〉にささえられた一編である。冒頭に描かれた「老木の梅の影」の静寂な世界と内蔵助の「安らかな満足」に対応する形で、梅花と突き抜けるような青空の前に佇む彼の「冴返る心の底へ沁み透つてくる寂しさ」と最後が結ばれる。常套とはいえ、いかにも見事な日本的感性に支えられた技巧である。その間を挟むものが、「満足」が「寂しさ」に至りつく大石内蔵助の心境の推移であり、それこそがこのテキストの実質である。

その推移は三つの段階、あるいは要素によって、心理的分析が施されている。第一は、事件が生んだ仇討の流行によってのもの。内蔵助にとっての〈栄光〉は、あくまでも個人レベルないし集団内部のレベルのものであって、彼の「満足」はあくまでも対他的ないし社会的なものではなかった。自己完結的な行為が対他的・社会的なものに転化していくことへの戸惑いとかすかな嫌悪。そのことに気づかない「同志」たちとの違和感。内蔵助にあって、〈栄光〉は〈個〉のものであることによって絶対のものであるということである。

第二に、「変心した故朋輩の代価で、彼らの忠義が褒めそやされる」ということからくる不愉快。内蔵助にとって、意識せずとも、「忠義」は、不忠によって忠が決定されるような相対的なものであってはならず、自己完結的に絶対のものでなければならなかった。「同志」たちの脱落者に対する激しい叱責への違和感。「何故我々を忠義の士とする為には、彼らを人畜生としなければならないのであらう」という疑念。

そして第三に、放蕩を〈佯狂〉と見る他者と、しかし〈駘蕩〉たる時間でもあったという自己の事実との背馳。ここでも内蔵助が苦しんでいるのは、自己の行為が自己の思いとは全く別に対他的・社会的には全く別なものに転化していってしまう、そういう世の中の在り方に対する違和感である。

芭蕉にしろ内蔵助にしろ、彼らの〈栄光〉それ自体がテキストに主題として直接書かれることはないにしても、門人や同志たちのさまざまな思惑を超えて芭蕉や内蔵助の〈栄光〉があったというテキストの構図になっていることは言うまでもない。それは他者の理解を超えたものであり、あるいは他者の理解を不要とするものであり、自己完結的に絶対的なものである。言い換えれば、他者にしろ社会にしろ、〈人生の残滓〉なのであって、エゴイズムを超える道を、芥川龍之介はこういう理念によって紡ぎ出そうとしている。こういうテキストないし作家のあり方がある昂揚した精神のもとで展開されていることは十分に注意されていい。しつこいくり返しだが、〈エゴイズムの苦悩〉一色に芥川文学を塗りつぶしてはならない。

右に多少具体的な分析を試みてきた諸テキストの頂点に立つものとして、「地獄変」が位置していることは既に明らかだろうが、「地獄変」自体の分析と評価は別途の事としなければならない。「地獄変」

は、〈人生の残滓〉を超えての〈芸術の栄光〉を描いたテキストだが、問題は、何が〈人生〉かということである。〈人生〉は、政治的権力から〈炉辺の幸福〉に至るまであらゆる局面を含んでいる。芥川は前記諸テキストにおいて、〈刹那の感動〉としてそれを描き続けてきたのだが、このテキストにおいては、ともかく大きなスケールにおいて全面的にその問題に挑戦しようとしたわけである。芥川は、例えば同時代を生きた谷崎潤一郎とは対照的に、芸術の栄光を描きつつ、即座にそれを〈ボンバスティック〉と見返してしまうような心性の持ち主だが、それでもなお全体として、横須賀時代は最も昂揚した〈芸術至上主義〉を歌いあげた時期だったと言っていい。

こういう迷いのない作家の姿勢を理論づけているのが「芸術その他」（大正八年十月）であることも、周知のことであるが、論旨の関係上、あらためてその概略を眺望してみたい。二二のフラグメントからこの芥川初期文学の〈理論〉は構成されているが、総体としてみれば、〈意識的芸術活動〉の主張と言うことになろうかと思う。むろん作家の〈理論〉だから、実際は〈文学理論〉一般ではなく、初期芥川自身の創作の〈信念〉であり、あるいは、これらは何よりも明瞭なテキストに対する自註といった性格を帯びてもいる。

〈意識的芸術活動〉の主張は、例えば「無意識的芸術活動とは、燕の子安貝の異名に過ぎぬ。だからこそロダンはアンスピラシオンを軽蔑したのだ」（17　原文にはないノンブルを付した。以下同。）というような一節に顕著であろう。倪雲林が松の枝を「伸した為に或効果が生ずる事」を「百も承知してゐた」（16）ことも、セザンヌが、「ドラクロアが好い加減な所に花を描いたと云ふ批評を聞いて、むきになって反対した」（18）ことも、〈理論〉ならぬある確かな感覚において、十分以上に自覚的であったのだと。

〈意識的芸術活動〉は、当然〈技巧〉の積極的主張を伴う。「芸術は表現に始まって表現に終わる。画を描かない画家、詩を作らない詩人、などと云ふ言葉は、比喩として以外には何らの意味もない言葉だ」（9）、「凡て芸術家はいやが上にも技巧を磨くべきものだ」（19）、「危険なのは技巧ではない。技巧を駆使する小器用さなのだ」（21）などと。芥川における技巧の偏重は様々な形で批判され続けており、特に初期において、実際は衒学趣味に堕すことも多いこの技巧の偏重について、私自身も疑問は抱いているが、ここに言う〈技巧〉は、無論そういったものではない。

何のための〈意識的芸術活動〉かといえば、むろんひたすら〈芸術〉のためであり、〈芸術至上主義〉は、繰り返し主張される。「芸術家は何よりも作品の完成を期さねばならぬ」（1）と。しかし、〈技巧〉に支えられた〈意識的芸術活動〉という〈芸術至上主義〉の確信に満ちたこの「芸術その他」にあって、不安が萌していないかと言うと、決してそうではない。

> 僕らが芸術的完成の途へ向はうとするとき、何か僕等の精進を妨げるものがある。偸安の念か。いや、そんなものではない。それはもつと不思議な性質のものだ。丁度山へ登る人が高く登るのに従つて、妙に雲の下にある麓が懐しくなるやうなものだ。かう云つて通じなければ――その人は遂に僕にとつて、縁無き衆生だと云ふ外はない。（5）

芥川龍之介は常に〈雲の下にある麓〉の〈懐し〉さに引きずられてきた作家であり、「芸術家は非凡な作品を作る為に、魂を悪魔へ売り渡す事も、時と場合ではやり兼ねない。これは勿論僕もやり兼ねないと云ふ意味だ」（12）と言いつつ、自殺から逆算するのではなくとも、

そういう強靭さとは遂に無縁の作家であった

こういう微妙な問題点をはらまないではないが、しかし全体として「芸術その他」は、昂揚する初期文学に最もふさわしい〈理論〉であった。

晩年夫人に語った横須賀・鎌倉を引き上げたことが間違いだったという感想の根拠は、何よりも右に見てきたテキストや〈理論〉の存在が物語っている。後に保吉ものでその一部が描かれた機関学校内での教官としての仕事や出来事、田端の家での私生活のいざこざ、それらすべては創作の充実によって一挙に乗り越えられている。まさしく〈戯作三昧〉ならぬ〈創作三昧〉なのであって、芥川龍之介にとって、ただ時間の不足だけが不満だったと言っていいかと思う。それ以外に理由を求めるのはすべて愚論であろう。

（3） 聖少女幻想――「蜜柑」を読む――

横須賀を離れる頃、芥川龍之介は「毛利先生」や「あの頃の自分の事」などを書き、主として王朝期に材をとった「歴史小説」から離れつつあった。それは、〈人生の残滓〉を超えた〈刹那の感動〉を描くという〈芸術至上主義〉を、「地獄変」に封印するというものでもあったというふうに一般的には捉えられている。しかし、題材の取り方は変わっても、一端完成された作家の「主題」がそうそう変更されるものでもない。横須賀時代の最後のテキスト「蜜柑」は、さりげない日常の中に題材をとるという新しい局面と、〈人生の残滓〉を超えた〈刹那の感動〉という芥川本来の主題とが重なりあった、さまざまな意味で記念碑的なテキストである。

このテキストは、大正八年五月「新潮」発表の際には、「沼地」とともに「私の出遇つたこと」という総題での一編であった。芥川の直接的な体験を素材としていることを、菊池寛が「文芸作品の内容的価値」というポレミカルな文章に芥川からの聞き書きとして記しているが、吉田精一もまた、そのことに関連して、「作者の精神の起伏が実にみごとに捉えられ、描かれている」（近代文学注釈体系『芥川龍之介』解題　有精堂）としている。大がかりで仰々しい舞台装置ではなく、日常的な「私の出遇つた」小さな出来事から切り取られた主題は、しかし、むろん「ありのままの現実」ではなく、日常の中の日常を超えた〈刹那の感動〉によって再構成されようとしていることを見失ってはならない。と同時に、ごくごく短いものながら、「蜜柑」は、〈ユートピア〉小説としての定型性を見事に体現したテキストになっていると、私として判断している。以下、そのような視座から、この高名なテキストを改めて読み直してみたい。

ある曇つた冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍しく私の外に一人も乗客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォームに今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられて子犬が一匹、時々悲しさうに、吠え立ててゐた。私の頭の中には云ひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりとした影を落としてゐた。

この書き出しにも、いくつかの打つべき注はある。

まず第一に、このテキストも平岡敏夫が指摘した〈夕暮れの文学〉であるということである（『「夕暮れ」の文学史』　おうふう二〇〇四）。平岡は日本古典に〈夕暮れ〉の美学の伝統の淵源を博捜して、その伝統を芥川も強く受け継いでいることを論証してくれてい

るが、〈夕暮れ〉とは、私の用語でいえば、時間的〈境界〉の世界である（『文学の風景　都市の風景』蒼丘書林二〇一〇）。それは日常的・現実的時間であるとともに、昼でも夜でもないあいまいな時間であり、したがって、例えば鏡花の諸テキストに見られるように、日常的・現実的時間を超えて、何事かが起こることを確実に予感させる時間でもある。

夢のような時間、夢のような出来事は、灰色の現実への絶望感が前提である。芥川にとって、「厭世的な渋面や、逆説的な言いまわし」（吉田）が一般的とはいえ、見てきたように、横須賀での暮らしは不満を残しつつ、そう嫌厭一方のものではなかった。

本来軍事目的で設置された横須賀線、横須賀駅が横須賀海軍工廠のためのものであったことは、半島に張り巡らされた引き込み線を見ても明らかなことだが（地図参照）、軍事目的のこの駅が階段を持たない特殊な構造をなしていることも鉄道ファンにはよく知られている。万を超える職工を抱えた工廠が吐き出す煙と油のにおいは、芥川にとっては、先に「横須賀小景」を引いたが、いわば横須賀の〈原風景〉であった。しかし、だからと言って、「まるで雪曇りの空のやうなどんよりとした影」は、単なる横須賀風景のスケッチであるだけでもない。

軍人たちへの訪問客で都市横須賀がにぎわった事情を『横須賀市史』は記述しているが、『横須賀市史』の叙述に反した、己の心象風景を投射した寂しげな犬の姿とともに、「今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つ」た、閑散とした風景のスケッチは、あくまでもテキストの出発点である。〈人生の残滓〉という認識の象徴としての風景。「私の頭の中」の「云ひやうのない疲労と倦怠」という記述は、根拠も示されず、押しつけがましくややうるさいものの、「どんより」とした風景の中の、何かを喪失したような「ぼんやり」とした気分でテキスト冒頭部を塗りつぶしているところに、私たちは作家の心情ではなく、芥川の〈技巧〉を見てとらなければならないだろう。その先に、その心象風景を一変させるドラマが待ち受けている（しかし、後述するように、「蜜柑」と違って〈保吉もの〉においては「何事か」はついに訪れることはない。色彩を失った〈灰色の風景〉は、登場人物たちの喪失感をひたすらに浮かび上がらせるものとしてしか作用しない）。

小高い山々に囲まれた横須賀が、軍事がらみで日本で一番トンネルの多い町である事情については既に述べた。そのトンネル内でドラマは始動する。

> ふと何かに脅かされたやうな心持がして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けやうとしている。（略）しかし汽車が今将に隧道の口へさしかゝからうとしていることは、暮色の中に枯草ばかりの明るい両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点の行くことであった。（略）すると間もなく凄じい音をはためかせて汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲りだした。元来咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。

周知の場面をわざわざ取り上げたのは、このトンネル内の場面が、典型的な〈境界〉空間となっていることをあらためて確認したいから

に他ならない。「境界記号は等質に見えた一つの空間を、二つの相互に異質な空間へと変容させる。二つに分節化されることによって、それぞれの空間の〈意味〉が鮮明化され、風景が〈内面化〉される」。「境界を超えるという行為は、何者かに変身ないし変貌する行為であって、〈通過儀礼〉めいた行為を伴うことになる。外へ出る、あるいは中に入るということは、すなわち禁忌を破るということであり、そのためには常に試練にさらされる。その行為が行われる時間も、限定された特別な時間でなければならない」（前記『文学の風景　都市の風景』）。現実の〈灰色の風景〉と、鮮やかに蜜柑が夕日に輝く風景という、トンネルを境界とした「二つの相互に異質な空間」は、同時に「私」の〈内面化〉された風景の姿でもある。

民俗世界における通過儀礼それ自体はなかなかに不可解な場合が多い。トンネル内での少女の行為の「理由が私には呑み込めなかった。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれとしか考へられなかつた」。冒頭部からあらわであった「私」の「少女」への嫌厭感は、かくして、ますます「険しい感情」を募らせることになるのだが、これは「私」にとっての一つの「試練」であった。「高野聖」の主人公は蛭や蛇の「試練」を受けなければならなかった。「濹東綺譚」の作者も、一見無用と思われるような、橋のたもとの交番巡査の職務質問という「試練」の場面をわざわざ用意していた。「伊豆の踊子」の天城トンネル入り口の茶屋の水膨れした奇怪な老人の例をここに加えてもよい。この場面も、典型的な「試練」となっていることを見落してはならないだろう。境界を越えて〈向こう〉に行き着くためには、こうした〈通過儀礼〉のなかだちが必要であった。

現実としての色彩を失った〈灰色の風景〉、トンネルという〈境界〉空間で演じられる〈通過儀礼〉、こういうテキストとしての布陣をしっかりと敷いて、〈蜜柑〉のドラマが演じられる。ドラマ自体は一瞬のことであり、そういうものとして、〈刹那の感動〉という初期芥川文学のテーゼは不変なのだが、その〈刹那の感動〉は、それに向けての布陣の鮮やかさも含めて、維持されたまま完璧である。トンネルを超えても、「見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗だけが懶げに暮色を揺つていた」。突然現れた頬の赤い三人の男の子も、「この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。そうしてこの町はづれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた」。〈境界〉を越え、〈通過儀礼〉も済んだはずなのに、「灰色の風景」は連続したままであるかのようである。

するとその瞬間である。窓から半身を乗り出してゐた例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして勢いよく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかりの暖な日の色に染まつてゐる蜜柑がおよそ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つてきた。私は思はず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懐に蔵していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労苦に報いたのである。暮色を帯びた町外れの踏切と小鳥のやうに声をあげた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。（傍点　付加）

「暮色を帯びた」風景であるにもかかわらず、「暖な日の色」と「乱落する蜜柑の色」に限どりされた風景の鮮やかさは、冒頭部の〈灰色の風景〉とみごとなコントラストをなしている。さらにまた、傍点部「瞬間」「忽ち」「刹那に」「瞬く暇もなく」といった修辞にも目を向け

たい。〈刹那の感動〉に焦点を合わせた文体は、テキスト冒頭部の、〈現実〉の隈どりを欠いた時間意識と対照をなしている。「私」は、〈小娘〉をまるで別人かと見紛うばかりなのだが、彼女は「相不変皺だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱へた手に、しつかり三等の切符を握つ」て、私の前の席へと帰っていた。〈小娘〉は〈小娘〉にすぎない。「私」の〈刹那の感動〉が、あたかも幻想であるかの如く、〈小娘〉を〈聖少女〉と見立ててしまったのである。

〈聖少女〉とは言いすぎかもしれないが、そう捉えてみたいのは、〈ユートピア〉小説としての〈夢の女〉の像をここにもみたいからであり（『文学の風景　都市の風景』第Ⅰ部第一章参照）、また平岡敏夫の「芥川作品をアメリカで読む」（『図書』一九九五・一〇）に触発されてのことでもある。平岡の「芥川作品をアメリカで読む」には、このテキストをめぐってのさまざまなヒントが隠されているように思える。平岡が紹介しているアメリカの学生の「蜜柑」をめぐってのレポートは以下のようなものである。

> 蜜柑は神の助力で自然の中に成長する。田舎娘がこの果実を投げたとき、それは神の加護によるものだった。田舎娘がこの果実を投げたとき、それは生を享けてだれにでも大切にされる、生まれる前の赤ん坊のようだった。新しい生命が輝かしいものであるゆえに、神は蜜柑を輝かしいものにし、三人の男の子のために記憶すべき刹那を造ろうとしたのだ。（原文は英文　平岡訳）

こういう感想が出てくるのはむろんキリスト教の文化風土のなかだからだが、平岡は、教科書とした日本人の訳者による［Then, as though from the heavenly skies upon the heads of little children fell five or six tangerines……］という英訳の問題もあるとみている。むろん問題は、「as though from the heavenly skies」という部分にある。芥川の原文は「（子供たちの上へばらばらと）空から降つてきた」であり、明らかに「意訳」なのだが、しかし、語り手「私」の一人称視点で描かれているこのテキストにあって、この部分だけ三人の男の子の視点へと視点が移行してしまっていることにも問題がある。端正な芥川文体において、かなり異例の現象である。この視点の二重性は、さまざまな解釈が可能だろうが、三人の子供たちの「小鳥のやう」な「声」という修飾と重ねてみれば、子供たちに訪れた至福の時間、至福の風景の修辞であることは了然としている。小鳥の修辞はこの時期の芥川にとって、ひとつの定型なのであって、「きりしとほろ上人伝」にあっては、「れぷろぼす」とともにあって、彼を祝福する、いわば天上の天使のような役割を「四十雀」が担っていた。

キリスト教的な解釈の是非は別にしても（キリスト教というなら、西方からの光に照らし出された光景に浄土的な光景を見ることも可能であろう）、この一瞬、この世ならぬ世界が立ちあがってしまっている、と風景を捉える語り手「私」とは別の、もう一人の語り手が発生してしまっている。つまり、語り手「私」が子供たちの視点と同化してしまっていて、〈混乱〉と言えなくもない部分だが、そう見るよりも、美しい一瞬の風景に対しての、〈刹那の感動〉はこう描くしかなかった、と見るべきだろう。〈刹那の感動〉を、虚構に託して〈夢〉として描くしかなかった作家が、ここでは現実の、嘱目の風景として描こうとする作家になっている。光景自体は感動的であったとしても、日常のなかでの、何気ない「私の出遇つた」風景にすぎないと言って言えなくもない。「意識の呪縛」にがんじがらめになっている神経がふと垣間見た、夢のような光景として、フレームアップさせられているのである

出来事は一瞬であった。少女はすぐに元の〈小娘〉に返り、「言い

やうのない疲労と倦怠」「不可解な、下等な、退屈な人生」（「人生」は、しつこく五つものレトリックによって否定される。芥川龍之介嫌いにとっては、たまらなくいやらしい記述であろう）を忘れることができたのも、「僅か」のことであった。洗っても洗ってもこびりつく〈人生の残滓〉とは、この作家にとって、いかんともしがたい宿痾というしかない。芥川のテキストは常にそうであり、このテキストも、そのことによって芥川という「作家」が担保されていると言うべきだろうが、しかし、作家作品論的な読み方とは別に、この部分を読むことも不可能ではない。〈ユートピア小説〉にとって、現実への帰還は定型の一つであった。だらだらと連続する「灰色の風景」、灰色の現実によって、境界の向こうの夢の世界は、夢としての一瞬の鮮やかさが保証されるというふうに。

しかし、人生を「疲労」「倦怠」「不可解」「下等」「退屈」とみている限り、いかなる幸福も訪れることはない。「下品」で「不潔」な、貧しく、ほとんど教育の機会にも恵まれなかったこともあって、作法もわきまえないこの愚かな少女にこそ鮮やかな時間が訪れるというテキストの構図には、「上品」な知性に対する懐疑が、すでに明らかであるようにも思える。人生への懐疑の罠に螺旋状的に落ち込むしかない「私」と、その「私」の真向こうにいる少女という構図に目をとどめておかなければならない。

「灰色の風景」としての現実、トンネルという明瞭な境界記号、そのトンネル内の「通過儀礼」、少女の〈聖少女〉への変貌、そして再び現実の侵入あるいは現実への回帰、このようにテキスト内容を整理してみれば、このテキストもまた、ユートピアテキストの定型性を襲っているということになる。しかし、結末部はやはり、こうした定型性を超えて作家のモティーフが顕在化してしまっている場面と見るべきだろう。

「蜜柑」の少女に訪れた至福の時間は、少女のものであって、「私」のものではない。「私」は何ら少女と関わることのない〈見る〉人間にすぎない。いや、正確にいえば、至福の時間を生きる少女には、〈至福〉の意識すらない。「僅かに」という一語には、やはり、この〈聖少女〉の世界への、「私」の微妙な懸隔感がある。ささやかながら、〈境界〉を超えたのは、苦痛を抱きながら切符を握りしめた少女であって、「私」ではない。「私」の感受性は、越境の瞬間を見る幸福を可能にはしたが、「私」自身が越境するためには、やはり、「私」自身の決意や賭けが必要であった。そういう「覚悟」なしには、「灰色の風景」をなす〈現実〉に帰還するという定型のなかに陥るしかない。むろん、少女の未来の〈現実〉も過酷であるしかないだろうが、至福の時間の記憶だけは残存し続ける。というよりむしろ、必ずややってくる「灰色の風景」のなかで、かけがえのない至福の時間が凝縮された風景となって、彼女のなかに蘇るだろう。「舞踏会」の明子＝H老婦人のように。

（4）彼岸のテキスト――〈神聖な愚人〉――

至福の時間になぜ酔いきれないか。簡略に言ってしまえば、「意識」から解放されている少女と「意識」の呪縛にがんじがらめになっている「私」との決定的な懸隔ということになるだろう。既に記述した横須賀時代の秀作「或日の大石内蔵助」や「枯野抄」は、行為に伴う人工性、行為の〈無私〉性への懐疑に、傷ついてしまう人物たちを描いたものであった。横須賀時代のみならず、その後も芥川文学の底流として、この「意識の呪縛」は残存し続ける。例えば「舞踏会」や「南京の基督」（大正九・七）など。ともに浪漫的なテキストにあって共通するのは、純粋無垢な者の姿の一方に〈意識する私〉、〈懐疑する私〉

を対置するという構図である。

志賀直哉の〈無私〉の目とは、本多秋五の卓抜な志賀直哉論の眼目だが（注三）、芥川龍之介の、その〈無私〉の目へのコンプレックスは、終生ついに、取り去ることができないものであった。

例えば「舞踏会」（大正八・一二）。大正七年の秋、所は横須賀線の汽車の車中、かつての夢のようなフランスの海軍将校との鹿鳴館の思い出を語る当年の明子、今のH老夫人の話に、「愉快な興奮」を感じる「青年の小説家」に対し、H老夫人は「不思議そうに青年の顔を見ながら」、「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ。」（定稿形）と語るばかりであった。教養ある青年作家の知的興奮のむなしさに、老夫人の、一瞬の生の輝きを終生持続し続けている、その記憶自体の純粋性を作家が対置しようとしていることは歴然としている。この結末部分の初出形、「存じて居りますとも。Jyurien Viaudと仰有る方でございました。あなたも御承知でございましょう。これは『お菊夫人』をお書きになったピエール・ロティのご本名でございますから。」との差異については、三好行雄の指摘以来周知のことがらだが、この改変は一方に〈意識する私〉を置くことによって、〈知〉に浸食されない純粋無垢な生の姿を浮かび上がらせるという構図への改訂であり、これによって初出形の〈新技巧派〉的なあざとさが消され、重層するテキストの構図を持つことができるようになった。

「南京の基督」（大正九・六）の場合も同様であろう。宋金花に起こった「奇蹟」の一方に、おかれた〈事実〉、彼女の思いこんだ「耶蘇基督」の本体が「George Murry」という「無頼な混血児」であり、楊梅瘡からの回復が潜伏期の、むしろ病状の悪化だとしても、宋金花の晴れ晴れとした顔の輝きは変わらない。むろん、「小説の終わった後で金花の〈現実の生〉が瓦解したことは確か」（三好）であって、錯覚に基づく至福もまた至福かと問う作家の姿があるにしても、である。

彼女たちは、時間に風化されない行為の純粋性を持続し続けている。一方で「私」の興奮は知的興奮にすぎないものであり、あるいは、「私」は、「夢」のあとの凄惨な現実を見極めてしまうばかりである。「意識の呪縛」は、「私」自身にはとうてい彼女たちの至福の時間が訪れることはない、というペシミスティックな認識となって、芥川文学の展開とともに進行していく。

至福の時は、「意識」を超越した時間であり、典型的にはむろん信仰の時間において典型となって現れる。「じゅりあの・吉助」（大正八・八）や「往生絵巻」（大正一〇・三）は、〈信仰〉者の至福をめぐってのテキストであり、平岡敏夫の紹介するようなアメリカの学生の「蜜柑」の読み方は、むろん文化風土の問題でもあるが、テキスト自体が内にもつ性格によるものでもある。

「じゅりあの・吉助」は、その結末に作家自身が、「日本の殉教者中、最も私の愛してゐる、神聖な愚人」と愛着を見せたテキストだが、「愚」の純粋性によって吉助が「聖人」になりえたという芥川龍之介の〈夢〉が、この小さなテキストを珠玉の掌篇に仕立て上げている。長崎奉行に問われて語る吉助の入信の経緯は、「えす・きりすと様、さんた・まりや姫に恋をなされ、焦れ死に果てさせ給うたによつて、われと同じ苦しみに悩む者を、救うてとらせうと思し召し、宗門神となられたげでござる」といったものであった。ここにも「南京の基督」に見られるような、「錯覚に基づく至福もまた至福か」という問題が構造的にはめこまれており、奉行も「どの切支丹門徒の申し条とも、全く変つたもの」と、とまどうばかりなのだが、吉助は下男として主人の娘に懸想をしてしまった、その苦しみに耐えなかったのである。磔刑に処せられた時、「一団の油雲が湧き出でて、程なく凄じい大雷雨が、沛然として刑場に降り注」ぎ、磔柱から降ろされた彼の口から

「一本の白い百合の花が、不思議にも水々しく咲き出てゐた」という。久しぶりに「今昔物語集」から材をとった「往生絵巻」の多度津の上人も、「西、西と申された」、「或講師の説法」をひたすらに念じ、「急に阿弥陀仏が恋しうな」り、「阿弥陀仏よや。おおい。おおい」と叫びつつ西に向かって歩き続け、海に突き当たって松の枯れ木に登り窮死したが、その屍の口から「まつ白な蓮華が開いてゐ」たという。ともに芥川が描いたメルヘンにすぎないのだが、「解釈」することでは決して訪れない、「愚者」の「信」への憧れが明瞭なテキストである。

〈愚者〉の〈無私〉によって立ち現れてくる至福の到来（したがって、「意識の呪縛」のうちにある限り、至福の時間は現れてこないということでもあるのだが）が最もあらわなテキストが「きりしとほろ上人伝」であろう。横須賀時代の最後に書かれたテキストであり、「蜜柑」とほぼ同じ時期の執筆になるこのテキストは、一見して「蜜柑」とだいぶ異なった作風のテキストだが、「神聖な愚人」の〈無私〉の行為の純粋性への憧れという、この時期の芥川文学のモティーフを最もあらわにしたテキストである。『天草本伊曾保物語』の文体を駆使して「原文の時代色」を映し出し、「予が所蔵の切支丹版「れげんだ・おうれあ」の一生に、多少の潤色を加えた」（小序）などと、悪癖のジレッタントぶりを発揮したこのテキストの「遊び」はそれとして、「しりあ」の山奥の大男「れぷろぼす」の、「天下無双の強者」への憧れの果て、悪魔（ちゃぼ）を調伏した「えす・きりしと」の「下部」に先導されて川守となってキリストに出会い、「世界の苦しみを身に荷うた「えす・きりしと」を負ひないた」、「黄金伝説」上の聖クリストファーという「神聖な愚人」の無垢へのあこがれが、このテキストのモティーフとなっている。

子供たちに慕われる「れぷろぼす」の「特性」について遠藤祐は、「彼の根底に喪われずにある生得の優しさ、単純素朴な性状」、「巨大な体躯のうちに無垢の魂を棲まわせた〈子供〉」を読み取っているが（「奉教人の死」と「きりしとほろ上人伝」―物語の構造―）、そういう「無垢の魂」の「信」こそが、いつやってくるかわからない出会いを「待つ」（「尾生の信」）姿勢を可能にしているのである。遠藤は、樵人たち、帝、悪魔との出会いが偶発的であるのに比し、「えす・きりしと」との出会いが「主体的」に「待つ」ことによってなされたことも指摘しているが、だからと言って、「れぷろぼす」は「待つ」相手を「えす・きりしと」と諒解しているわけでは決してない。信仰のテキストでありつつ、信仰の教義を脱したところにテキストはある。「悪魔」よりも、悪魔を調伏する「隠者」よりも強い「天下無双の強者」への憧れがそうさせているだけであって、「悪魔」をも信じてしまう、〈懐疑〉と一切無縁な、人間離れした、憧れの純粋性の一点において、「えす・きりしと」との出会いが可能となったのである。

以上のようなテキスト群は、しかし結局のところ、芥川龍之介が描いた〈夢〉であって、材を「今昔物語集」や「黄金伝説」あるいはキリシタン資料などから取るしかなかった。〈夢〉でしかないと読むか、切実な〈夢〉として読むかは評者の判断の領域であろう。

（5）回想された〈灰色の風景〉――「保吉もの」の横須賀――

芥川龍之介の横須賀を舞台とする〈保吉もの〉は以下の通りだが、〈保吉もの〉の多くが横須賀ないし横須賀時代の生活の〈引用〉としてあるという事実は、例えば平岡敏夫の簡単な指摘はあるものの、周知ということではないかもしれない。

「保吉の手帳から」（大正一二・五）「お時儀」（大正一二・一〇）「あばばばば」（大正一二・二）「文章」（大正一三・四）「寒さ」（大正

一三・四）「十円札」（大正一三・九）

これらのテキストにおいては、大がかりな「人工の翼」ではなく、日常の生活のなかに文学のモティーフが求められていることは言うまでもないが、しかし、「日常の生活」と言ったところで、そのほとんどが〈現在〉ではなく、四・五年前の横須賀時代のそれであるという事実は、注目すべき事柄であろう。横須賀を舞台とはしない「保吉もの」としては、他に「魚河岸」（大正一一・八）「少年」（大正一三・四～五）「或恋愛小説」（大正一三・五）「早春」（大正一四・一）があるばかりである。それほどまでに横須賀時代の「日常の生活」は、鮮やかに記憶され続けていたのである。先に記述した文夫人の紹介する「鎌倉を引き上げたのは一生の誤りであった」という芥川龍之介の呟きの真実性は、こうした面からも裏付けられる。鮮やかな記憶としてよみがえったのは、〈本の中の人生〉を生きてきた芥川にとって、横須賀には確かな、〈外部〉と関わる「生活」があったということだと思う。しかし同時に、その風景は横須賀時代の心象風景そのままというよりも、それらを基礎としながら、執筆時点の現在の心象によって色濃く染め上げられた風景と見るべきだろう。横須賀の風景は、ひたすらに暗欝な風景に変換されてしまっている。

「保吉もの」の第一作「保吉の手帳から」は、「わん」「西洋人」「午休み―ある空想―」「恥」「勇ましい守衛」の五つのテキストから成っている。いずれも機関学校の教職員たちの人間模様を描いたものである。「午休み―ある空想―」は常に古典的であった芥川文学にあって、珍しく「空想」を柱にしたテキスト。例えば佐藤春夫「西班牙犬の家」などの世界を伺わせるようなもので、やや特殊ながらこの時期の芥川を展望する特別なものかもしれず、〈幻想の時代〉としての大正期の文壇との関わりも十分にうかがえるテキストだが、ここではいかにも「保吉もの」らしいテキスト、「わん」を読んでみたい。

「或冬の日の暮れ（ここでも「日の暮れ」である　注付加）、保吉は薄汚いレストランに脂臭い焼きパンを齧つてゐた」。後ろの席には同じ学校の主計官二人が座っていた。彼らは「女中」に「こら」とか「おい」とかということばを使っている。そういう客にもまめまめしい「女中」は、しかし保吉には不親切である。「この町のカフエやレストランは何処へ行つても同じことだつた」（軍人相手に横須賀のサーヴィス産業がにぎわった事情は既に述べた）。ふと、「わんと云へ」という言葉が耳に入った。主計官の一人が窓の外の乞食に呼び掛けているのである。乞食ははたして「わん」と言うか。主知的で〈ニル・アドミラリ〉を気取る保吉の判断は、これは「人間は何処まで口腹のために、自己の尊厳を犠牲にするか？」という「実験」と見ることであった。「実験したければしてみるがいい」と。乞食は「わん。わん。」と「とうとう二声鳴い」（傍点付加）てしまう。結末部、場面は月給日の学校の主計部窓口、多忙でなかなか月給を渡してくれない主計官。「「主計官。わんと言いませうか？え、主計官」。保吉の信ずるところによれば、そう云つた時の彼の声は天使よりも優しい位だつた」。

一幕のコントめいたテキストであり、それ以上のものではないのかもしれない。しかし、〈実験〉風景を冷ややかに描出しただけのものでは決してない。この乞食は現代の「五位」（「芋粥」）であり、乞食のみならずこの主計官もまた人間の悲しい姿、と見極めようとする視点も働いている。「天使」になりたがっている「彼」の形象において、芥川のヒューマニティはまだ生動しようとしている。あるいは人間の織りなす「灰色の風景」のなかで、自己のヒューマニティを護ろうとしていると言ってもいい。しかし、後述する「文章」と異なるのは、「人の心」の「寂しさ」なのであって、「自分の心」の「寂しさ」への

視点には至っていない。初期以来のシニスムが色濃く残ったテキストなのである。

「お時儀」は「保吉もの」には珍しく、多少華やいだ雰囲気を漂わせた小品。朝、通勤の際の「或避暑地の停車場」での、文字通り顔なじみであるだけの「お嬢さん」に、たまたま午後顔を合わせ「お時儀」をつい交わしてしまった記憶。翌朝、いつもの通り顔を合わせた「お嬢さん」の「目に何か動揺に似たもの」を保吉は感じ、「同時にまた殆ど体中にお辞儀をしたい衝動を感じた」。果たしてこれも「恋愛」であるのか。保吉は「薄明るい憂鬱の中に「お嬢さん」のことばかり考へ続けた」。全体として暗欝な「保吉もの」にも、こういう軽いスケッチもある。多分に、横須賀時代の記憶そのままのスケッチのように思われる。

「あばばばば」の舞台である乾物店の様相に現実の横須賀の風景が映し出されていることは既に述べた。主題も明瞭であるが、芥川における「母」のテキストとしての位置付けも、早く三好行雄によって指摘されている。

「あばばばばば、ばあ！」保吉は女を後ろにしながら、われ知らずにやにや笑ひ出した。女はもう「あの女」ではない。度胸のいい母の一人である。一たび子の為になつたが最後、古来如何なる悪事をも犯した、恐ろしい「母」の一人である。この変化は勿論女の為にはあらゆる祝福を与へても好い。しかし娘じみた細君の代わりに図図しい母を見出したのは、……保吉は歩み続けたまま、茫然と家家の空を見上げた。空には南風の渡る中に円い春の月が一つ、白じろとかすかにかかつてゐる。……

「保吉もの」特有のとまでは言えないまでも、三点リーダーの多用が目立つ文体だが、これはあるためらいないし諦めを意味すると読むべきだろう。ジレッタント保吉は、女に「硯友社趣味の娘」を見、色ガラスを透かした「美しい緑色の顔」を見、「猫」（言うまでもなく女のセクシャリテ）を見、と大忙しであった。のみならず、女の聞き違いにも皮肉屋保吉らしからず、「天使」の来訪を感じたりもしていた。なにはともあれ、保吉は〈幸福〉であったのである。いつも通りの保吉の皮肉は、芥川の読者としては、認めておいてやらなければならないだろう。

そういう文脈を忠実にたどれば、このためらいや諦めの意味するものは歴然としている。白じろとした月にまで几帳面に（というか、牽強付会に）「意味」を探そうとするのは、ニュークリティシズムふうの読みの弊害で、色彩を失った月影の描写は芥川常套の手法にすぎないが、まぎれもなくあった、「事実」としての「女」への興味と、「女」を失うことによってしか訪れない「母」の認識という構造は、図式主義にすぎるとしても、一見「保吉もの」らしからぬこのテキストに底流する暗部と見ていいのかもしれない。

「文章」は、従来あまり問題にされてこなかったテキストだろうが、「舞踏会」のピエール・ロティ＝ジュリアン・ヴィオという虚構の人物に託して描いた「生の寂しさ」を、他者ならぬ自身の生の記憶をたどりつつ描いた、芥川のテキスト史上かなり重要なテキストと、私として判断している。テキストの内容自体は、文章表現という行為に伴う、横須賀時代のうそ寒い光景の記憶のスケッチである。

「堀川保吉はこの学校の生徒に英吉利語の訳読を教へてゐる。が、授業の合間には弔辞を作つたり、教科書を編んだり、御前講演の添削をしたり、外国の新聞記事を翻訳したり、――さう云ふ事も時々はや

らなければならぬ」。この日も校長は、保吉の書いた「本多少佐」への「名文」の弔辞を、到底他人が書いたものとは思えないような「俳優的才能」を発揮して朗々と読み上げている。「「名文」は格別恥づる所はない。そんな神経はとうの昔、古い皮砥のやうに擦り減らされてゐる」。が、さすがに保吉も「余り愉快ではない」。そういう中で親族席から笑い声と聞きまがうかのような「声高な」泣き声が起こり、次々と「看客」に伝播していく。保吉はこういう光景を前にして一人密かに恥ずるしかない。

尊い人間の心の奥へ知らず識らず泥足を踏み入れた、あやまるにもあやまれない気の毒さである。保吉はこの気の毒さの前に、一時間に亘る葬式中、始めて悄然と頭を下げた。本多少佐の親族諸君はこう云ふ英吉利語の教師などの存在も知らなかつたに違ひない。しかし保吉の心の中には道化の服を着たラスコルニコフが一人、七八年たつた今日もぬかるみの往来に跪いたまま、平に諸君の高免を請ひたいと思つてゐるのである。……

保吉は帰途、ふと文芸批評家N氏の罵倒に近い批評を想起する。弔辞に「成功」し、小説に「失敗」した小説家。「彼は右側の垣根の下へ長々とさびしい小便をした」。「困りますなあ」という主人の声を耳にしつつ、保吉は「急に小便も見えないほど日の暮れてゐるのを発見した」。なにやら「我鬼窟」の俳諧的な面白味もないではないスケッチであり、これまで「事実」というわけにはいかないだろうが、テキスト内容や風景の描写からから言って、この素材が大正六年の〈事実〉によっていることに疑いはない。「N氏」の批評が大正六年の中村孤月のものであることも考証されている（角川文庫『少年・大道寺信輔の半生』注釈）。にもかかわらず、これは「地獄変」へと上り詰めつつあった当時の作家の心情そのものではないだろう。

西山恵に「保吉もの」における（保吉の心情は）、「体験当時の心情というよりむしろ執筆時の芥川の心情といえる。芥川は自分の過去に題材をとり、「保吉」に体験させながら、その回想のなかに現在の自身の心情を表出しているのである」（『「京都教育大学国文学会誌」第二〇号　一九八五・六）という指摘がある。「保吉もの」を、「告白」を嫌った芥川の「告白」の道程の一歩と見るところに西山の論の目的があり、それ自体は今日常識ではあるだろうが、「回想のなかに現在の自身の心情を表出」するという芥川の「方法」として明確化した西山の論は、〈回想〉とは本来そういうものだとういう一般論を超えて明晰である。

「回想のなかに現在の自身の心情を表出」するという方法は、「少年」で一旦確立したうえで（注四）、「大道寺信輔の半生」から「点鬼簿」へという形で進行していくわけだが、その前段階で横須賀の「保吉」が描かれたということになる。そういう、「現在」によって回想された横須賀の「保吉」のテキストの頂点は「文章」にあるというのが私としての判断だが、むろん、そうしたテキストの性格は、すべての横須賀の「保吉もの」に一貫するものでなければならないだろう。

西山恵は大正一二年の「保吉もの」と大正一三年の「保吉もの」との間に微妙な落差を読み取っていたが、今日、横須賀の「保吉もの」を読み返してみると、大変な慧眼であることが了解できる。大正一三年のテキストのうち、「文章」については既に述べた。「寒さ」も出来栄えは「文章」とは異なるものの、「保吉の手帳から」「あばばばば」に色濃い他者への皮肉は影を潜め、「回想のなか」での「現在の」、他者をさほど媒介しない「自身の心情」の表出という性格、いわば〈「保吉もの」の純粋化〉といった性格の強いテキストである。

テキストの世界は「蜃気楼」（昭和二・一）や「歯車」（遺稿）に近い。前半部は「或る雪上りの午前」、舞台は「体操器械のあるグラウンドや、グラウンドの松並木や、そのまた向こうの赤煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易な」物理学の教官室。伝熱作用をめぐっての他愛ない話題である。後半部は「或る避暑地の町外れ」、轢死者の不気味な風景である。轢死のあった踏切りを渡るとき、轢死者の「その地は線路の上から薄うすと水蒸気さへ昇らせてゐた……」。そこに保吉が感じたのは「この間話し合つた伝熱作用の事」であった。生命の熱もまた伝熱作用に沿って、誰彼という差はなく、「同じやうにやはり酷薄に伝はつてゐる。「孝子でも水には溺れなければならぬ。節婦でも火には焼かれる筈である。彼はかう心の中に何度も彼自身を説得しやうとした。しかし目の当たりに見た事実は容易にその論理を許さぬほど、重苦しい感銘を残してゐた」。

何気ない日常の会話にも死の影を感じてしまう暗鬱な感受性。また、何をしようが、どう生きようが「生命」も「死」もまた物理学の法則に従って現象するばかりというニヒリズム。テキストの風景として添えられた鉄道工夫たちの焚火は「光も煙も放た」ず、「黄色い炎を動か」すばかりである。何もかも「死の風景」と見えてしまう保吉とは関係なく、「けれどもプラットフォオムの人人は彼の気持ちとは没交渉にいづれも、幸福らしい顔をしてゐた。保吉はそれにも苛立たしさを感じた」。

轢死のあった踏切りがよく見通せる、駅のプラットフォームの先端で喫煙して戻ろうとした時、ふと赤皮の手袋をなくしていたことに保吉は気付く。

手袋はプラットフォオムの先に、手のひらを上に転がつてゐた。それは丁度無言のまま、彼を呼びとめてゐるやうだつた。保吉は霜曇りの空の下に、たつた一つ取り残された赤皮の手袋の心を感じた。同時に薄ら寒い世界の中にも、いつか温い日の光のほそぼそとさして来ることを感じた。

たまたま「手のひらを上に転がつてゐた」にすぎない手袋に、「ほそぼそと」ながらも生への励ましを感じようとする感受性は、痛ましいというしかない。「文芸的なあまりに文芸的な」における〈詩的なもの〉の、その〈詩的なもの〉の内実はこのようなものだった。羨望視したり、論争をしたところで、同時代を生きた志賀直哉や谷崎潤一郎に拮抗できる生命力は、「保吉もの」を書く芥川龍之介にはもうない。「保吉もの」のなかでも最も「歯車」（ないしは「蜃気楼」）に接近したテキストなのである。

「十円札」はタイトル通り、一枚の「札」の引き起こす悲喜劇のスケッチ。金銭が引き起こす人間関係あるいは〈自意識〉の風景のスケッチだが、出来栄えはさほどではない。金銭が生み出してしまう人間の哀しい姿という主題も、やや平凡と言うべきかもしれない。ただ、興味深いのはそこに描かれた横須賀の風景である。「岩とも泥とも見当のつかぬ、灰色をなすった断崖は高だかと曇天に聳えてゐる」、今もそのまま芥川龍之介が描いた通りの風景を見せる、横須賀駅わきの風景に続いて、

道の両側はいつの間にか、ごみごみした町家に変つてゐる。塵埃にまみれた飾り窓と広告の剥げた電柱と――市という名前はついてゐても、都会らしい色彩はどこにも見えない。殊に大きいギャントリークレエンの瓦屋根の空に横たはつてゐたり、その又空に黒い煙や白い蒸気の立つてゐたりするのは戦慄に価する凄

まじさである。

と横須賀の街並みが描かれる。既に述べたように、第一ドック近くに聳える「ギャントリークレエン」は横須賀のシンボルであった。「黒い煙や白い蒸気」は、むろん横須賀工廠の排出するそれである。そういうものとしてスケッチは「正確」なのだが、しかしまた一方では、内田百閒が描いたように、横須賀のうち、特に機関学校一帯は風光明媚な区域であった。芥川は、軍港の醸し出す「エキゾチズム」に一時の興味をも示してもいた。しかしそういう横須賀はすべて捨象され、芥川は横須賀をひたすら「灰色の風景」に染め上げていく。

〈ヤスケ〉（弥助）の鮨に交換されるものでしかない「十円札」は、しかし、人のいい「粟野さん」の好意にも関わらず、彼との間に心理的な軋轢を生みだしてしまう。「広い世の中にはこの一枚の十円札の為に悲劇の起つたこともあるかも知れない。現に彼も昨日の午後はこの一枚の十円札の上に彼の魂を賭けてゐたのである」と。人と人がつくり出す〈関係〉、それは人柄とは全く無縁に不幸を生み出すしかないという、暗い心象風景においてしか横須賀は想起されない。横須賀の風景を灰色に染め上げていった作家は、他者の姿を、そしてついには他者ならぬ己の内面の風景を灰色に塗りつぶしていく。

回想の中に描き出された横須賀の風景は、大正一三年の芥川龍之介の内面が映しだした風景だったのである。「信輔は全然母の乳を吸つたことのない少年だった」（「大道寺信輔の半生」「二　牛乳」）という「告白」がなされたのは、「保吉もの」の最後となった「十円札」の発表の四ヶ月後、大正一三年の一二月のことである。

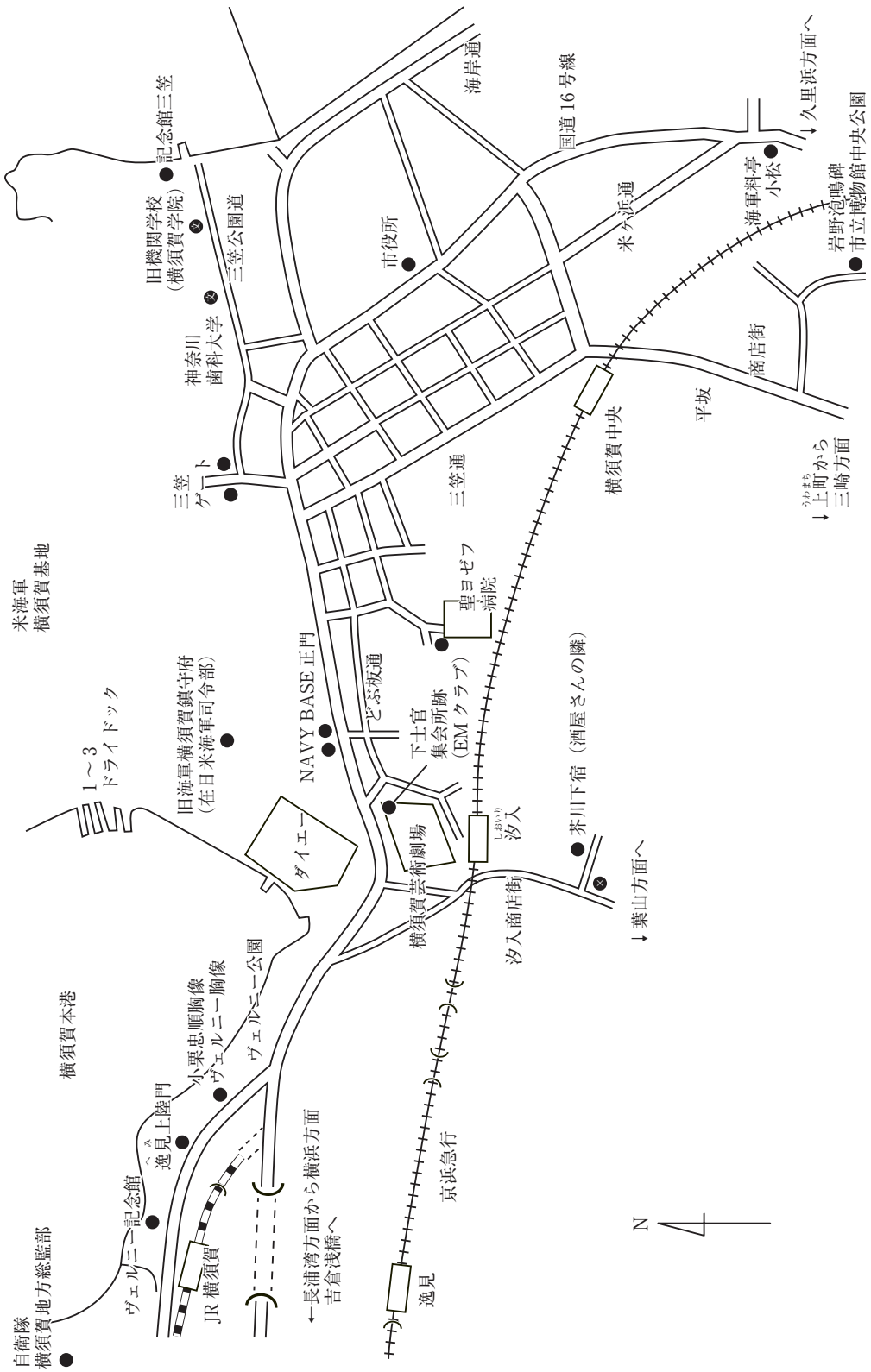
注一　三好行雄『作品論の試み』（一九六七　至文堂）および『芥川龍之介論』（一九七六　筑摩書房）。本論に引いた三好行雄の論はすべてこれらによる。

注二　佐藤義雄「テキストの生成――志賀直哉「剃刀」から「范の犯罪」へ――」（『文学の風景　都市の風景』蒼丘書林　二〇一〇所収）。志賀リアリズムと呼ばれているものが、〈生理〉への自覚に及んでいることを、そこで論じている。

注三　本多秋五「志賀直哉における自覚の問題」（『文学』一九八九年十二月）。『志賀直哉』（岩波新書）などでもくりかえされる、本多秋五の志賀直哉論の根幹である。

注四　これも三好行雄によって指摘済みのことだが、「回想の中に現在の自身の心情を表出」する「保吉もの」の典型をなすのが「少年」であり、さらにそのうちで最も鮮やかなものが、その最後におかれた「六　お母さん」である。

保吉八歳のとき、場所は両国駅付近の芥川家に近い、「二昔前」の両国回向院境内。〈戦争ごつこ〉で負傷した保吉は、そんなことを言った覚えもないのに、「やあい、お母さんてないてゐやがる」と〈陸軍大将〉の川島少年に揶揄される。爾来保吉はこれを川島の嘘と思っていたが、現在から三年前、上海で同じような体験をした。入院した病院のベッドで目覚めたとき、不思議そうな顔をした看護婦に尋ねられる。「あらお目ざめになっていらつしやるんですか?」「どうして?」「だつて今お母さんておつしやつたぢやありませんか?」と。禁忌として封印し続けた〈母を呼ぶ声〉の告白である。


記念館三笠
海岸通
国道16号線
久里浜方面へ
旧機関学校
（横須賀学院）
三笠公園道
市役所
米ヶ浜通
海軍料亭
小松
岩野泡鳴碑
市立博物館中央公園
神奈川
歯科大学
商店街
平坂
横須賀中央
三笠
ゲート
三笠通
上町から
三崎方面
米海軍
横須賀基地
聖ヨゼフ
病院
NAVY BASE 正門
どぶ板通
旧海軍横須賀鎮守府
（在日米海軍司令部）
1～3
ドライドック
下士官
集会所跡
（EMクラブ）
芸術劇場
汐入
芹川下宿（酒屋さんの隣）
ダイエー
横須賀
汐入商店街
葉山方面へ
横須賀本港
小栗忠順胸像
ヴェルニー胸像
ヴェルニー公園
逸見上陸門
ヴェルニー記念館
JR横須賀
←長浦湾方面から横浜方面
吉倉浅橋へ
京浜急行
逸見
自衛隊
横須賀地方総監部
N

横須賀海軍工廠
海軍砲術学校
横須賀海軍工廠
海軍航海学校
横須賀海兵団
横須賀海軍病院
海軍機関学校
横須賀海軍港務部
臨海公園
小川港
500m

出典『横須賀市史』

明治大学人文科学研究所紀要　第七十二冊（二〇一三年三月三十一日）縦　三十一―八十頁

明治期の児童・少年雑誌にみる中世軍記物語関連記事について

――『日本之少年』を中心として――

鈴木　彰

—— *Abstract* ——

Medieval War Literature as it Appears in Meiji-era Children's and Boys' Magazines:

A Study of *Nihon no Shōnen*

SUZUKI Akira

In what way and for what purpose did people of the Meiji period read and perceive the medieval epic military tales that are today referred to as *gunki monogatari*? Previous scholarship on war literature has yet to answer this question in a way that enables us to grasp the modern reception of these tales. This article attempts to address this issue by examining articles related to war literature that appeared in publications for boys during the late 1880s through the 1890s, with a focus on the foremost example of this type of magazine, *Nihon no shōnen*.

First, I survey Meiji-era magazines for boys to ascertain the positioning of *Nihon no shōnen*. Next I analyze the nature of the illustrations found in *Nihon no shōnen*, and observe that although the publication was initially intended for younger readers and contained illustrations of military tales, after it was apparent that the readership was older, the number of illustrations decreased. Then I look at the way that educational articles based on themes from medieval war tales were employed to teach composition or English. These selections give us a sense of how children of that time understood military tales. Moreover, research on the history of translating medieval war tales has not touched on this type of educational material, which should be considered in future investigations of war-tale translations that were produced within Japan.

Additionally, I analyze writings related to war tales that were submitted to the publication by readers. First I created a chart that organizes all such reader submissions in order to grasp their implications as a unit. Then I attempted to evaluate this material according to the following four perspectives: commentary on characters from the stories, views of illustrations of war literature themes, debates, and comprehension of historical sites and hometowns. This analysis allows us to glimpse the learning processes of actual children, as they discussed the way that characters lived, gleaned the narratives behind a particular illustration, debated a single event from a variety of perspectives, and expressed local pride in connection to historical sites that were featured in war tales.

The studies described above give us a pretty accurate sense of the rich knowledge of medieval war tales that children obtained from exposure to *Nihon gaishi*, theatrical and street performances, and other sources during the late nineteenth century, a time when modern printed editions of warrior tales were still not widely available. Children raised in this environment grew up to become readers of medieval warrior tales. How they interacted with this literature when they were children is part of the history of the modern reception of medieval war literature, a topic that requires research from a variety of perspectives. While literary scholarship has tended to emphasize the formation of works of literature, it is also important to consider the long history of reception of individual works. This approach will contribute a fuller sense of literary history.

《個人研究第1種》

明治期の児童・少年雑誌にみる中世軍記物語関連記事について
――『日本之少年』を中心として――

鈴木　彰

はじめに

あらゆる文学作品は読者とともにその歴史を刻んでいく。それを必要として読もうとする者、またその本文を後世に残そうとする者がいなければ、その作品は存在する意義を失い、やがて散逸していく。前近代の写本の時代にうまれた文学の場合、こうした事情と無関係なものは存在しないといってよい。それゆえ、ある作品の作者や成立年代を基準とした、作り手の側にたった年表的な文学史理解にはおのずと限界があるわけで、今現在に至るまでの推移を視野におさめた享受史や受容史への理解が強く求められることにもなる(1)。

享受と受容の過程では、ある作品があらたな創作的営為の素材となったり、他から影響を受けて書き換えられたりといった、形態上の変化をとげることが少なくない。したがって、そうした目に見える変化の様相を解明することが享受史・受容史研究の課題となるのは当然である。ただし、それがすべてではない。ひとつの本文がどう読まれるかは決して自明なことではないのである。時代や環境が変われば、同じ本文から読みとるものが変わる場合がある。また、同一人物の体験であっても、おかれた状況や観点が変わればその本文から読みとれるものも変わるのは自然なことである。変わらぬもの（本文）から、人々はどれだけの幅をもった解釈をおこなってきたのかを把握することもまた、受容史・享受史研究の重要な課題なのである(2)。個々の作品の本文・形態上の変化とその解釈史とを通時的に視野に収め、それらを束ねた形での立体的な文学史を構想したい。

さて、本稿で扱うのは、『平家物語』や『太平記』といった中世の軍記物語の近代的受容に関する一問題である。近代における軍記物語の受容というとき、まず試みられてきたのが軍記物語に取材した作家・作品を対象とした作品一覧の制作である。それがもっとも充実しているのは『平家物語』の場合で、戯曲・小説・評論を中心とした収集が進められ、段階的に改訂が加えられて今日に至る(3)。ただし、それらの個々の作品（とくに明治期の作品）を、古典に取材したその作品に内在される近代性や作家の個性的見識を指摘するといった立場からではなく、中世の軍記物語の受容史研究の一環として論じたものはほとんど存在しないというのが現状である(4)。また、前述の作品一覧は貴重な労作ではあるが、つけ加えるべきものはまだまだある。

近代における軍記物語をとりまく環境への理解は、これから意識的

に深めていかなければならない(5)。その際、まずは幕末・維新期を経て明治期に続く社会において、軍記物語関係の知識がどの程度、どのような形で共有され、それがどのような常識や価値観を形づくっていたのかという点を把握することが重要だと私は考える。それは一面で、軍記物語が当時どの程度、どのように読まれていたのかという問題とつながっている。現在のところ、じつはこうした基本的なことがらすらまだ明確にはなっていないのである。

こうした現状に鑑み、とくに享受者側の軍記物語理解の実態への視野を開くことも意図して、児童・少年雑誌という資料群に注目してみたい。いうまでもなく、雑誌文化は近世とは異なる明治期を特徴づける新しい文化現象であった。そのなかで、児童・少年向けの雑誌も制作されていく。後述するように、その誌面には無数の軍記物語に関わる言説を現れている。それらを見渡すことで、上述のような課題に取り組んでいくこととしたい。

児童・少年雑誌に注目する理由はいくつかある。その誌面に文章を寄せているのは、文学者、文筆家のみならずさまざまな分野の著名人から、今日ではほとんど顧みられることのない各界人までさまざまである。また、歴史的には無名な全国の読者たちの投稿も数多く掲載されている。それらの言説は、著名人の発言をことさらに特権化することなく、当時の常識を探っていく素材として恰好の対象のひとつといえる。

また、読者がそののちの社会を担っていく子どもたちだということも重要な要素である。子どものころの体験から身につけた価値観や常識が、当人のその後のさまざまな選択に作用することはごく自然なことであろう。また、それが次の世代の子どもたちに提供されるという連鎖も生じる。近世からの断絶と継承、大正期以降への継承と断絶という問題を念頭におく意味でも、子どもたちをとりまく環境に注目する意義は少なくないと考える。ちなみに、たとえば昭和二十年（一九四五）の六十歳は明治十八年（一八八五）生まれにあたり、明治二十年代に幼少年期を過ごした世代にあたる(6)。

これまでにも児童文学・児童文化研究の一環として、児童・少年雑誌や子ども向けの読み物に関する研究が進められてきた。そのなかで、軍記物語に登場する武将・武士たちを英雄視する記事や作品が扱われてもきた(7)。それらが軍記物語の近代的受容という観点からの関心に大きな刺激を与えてくれることは確かだが、とはいえそれで十分に満たされるわけではない。明治期の児童・少年雑誌だけにかぎってみても、軍記物語研究の文脈にのせて、見るべきものは膨大に存在する。中世文学研究と近代に関わる諸研究分野とを横断した研究史の把握と情報交換を進めつつ、今後こうした課題と向き合っていきたい。

本稿はそのための第一歩となるが、とくに明治二十年代の児童・少年雑誌の誌面に掲載されていた軍記物語関連記事の様相と、そこから知られる子どもたちの理解を探るべく、この時期を代表する雑誌のひとつである『日本之少年』を主な対象として検討を進めていきたい。

一　明治期の児童・少年雑誌と『日本之少年』

（1）明治期の児童・少年雑誌

明治期に始まり、大正期、昭和戦前期へと続く児童・少年・少女雑誌の展開相については、これまで主に児童文学研究や近代文学研究、また国語教育史の分野において取りあげられ、関連研究が蓄積されてきた(8)。木村小舟『少年文学史　明治編』は、この分野に関する通

史的研究の先駆として、今なお重要な意義を持ち続けている(9)。木村は、児童・少年雑誌の展開過程を、はじめは「読者」「投書家」として、のちに「記者」「著作編纂者」となって実際に体験した世代の人物である。

同書では、胎動期・揺籃期・成長期・躍進期・隆盛期・一新期・雌伏期・完成期という八期にわけて明治期の「少年文学」通史がつづられている。各期の境界は必ずしも明確に線引きできるものではないのだが、胎動期と揺籃期の境目が明治二十一年（一八八八）十一月の『少年園』の創刊に見定められていることは確かである。それまで、『学庭拾芳録』（明治八年創刊）、『穎才新誌』（明治十年創刊）、『小学教文雑誌』（明治十二年創刊）といった既存各誌が作文投稿誌であったのに対し、諸分野の読み物や学問・修養・娯楽的記事を含む子ども向けの総合雑誌の嚆矢として登場したのが『少年園』であった。のちに、「一八九〇年前後の幼少年雑誌類を中心に、明治児童文学誕生の経過を問」うた続橋達雄氏は、〈胎動期〉〈創始期〉〈展開期〉の三期としてとらえたが(10)、そこにいう〈創始期〉の始まりはやはり『少年園』の創刊とされている。『少年園』とそれに続く諸誌（『小国民』『少年文武』『日本之少年』等）の刊行が、それまでにはなかった、子どもたちと深く関わる文学・文化史上の新局面を開いていったのであった。

続橋氏は、〈胎動期〉を「投書中心」の時期、〈展開期〉を「営利企業体中心」の時期と規定したが、その間に位置する〈創始期〉の終わりを象徴する事件として、明治二十八年（一八九五）における『少年園』『小国民』の終刊（政府命令による発行停止）と『少年世界』の創刊とをあげている。これをあらためて木村分類に照らすならば、「胎動期」については両者が重なり、続橋分類にいう〈創始期〉は木村分類にいう揺籃期と成長期にほぼ該当することになる。『少年世界』の創刊を新たな画期とみるのも、

『少年世界』は、総合学習雑誌と学校外での少年教育という〈創始期〉の基本的性格を守りながら、幼年・少女・少年という幅広い読者層を対象に、小説を重視した文芸的色彩濃厚な雑誌として出発した。それを支えたのが、硯友系の作家群であり、新聞雑誌の記者を兼ねる作家・評論家たちである。…（中略）…これらの作家群の頂点にあったのが、本誌の場合、漣山人であった。

という指摘(11)にみえる、漣山人巌谷小波をはじめとする人気作家の台頭をも勘案した判断であることがわかる。事実、『少年世界』は発行部数においても、刊行初年度から各号平均八万部という圧倒的な数字を残しているのである(12)。

（2）『日本之少年』について

本稿で取りあげる『日本之少年』（博文館）の創刊は明治二十二年（一八八九）二月二十二日で、続橋氏のいう〈創始期〉の刊行物である。先述した『少年園』の創刊に遅れること約三ヶ月、こののち並行して刊行されていく『小国民』（学齢館　明治二十二年七月創刊）、『少年文武』（張弛館　明治二十三年一月創刊）よりは少しだけ早いスタートをきったことになる。なお、明治二十二年二月といえば、十一日に大日本帝国憲法が発布され、衆議院議員選挙法、貴族院令が公布されている。また同日には、文部大臣森有礼が刺され、翌日他界するという事件も起きている。森は明治十八年十二月に初代文部大臣となって国家至上主義の教育政策を打ち出し、明治十九年に公布された帝国大学令（三月）、小学校令、中学校令、師範学校令（四月）によって教育制度改革を推進し、以後に続く近代学校制度の基盤整備を進めたことで知られている。また、翌明治二十三年には第一回総選挙（七月）、

「教育に関する勅語」発布（十月）、第一回通常議会（十一月）といった出来事が続く。『日本之少年』はこうした時期に創刊され、次第に読者を獲得していったのであった。

さて、この時期の各誌が共有する特徴として続橋氏は次の四点を指摘している。

一、特定の個人の見識とよき協力者とによって刊行されたため、方針・主義が一貫して個性的たりえたこと。

二、学校教育の方針に沿い、幼少年の社会教育・家庭教育の一翼を担おうとする目標を掲げていたこと。

三、雑誌経営者・編集者が漢学的素養の上に西欧の自然科学知識を吸収しているという思想的傾向をもっていたこと。

四、漢学的な経世論的思考構造が、その文芸観を規定していること。

各誌において濃淡は認められるが、社会教育・家庭教育に関わるという二つめの特質は、本稿でとくに意識しておきたい事柄である。『日本之少年』でも、創刊号に次のような緒言が表紙見返し下部に掲載されており、こうした性格を色濃く備えていたことがわかる。

「日本之少年」は学芸修身立志修業を奨励するの雑誌なり

「日本之少年」は天下の少年をして学校教科以外に在つて智識を開発せしむるの具たるを期す

「日本之少年」は少年に関係ある社会の出来事を論議し適当なる少年修業の方針を示すべし

「日本之少年」は啻に直接に少年の為めに計るのみならず併せて少年の父母に対かつて家庭教育の法を講ずることあるべし

「日本之少年」は広く学生の起草に係る論文の投寄を容れ以て我少年の智識の程度を表示するを力むべし

「日本之少年」は時を期し賞を懸けて弘く学生諸子の作文を募集し以て少年を奨励し少年の文才を養ふの一助と為さんとす

「日本之少年」は中小学々生の智識と能力を標準とし敢て深遠高尚の理論を説かず又敢て野鄙破道の文字を加へず中小学々生の智能に恰好する事項を記載し以て完全なる智能開発の美果を収むるを期す

「日本之少年」は毎号大家の論文を掲載し毎月二回発兌とす

なお、『日本之少年』創刊号には「本誌発行の主意を明かにす」という論説が掲載され、右の緒言の内容を敷衍した文章がつづられていることも付言しておく。

続いて、『日本之少年』の基本的性格を先行研究に拠りつつ確認しておこう(13)。

先にも述べたとおり、創刊は明治二十二年（一八八九）二月二十二日。以後、明治二十七年（一八九四）末の終刊に至るまで、毎月二冊のペースを保って博文館から刊行された。博文館は、明治二十年六月十五日から刊行を開始した「日本大家論集」の企画が当たり、『日本之少年』刊行のころは東京日本橋の本石町三丁目十六番地に店舗を構え、『日本之教学』『日本之女学』『日本之商人』（以上、明治二十年創刊）、『日本之殖産』『日本之法律』『日本之時事』『日本之兵事』『日本之警察』（以上、明治二十一年）といったタイトルの雑誌を続々と刊行し始めていた(14)。そうした中、『日本之少年』は「博文館の初めて手がける少年雑誌」（上田氏解説）として登場した。

『日本之少年』は『少年園』『少年文武』と同様、高等小学校から尋常中学校の生徒を読書対象として制作・刊行された。当時、小学校は尋常・高等の二等とされ、六歳から十四歳までが学齢、それぞれの修業年限は四年とされていた。また、中学校は尋常と高等の二等で、尋

常中学校への入学は満十二歳以上、高等中学校への入学は満十七歳以上とされ、修業年限は順に四年と二年であった。『小国民』が尋常小学校から高等小学校の生徒向けであったことに比べると、『日本之少年』はそれよりも少し上の年齢層向けの雑誌であったと考えられる。また、木村小舟が、「「日本之少年」の編輯形式を概観するに「少年園」を模倣して、稍低級を目標とするもの、如く、……」（『少年文学史　明治篇』）と述べていることも確認しておこう。大まかに把握すれば、『小国民』と『少年園』の間くらいの年齢層・知識層を読者としていたとみてよいだろう。

創刊時、定価は五銭で本文三十八頁。のちに定価は八銭となって定着する。この金額についても、木村の次のような指摘がある。

蓋し「日本之少年」は、中学生並びにこれと同等の学力のある者を対象とせるやに思われるも、当時の社会情勢よりして、一部八銭という高率の雑誌を、毎月二回づつ発行したるは、富裕階級は兎もあれ、一般家庭の子弟にとりては、甚だ軽からぬ負担では無かつたであろうか。（『少年文学史　明治篇』）

ちなみに、『少年園』は定価五銭、『小国民』は定価二銭五厘から三銭、『少年文武』は八銭である。もちろん頁数のことも勘案する必要があるが、定価の違いは小さくない。読者としては、比較的裕福な家庭の子どもが多かったものと推測しておいてよいだろう。また、その親たちも読者として想定されていたはずで、この点は前掲の緒言からも読みとれる[15]。

創刊後、短期間のうちに、初代主筆松永道一（のち阪齋に改姓）、第二代主筆中山整璽（のち早速に改姓）と主筆が交代するが、第一巻第八号から須永金三郎が主筆となって編集体制が安定した。須永は、文廼舎主人・蘆山・菜花園主人などと号して精力的に記事を執筆したほか、この雑誌の発展に尽くしたとされる[16]。しかし、明治二十六年六月に博文館を退館、福井新聞主筆に転じた。その名は第五巻第十三号まで誌面に現れている。須永のあと、柳井録太郎が第四代主筆となり、翌年十二月の終刊までの約一年半の間、これを務めた。執筆陣としては、坪谷善四郎（水哉）・巌谷小波・江見水蔭・大和田建樹・幸田露伴・小中村義象・佐々木信綱・坪内逍遙・内藤耻叟・荻野由之（和菴）・森田思軒・山田美妙らがいた。なお、ここにあげた人々はみな、こののち何らかの形で『平家物語』をはじめとする軍記物語に材をとった作品や、軍記物語の注釈書の執筆に関わっていく。明治期の軍記物語をとりまく言説や理解が、こうした児童・少年雑誌を構成していく環境とも深く関わっていたことは、この陣容からも十分に窺い知ることができる。また、こうした児童・少年雑誌の読者が成長して、より高次の軍記物語関連文献（小説や評論や原典の注釈書など）の読者や執筆者となるという世代の循環がこののち成立していくことも見通しておく必要がある。

発行部数は創刊当初二千部、しかし創刊一年後には一万部となり、須永主筆退館時には三万部を公称するようになっている。上田氏解説は、諸事情を勘案した上で、一万五千部程度が「通常号の実売部数かもしれない」と述べ、当時日の出の勢いであった博文館の雑誌としては、「やや物足りないと見るのが順当ではないか」と、これを評価している。なお、この雑誌ならではの特質ではないが、部数の多寡とは別に、これが全国的に販売され、発売日から時を隔てずに全国的に読者を得ていたことは、等閑視できない事実である。創刊号には裏表紙見返し一面に全国二百十一箇所の「売捌所」が列挙されている。東京・関東圏が多いのは事実だが、北は石狩札幌・小樽から、南は土佐高知や肥前熊本まで、全国各地にわたっている。裏表紙には東京、大阪、京都はもちろん、札幌、函館、青森、弘前から琉球那覇まで六十八箇所の「大売捌所」と二箇所の「特別大売捌所」が並ぶ。また、

創刊当初から郵送による定期購読（前金制）方式が機能していたことも確認しておこう[17]。かくして、全国各地の、これを購読できるような層の子どもたちへと本誌は提供されていったのである。もちろん、この販路は時が経つにつれて少しずつ拡大していくことになる。

誌面構成の変遷は上田氏解説がていねいに記述している。創刊号には、「日本之少年」「理学談」「歴史談」「立志談」「感奮小話」「特別寄稿」「泰西俚諺」「漫録」「遊戯園」「投書」「雑録」「懸賞文」という各欄が設けられている。欄の設定は以後年頭号ごとに変遷をとげ、最大時には、「日本之少年」「歴史談」「地理談」「理化学談」「博物談」「数学談」「英学談」「講談」「譚園」「叢話」「問答」「遊戯園」「小説」「就学案内」「群芳集萃」「時事談」の十六にまで拡大した[18]。このうち、軍記物語関連記事が比較的よく現れるのは、歴史談・譚園・叢話・群芳集萃（投稿作文欄にあたる）であるが、理化学系の欄を除けば、いずれの欄にも関連話題が現れるといってよい。

さて、博文館が本誌から派生した雑誌を制作していく動きについても概観しておこう。明治二十三年（一八九〇）七月、活況を呈する投稿作文を掲載する媒体として、本誌の号外として『少年学術共進会』が刊行されることとなり、以後一誌として独立した。また、明治二十四年一月からは、より低年齢層を読者対象とする『幼年雑誌』が創刊され、創刊以来雑誌とともに成長してきた読者とは別の、新読者層を獲得していく。あわせて、同年三月からは『日本全国小学生徒筆戦場』の刊行が始まり、『幼年雑誌』に掲載しきれない投稿作文を収録する媒体となる。そして、明治二十七年一月からは、この『日本全国小学生徒筆戦場』と『少年学術共進会』とが合併されて『学生筆戦場』と改題され、刊行が続けられた。また、明治二十八年からは『文芸共進会』も刊行され始めた。

かくして、『日本之少年』の刊行時期は、まさに博文館がその児童・少年向け雑誌の事業を試行錯誤しながら展開していく時期にあたることが知られよう。そして明治二十七年十二月の末をもって大規模な雑誌の統廃合が行われ、博文館から出されていたすべての雑誌は、翌年一月から『太陽』・『少年世界』・『文芸倶楽部』に統合整理されることとなったのである。『日本之少年』の読者は、年齢・教養等の程度に応じて、これら三誌の読者へと移行していった。『少年世界』の創刊が〈創成期〉と〈展開期〉を分ける画期であることはすでに述べた。それは、見方を変えれば、『日本之少年』の終刊に伴う問題でもあったことを確認しておきたい。

こうした展開を見渡してみると、『日本之少年』が培ったものは、のちに『少年世界』において盛期を迎える少年雑誌文化空間の前提をなすものであることは疑いない。また、他誌との比較において特筆すべき性格は少ないようにも評されるが[19]、それは当時の子どもたちに提供された平均的な理解の質を伝えているということにほかなるまい。本稿のように、この時期において中世軍記物語に根ざした話題がどのように享受され、理解されていたのかという問題意識に立つ場合、それはむしろ好条件でさえある。また、『日本之少年』の兄弟誌が存在することも、博文館から提供された言説群が明治期を経てその後へと及ぼした力を測っていく上で重要である[20]。

おおよそ以上のような問題意識と展望のもと、明治期における中世軍記物語の受容と再生の様相を問うという観点から、本稿では『日本之少年』をとりあげたい。なお、論述の過程では、必要に応じて随時『少年園』や『小国民』等、同時期の各誌の状況にも目を向けていくこととする。

二　明治二十年代における軍記物語
――『平家物語』『源平盛衰記』との接しかた

（1）原文を通読できる環境

ところで、『日本之少年』が刊行されていた明治二十二年から二十七年のころ、人々はどのように『平家物語』や『太平記』といった軍記物語の原文と接することができたのであろうか。とくに注意したいのは、物語の全体を通読できる環境がどの程度存在していたのかという点である。このことは、『日本之少年』所載記事の記者たち、いいかえれば大人たちの知識の質を問う上でも重要な問題である。本節では『平家物語』『源平盛衰記』を例として、この時期の享受環境を概観しておこう。

まず明らかなことは、近代活字本として『平家物語』やその注釈書（明治期執筆のもの）に接する機会は、明治二十年代半ばまでにはほとんど整備されていないということである。近代活字本としての『平家物語』注釈書の嚆矢とされるのは、明治二十四年（一八九一）の池辺義象・荻野由之・落合直文校注『日本文学全書　平家物語』（博文館）である[21]。また、「本格的な注釈書」、「近代『平家物語』注釈書の出発点」と評される[22]今泉定介『平家物語講義』（誠之堂）は、さらに下って明治三十二年～三十四年になってようやく刊行されることとなる。

ところで、このころはまだ『平家物語』と『源平盛衰記』とを別の作品とする認識が一般的であった。『源平盛衰記』の近代活字による本文としては、明治十五年一月の『大塩平八郎実記』を創刊号とする『今古実録』（広岡屋）シリーズのなかの『源平盛衰記』や、明治十八年（一八八五）八月刊『史籍集覧　参考源平盛衰記』（和装本四十六冊。近藤活版所）があり、明治二十六年から刊行が開始される叢書「帝国文庫」の『源平盛衰記』が続く。明治二十年代の半ばまでの状況としては、『平家物語』よりも『源平盛衰記』のほうが、活字本文の提供が進んでいたといえよう。

以上のように、各種の児童・少年雑誌が創刊され、読者層を拡大していった明治二十年代前半期以前には、近代活字本として『平家物語』や『源平盛衰記』を読む環境はごく限られていた。それが手元にない環境では、物語を通読するには、近世の版本に頼るしかなかったということになる[23]。こうした環境は、前述した「日本文学叢書」や「帝国文庫」に『平家物語』や『源平盛衰記』が収められたからといって、ただちに一変するようなものではないだろう。

さて、周知のとおり、明治二十年代は近代的な学問としての文学の基幹をなす「国文学史」という概念が提唱され始めた時期でもある。とりわけ、明治二十三年はその画期とされる。芳賀矢一・立花銑三郎『国文学読本』（冨山房）や、三上参次・高津鍬三郎『日本文学史　上・下』（金港堂）が、この年に相次いで刊行された。『平家物語』や『太平記』といった軍記物語もそのなかで取りあげられ、古代以来の日本の文学史を形づくる重要な「文学」作品、古典として位置づけられることとなった[24]。以後、明治三十二年（一八九九）の芳賀矢一『国文学十講』（冨山房）、明治四十一年（一九〇八）の藤岡作太郎『国文学史講話』（東京開成堂）などへと、日本文学史を提示する動きが続く。「日本文学全書」や「帝国文庫」のような叢書の刊行は、時期的にみて明らかにこうした動きと連動している[25]。

ただし、こうして提示された「国文学史」概念がただちに社会的な常識となったとは考えられない。これを提唱した先駆者たちの講義を聞いて、あるいはその著作を読んで心動かされた人たちもいたはずだが、それは日本各地に住む国民全体からみれば、小さな「点」として

の動きにすぎない。もちろん、そこからゆるやかな変化が始まるわけだが、その変化の内実はまだほとんど吟味されていない。

日本文学史概念の誕生という文脈にのせて、『平家物語』の近代化――たとえば歴史の書から文学の書へという転換――という問題を把握するのは、この時期の動向についてのひとつの理解法ではあろう。ただし、それはいわば学問史、制度史としての状況把握にすぎない。そこでは、当時の最先端の学問的動向や軍記物語観は論じられていても、歴史的に無名の、しかし物語を後世に受け継ぐ実質的な担い手であった無数の享受者たちの理解の実態は酌みとられていない(26)。時代と地域を問わず、学問上の新知見はゆるやかに人々の間に浸透し、徐々に社会的な通念となっていく。著名な作品を成立時に即して年表的に並べるだけではなく、作品それぞれの受容と再生の歩みを含めた、多面体をなす文学史を構想したい。そうした立場にたつとき、近代における軍記物語の意義を、名のとおった文学者たちの営みとの関係から捉えるのみでは、大きな偏りがあることを痛感させられる。明治期以降、軍記物語は無名読者たちにどのように提供され、いかに読まれたのか。その内容はどのように理解されて次世代へと語り直され、継承されたのか。そして、そのことが近代日本の社会と人々の心性にいかなる作用を及ぼしていったのか。もちろん、そうした動向が生み出してきた流れの最後尾に、私たちのいる今がつらなっている。こうした問題はさまざまな方法で追究すべき事柄といえよう。

(2) 人物中心の名場面主義による享受
――国語教科書との関係

右のような事柄に自覚的になってみると、たとえば次のような問題も浮上してくる。

明治二十年代半ば以降に刊行され始めた文学叢書（いわゆる古典文学の叢書）をどのような層の人たち（組織・機関を含む）が購入し、そして個々の作品はじっさいにどの程度通読されたのであろうか。じつはこうしたことさえまだ必ずしも明確ではない。少なくとも軍記物語については、これまでにこうした問いが立てられたことさえない。各種の文学叢書が刊行されたことで、全巻を通読できる素材が広く提供されるようになったことは画期的なことではあるが、それは購入者たちが各冊を通読したということを必ずしも意味するものではない。本質的に両者は区別しておくべき問題なのである。

そして、こうした文学叢書が刊行される前から、児童・少年雑誌の刊行は始まっており、明治二十年代に入って、文学叢書の刊行と並行してさらに大きく展開したのであった。ひとたび各雑誌を繙けば、その誌面には軍記物語に関わる人や出来事についての話題を無数に見いだすことができる。後述するように、これらの基盤にある関連知識は、決して『平家物語』や『太平記』の原文をもとにして獲得されたものばかりではない。そこには当然、近世以来の、さまざまなジャンルやメディアで展開した源平物、太平記物等々の世界が投影している。本稿でそれらのすべてを詳細に論じる余裕はないが、今の時点であらかじめ確認しておくべきは、軍記物語の原文がこの時期の人々の知識形成に直接的に及ぼした影響力を過大評価してはならないということである。

ところで、近世から続く諸メディア、諸ジャンルの作品群に共通する性格のひとつに、人物を中心にした享受がなされているということがある。換言すれば名場面主義ともいえよう。登場人物たちが印象的な姿をみせる場面を、その前後の大きな文脈からは切り離して個別的に享受するというありかたである。その際、物語全体のストーリー展開は必要とされない。そのことは、今日的な目でみると不思議なこと、あるいは嘆かわしいことに感じられるかもしれない。しかし、む

しろ、物語は寸断されて短編化することで理解しやすくなり、結果としてより多くの享受者を獲得できたというのが、中世から近世へと続いてきた実状なのではなかろうか(27)。

こうした状況は当然のごとく明治期にも続いていく。ここでは、人物中心の名場面主義による享受の実態を典型的に示す事例として、明治二十年代の子どもたちがおかれた環境の一部を形づくる、小学校教科書の内容を点検しておきたい。この時期の児童・少年雑誌は等しく、「学校教育の方針に沿い、幼少年の社会教育・家庭教育の一翼を担おうとの目標を掲げていた」といわれている。そうした意味でも、教科書の内容との関係性は視野に入れておく必要がある。

明治二十年（一八八七）五月、文部省編纂の国語教科書『尋常小学読本』に現れる軍記物語関係の話題は次のようなものである(28)。

〔巻之二〕第二十四課「八町二郎の話」
〔巻之四〕第二十一課「義家の学問にこゝろざしたる話」
〔巻之六〕第十課「鎌倉権五郎景正の話」、第十八課「源平あそび」、第十九課「平清盛」、第二十一課「鎌倉」、第二十五課「後醍醐天皇」、第二十六課「楠正成　一」、第二十七課「楠正成　二」、第三十一課「楠正行　一」、第三十二課「楠正行　二」

巻之二第二十四課「八町二郎の話」を例に述べると、これは明らかに、『平治物語』巻中「待賢門の軍の事付けたり信頼落つる事」（古活字本による）の本文を語りなおしたものである。

昔、吉町二郎と云ふ人あり。一人の敵、馬に乗りて、はるか先きに逃げ行くを、八町の間に追ひ付きて、其首を打ち取りし故に、八町二郎といふ名を取りしなり。

此人、又あるたゝかひにて、三河守よりもりと云ひし人が、よき馬に乗りて、はしるを追ひかけたり。そして、つひに追ひつき、よりもりのかぶとにくま手を打ち掛けて、力を入れて引も落さんとしたり。

よりもりは、あやふくなりし故に、太刀を引きぬき、くま手の柄を打ち切りたれば、八町二郎は、あふのけさまにたふれたり。されば、人々皆、「太刀もよくきれたり、切り手もよく切りたり、掛け手もよく掛けたり」とかんしんしたりとぞ。

記載されている要素を照らし合わせてみると、『平治物語』諸本中では流布本段階の本文が最も近似している。近世の版本から話題が抽出されたものと思われる。なお、本来は待賢門でのいくさであったものが、ここでは「あるたゝかひにて」（傍線部）とあいまいに表現されている。多くの関連知識を必要としない形へと物語を切り取って提示するための、典型的な操作といえよう。

また、巻之六第十九課「平清盛」は、保元・平治の乱以降の清盛の生涯をつづった記事である。そのなかには次のような叙述がみえる。

(a)此時、清盛の驕り甚だしく、天下の政事は、皆己一人にて行ひ、常に三百人の童子に命じ、京都中をあるかせ、若し己を誹る者あるときは、直に申し出でさせたれば、人々皆恐れて、清盛を誹る者なかりき。

(b)折から清盛は、熱病にかゝり、水桶に入りて、熱をさますに、其水あつくなる程なりしかば、七日にして薨じたり。

禿髪や熱病の表現からみて、この記事は明らかに『平家物語』巻第一「禿髪」や巻第六「入道死去」をもとに語りなおしたものといえる(29)。この他、巻之六の第二十一課「鎌倉」では義朝・頼朝・義経のことや以仁王の乱に言及されている。また、同第二十五課「後醍醐天皇」、第二十六課「楠正成　一」、第二十七課「楠正成　二」、第三十一課「楠正行　一」、第三十二課「楠正行　二」は『太平記』をもとにした、南北朝の内乱に関わる著名人たちの話題である。

同様に、右の『尋常小学読本』に続く、上の学年の子どもたち向けに提供された明治二十一年五月刊、文部省編『高等小学読本』に現れる関係記事を掲出してみよう。

〔巻之二〕第三課「兵庫神戸」

〔巻之三〕第六課「保元平治ノ乱」、第十二課「鹿谷ノ軍評定」、第十五課「源頼政兵ヲ起ス」、第十六課「渡辺競ノ話」、第二十一課「源頼朝ノ伝　一」、第二十二課「源頼朝ノ伝　二」、第二十三課「頼朝ヲ論ズ」、第二十七課「兵権武門ニ帰ス」、第二十八課「鎌倉時代ノ概説　一」、第二十九課「鎌倉時代ノ概説　二」、第三十六課「仲国勅使トシテ小督局ヲ訪フ」

〔巻之四〕第四課「北条泰時ノ伝　一」、第五課「北条泰時ノ伝二」、第十一課「時頼ノ行脚」、第二十四課「大塔宮」、第二十七課「楠正成ノ忠戦」、第三十課「北条氏ノ滅亡」、第三十一課「安東聖秀ノ義気」、第三十三課「楠正成ノ遺誡」、第三十四課「俊基関東下向」、第三十五課「佐野天徳寺琵琶ヲ聴ク」

これらの記事のうちには、出典が明示されているものがある。

源平盛衰記……巻之三第十二課「鹿谷ノ軍評定」、第三十六課「仲国勅使トシテ小督局ヲ訪フ」

太平記……巻之四第十一課「時頼ノ行脚」、第二十七課「楠正成ノ忠戦」、第三十三課「楠正成ノ遺誡」、第三十四課「俊基関東下向」

読史余論……巻之三第二十三課「頼朝ヲ論ズ」、第二十七課「兵権武門ニ帰ス」

神皇正統記……第二十七課「兵権武門ニ帰ス」

駿台雑話……第三十一課「安東聖秀ノ義気」、第三十五課「佐野天徳寺琵琶ヲ聴ク」

各課の記事は、これら諸書に依拠しながら作られたのであった。また、典拠が示されていない各課についても類似した事情を想定してよいだろう。事実、巻之三の第十二課「鹿谷ノ軍評定」のほか、同第十五課「源頼政兵ヲ起ス」、第十六課「渡辺競ノ話」、第三十六課「仲国勅使トシテ小督局ヲ訪フ」は『平家物語』や『源平盛衰記』を下敷きにすればこその記事内容となっている。『太平記』に関わる、南北朝期を扱った記事も同様に見なしうる。

これらの見出しを一覧するだけでも、人物に焦点をあわせて名場面や著名な話題を抜粋するという方針が採られていることは明白であろう。それは、各記事の細部にまで及んでおり、たとえば巻之二第三課「兵庫神戸」では、港としての繁栄を語るなかで、清盛による「築島」の故事、「福原ノ都」への遷都、「一ノ谷」での源平合戦、湊川での楠正成の戦死、正成を祀る湊川神社のことなどに言及されている。また、巻之三第二十八課「鎌倉時代ノ概説　一」では「金商人吉次」に従って義経が陸奥に行ったこと、同第二十九課「鎌倉時代ノ概説　二」では後鳥羽院が刀剣を作ることを好んだことなどが紹介されているのである。

教科書に掲載されたこれらの記事は軍記物語の原文そのものではなく、子ども向けに語り直されたものである。そうした意味では、中世の軍記物語を子どもたちが直接享受した例とはいえない。ただし、「源平盛衰記」「太平記」などと出典を明示する例があることを勘案すれば、これを教材として提供した側の営みとしては、物語中の場面を切り取り、細分化して子どもたちに示そうとした事例であることは疑いない。この教科書に接した子どもたちは、それと意識しなくとも軍記物語の一部分を記憶に留めていったはずだ。そうした知識伝達の経路が教科書を介して成り立っていたことを確認しておこう。

近世にはすでに、原本ではなく、それに根ざした二次的・三次的な作品群――たとえば、草双紙、読本、芸能、錦絵、語り物など――によって、細分化された軍記物語に関する理解を継承していく伝承体系が成り立っていた。明治期に制作され始めた教科書はその延長線上に位置するものでもあったといえる。そして、あらかじめいえば、児童・少年雑誌もまたそうした一面を確かに兼ね備えていたのである。

以上を踏まえ、明治二十年代の環境として見通しておきたいのは、軍記物語の全巻を通読するのではなく、個々の名場面に関する理解を集積する形で、軍記物語関連の話題は理解されていたであろうということである。そうした環境のなかで知識を得てきた記者が書いた児童・少年雑誌の記事を、子どもたちは読んでいた。その現場に伏在する実態を明らかにしていくことが以下の課題となる。

三　口絵の画題と読者の年齢層
――『小国民』との比較から

『日本之少年』を通覧すると、随所に軍記物語に関わる記事を見いだせる。以下の各章ではいくつかの観点からその特徴を把握し、本誌刊行期に軍記物語が置かれていた状況を見通していきたい。

（1）『日本之少年』口絵の画題

まず本章ではその口絵に注目してみよう。『日本之少年』では創刊号から巻頭に口絵を掲載していく[30]。その創刊年（明治二十二年）の口絵の画題は次のとおりである。

第一号（2／23）明宮殿下之肖像
第二号（3／5）口絵なし
第三号（3／23）子爵森有礼君肖像
☆第四号（4／3）中大兄皇子中臣鎌足と沓を授受し給ふ図
★第五号（4／15）楠父子櫻井駅に於て離別の図
☆第六号（5／3）上杉謙信少時米山ニ奇計ヲ立ル図
☆第七号（5／15）聖徳太子幼時示奇之図
☆第八号（6／3）武田信玄少時服侍竪図
☆第九号（6／18）日本武尊熊襲ヲ誅シ給フ図
★第十号（7／3）新羅三郎足柄山頂ニ笙ヲ吹ク図
☆第十一号（7／15）毛利元就衆子を誡むる図
★第十二号（8／1）阿新丸仇を討て竹に伝ふて逃るゝ図
第十三号（8／15）帝国法理文三分科大学之図
第十四号（9／1）東京第壱高等中学講堂
第十五号（9／15）英国美尼峡貌利太尼鉄管橋之図
第十六号（10／1）巴黎府第一世那勃翁帝墳墓之図
第十七号（10／15）豆弗利加蒙禄古市街及内地之景
第十八号（11／1）口絵なし
第十九号（11／15）兵庫湊川神社之図
第二十号（12／1）口絵なし
第二十一号（12／15）北極地方氷山浮漂之図

☆印を付したのは史上の人物や出来事に取材した歴史もの、★印はそのなかでも軍記物語に材を得たものである。第四号以降は歴史ものが連続しており、第十三号以降は画題の傾向が大きく変わっていることがわかる。第一号に皇族（明宮親王、のちの大正天皇）、第三号に文部大臣森有礼の肖像を載せたのは、当時の児童・少年雑誌が共通して持つ国家体制への配慮であり、教育活動の一環に本誌を位置づける編集者の自負のあらわれでもあっただろう。

いかなる定期刊行物でも、とくに刊行直後には安定的な購読者を獲

得していくための相応の配慮と努力がなされるはずである。そうした過程で、まず最初に、しかも連続して選ばれた口絵の題材が歴史ものであったことは、こうした題材こそが読者の興味、関心をひきつけるにちがいないと、本誌編集者たちが想定していたことの証しといえよう。

これらの口絵は、その解説にあたる本文記事と対になって読者に供されるのが基本であった。たとえば、第五号「楠父子櫻井駅に於て離別の図」には「楠公桜井の駅袂別の話」（「譚園」欄）が、第十号「新羅三郎足柄山頂ニ笙ヲ吹ク図」には「新羅三郎[31]」（「歴史談」欄）がそれぞれ付されているといった関係である。第五号「楠公桜井の駅袂別の話」の書き出しと結びを引用しておこう。

楠公桜井の駅袂別のことハ後世の仮作に成れりと云ふの説近頃諸学者の間に伝ふれとも未だ其真偽如何も定まらさるか故に予輩は姑らく之れを事実なりと信して左に桜井駅袂別の譚を記るす可し楠公勅を奉して摂津に至り…（中略）…世に桜井の駅訣別の譚として名高きは此事なり而して此事は或ひは後世の仮作に出でたるや知らずと雖も兎に角歴史上の一大美談なれハ故らに之れを掲けて読者の一覧に供す

また、第十二号「阿新丸仇を討て竹に伝ふて逃るゝ図」の場合は、当該号に関連記事はみえないが、じつはそれに先立つ第五号に先の桜井の別れの話と並んで、「中納言藤原邦光卿之逸事」（松平其山筆）という文章が掲載されており（「歴史談」欄）、そこからの流れで選ばれたものと推察される。つまり、これらの口絵は本文記事と連動しながら、読者に史上著名な故事を教える役割を一面で担っていたのである。見方をかえれば、読者は口絵を通してこうした物語を想起していたともいえよう。

しかし、『日本之少年』の場合、こうした歴史ものの口絵は決して主流になることはなかった。とりわけ軍記物語関係の口絵としては、二年目以降終刊までを見渡しても、わずかに次の数例があるのみである。

〔第二巻〕明治二十三年
第十七号（9／1）「平刑部卿妖怪を捕ふる図」
〔第四巻〕明治二十五年
第十号（5／15）「曾我二孝画像」
第十一号（6／1）「楠公騎馬像」
〔第六巻〕明治二十六年
第七号（4／1）「平薩州眠花下図」
第十一号（6／1）「曾我兄弟打入の図」

近世以来、好まれた画題として定着、浸透してきた源平物や判官物、曾我物が少ないことはやや意外な印象を受ける。先に述べたとおり、口絵は本文記事と一揃いとしてその話を教えるものであった。その点を考慮すれば、読者周知の話題に関する絵は取りあげにくかったという事情を察することができる。第十三号以降、海外の話題などへとがらりと色合いが変わるのもそうした事情ゆえと考えれば納得がいく。それはまた、読者の知的水準や年齢層とも関わっているのだろう。『日本之少年』の多くの読者の目には、こうした歴史ものは幼く映ったのではなかったか。裏返せば、軍記物語に取材したこれらの話は、その理解の深浅はさておき、もっと幼いころに獲得しているはずの常識的知識であったと考えられるのである。本誌編集者が、これらの絵を喜ぶ年齢層よりも上の世代の子どもたちを読者として選んだことが、第十三号以降の口絵の画題の変化に表れていると考えられる[32]。

(2)『小国民』の口絵との比較

このことをもう少し掘りさげるため、同時期に刊行されていた『小国民』の場合と見比べてみよう。『小国民』第二年目までの口絵は次のとおりである（☆・★印の意味は前に同じ）。

〔明治二十二年〕
第一号（7／10）虎の図
☆第二号（9／10）蒙古戦争の図并に其の話
☆第三号（9／10）山田古嗣読書の図並に其の話
第四号（10／10）狼羊小舎を覗ふ図
☆第五号（11／10）熊本城の図
第六号（11／25）立皇太子式を祝する図
第七号（12／10）少女稲刈の図

〔明治二十三年〕
第八号（1／10）なし　＊折り込み付録「図会すご六」
★第九号（2／10）牛若丸気質鍛錬之図
第十号（3／10）鷹、鴨を捕ふる図
第十一号（4／3）〔神武天皇全身肖像〕
★第十二号（5／10）鎮西八郎の図
★第十三号（6／10）村上義光の図
第十四号（7／3）自助時間割
☆第十五号（7／18）柴田勝家甕ヲ破ル図
☆第十六号（8／3）神功皇后三韓御征伐の図
第十七号（8／18）日光陽明門之図
第十八号（9／3）東京府下小供の風俗
☆第十九号（9／18）松平信綱剛胆之図
★第二十号（10／3）那須与市扇を射る図
第二十一号（10／18）暁斎翁幼時習画の図
☆第二十二号（11／3）智仁勇の図
☆第二十三号（11／18）木村重成の図
第二十四号（12／3）風船乗実況図
第二十五号（12／18）東京歳の市の真景

『小国民』は『日本之少年』創刊から約五ヶ月遅れで刊行を開始した。「すべて少年に親む」ために、「従来の諸雑誌よりも、記事の平易鮮明なると、絵画と挿版に費用を吝まざる点とに真面目を開」いたとされる(33)。平明さと挿絵を特徴として多くの低年齢層の読者を獲得、第三年第一号では「『小国民』は、すでに、小学雑誌の王位を棄て日本諸雑誌の王位を占むるに至れり」とまで称するほどに成長した(34)。

前掲一覧を見渡すと、歴史ものとそれ以外の画題がほぼ均等に配分されていることがわかる。月刊各二号のうちのどちらかが歴史ものという割合である。そしてそのなかに、まずは牛若丸、源為朝、村上義光、那須与一といった、軍記物語の世界できわだった光を放つ武者たちの姿を取りあげていることが目を引く。そして『小国民』でもやはり口絵は本文の読み物記事と対応しており、たとえば第九号「牛若丸気質鍛錬之図」には「牛若丸の気質」、第十二号「鎮西八郎の図」には「鎮西八郎の話」（第十四号、第十六号へと三回連載）、第十三号「村上義光の図」には「村上義光錦旗を奪ふ」、第二十号「那須与市扇を射る図」には「那須宗隆の功名」が備わっている。

その文章の平明さは、たとえば第九号「牛若丸の気質」を一読すればただちに了解されよう。

(a)　九郎判官（くらうはうがん）源（みなもと）義経（よしつね）といへば、諸子（みなさん）はごぞんじない方（かた）はございますまい。義経（よしつね）はつよい人といふことは、どのヤウな幼（わか）い子供（こども）も、皆（みな）ぞんじてをりますが、どうして左様（さやう）につよいのでありませう。……

易しい漢字にもルビを多く付した、読めることをめざした誌面作りがなされている。ルビの多さという点では、『日本之少年』の誌面も同様であるが、たとえば先に引用しておいた『日本之少年』第五号「楠公桜井の駅袂別の話」の記事と比較してみれば、文章・内容ともに、その難易度には大きな差があることは明らかであろう。

この第九号の口絵は児童・少年雑誌史上初の石版多色刷であった(35)。その画期を飾る画題として他ならぬ牛若丸が選ばれたのには、右の引用にもあるような義経の知名度と人気が大いに関わっていたにちがいない。その構図は、太刀を背負い、右手に刀がわりの棒を手にして樹下に立つ牛若丸の全身図である。幼き日の鞍馬山中での兵法修行の一齣として描かれたものとみえる。

この「牛若丸の気質」の主張は、結末に至る部分に明瞭である。

(b) 牛若丸は、鞍馬山に入れられてからは、一心に本をよみ、剣術をケイコしてをりましたが、あるとき書物を見て、自分の源氏は、天子様の分れで、血筋は立派な家柄であることを知り、今はおちぶれて、平氏の下に附いてをるのをザンネンに念ひ、僧になるよりは軍人になつて、父や先祖の辱しめをきよめヤウと志し、是よりいよ〳〵武事のケイコに力をこめ、特に兵法と剣術を専門に修業し、頗る上達しました。山寺にをる小僧のことですから、安楽なことはできません。衣物は薄くて寒さに堪えられない時もありましたらう、お腹のすきて困つたこともありましたらう、烈しき風に吹かれ、暴き雨にさらされ、酷い熱さにてらされ、厳しい霜に冷やされ、千万無量のくるしみを、物ともせずに凌ぎましたから、牛若丸の筋骨は、金石の如く丈夫になりました。千仞の坂をかけ下つて鵯越を襲ふも、万重の波を蹴立て、壇浦に戦ふも、其気質の堅く剛くて鬼神の如くなるは、皆鞍馬山にて、幼時練習した結果であります。世の少年諸君は、絹の衣物にくるまつて、坐ぶとんの上にすわり、火鉢に当つて斗りをりましたなら、何事業も起すことはできませんよ。男児と生れてからは、たとひ其身は野山の末に果てるとも、世人の眼をおどろかす、大事業を仕とげヤウとする剛気を、常々に仕込まなければ、人と生れた甲斐がありません。勉強（とくに読書）することの大切さ、身体を鍛えることの重要さ、「軍人にな」るという人生選択、忍耐と克己の精神、幼時のたゆまぬ努力といったメッセージ(36)が、牛若丸の境遇に託して語られている。明治二十三年の今を生きることと、かつての牛若丸の生涯とが重ね合わせられ、読者である「男児」たちに、将来「大事業」をなし遂げることをめざすよう、感傷的な言葉をも織り交ぜながら熱っぽく語りかけている。「義経はつよい人といふことは、どのヤウな幼い子供も、皆ぞんじてをりますが、どうして左様につよいのでありませう。」と語りだされたこの文章には、「つよい」ことに価値を置く「男児」たちを育てようとする意図が明確である。

ここにこそ、史上に名を残した武将・武者たちの話題が児童・少年雑誌で頻繁に扱われたことの意義のひとつを見定めることができよう。右の話は『義経記』や『平家物語』そのままではなく、その要素を利用して編みなおされたものである。軍記物語にみえるさまざまなエピソードは、当時こうした文章をしたためるような価値観と極めて親和的な感性のもとで受け止められてもいたという事実を看過すべきではない。

さて、『小国民』には、これ以後も『平家物語』や『太平記』等に材を得た口絵が掲載され続けていく。その点で『日本之少年』とは性格を大きく異にしている。『日本之少年』の刊行期と重なる明治二十七年末までの例をあげておこう。

〔第三年〕明治二十四年

第三号（2／3）「平忠度の図」
第四号（2／18）「義経剛勇の図」
第十七号（9／3）「藤原藤房公の忠君」
第十八号（9／18）「阿新父の仇を報ずる図」
第二十一号（11／3）「渡辺競の図」
〔第四年〕明治二十五年
第二号（1／18）「和田平太蛇を撃つ図」
第三号（2／3）「安東聖秀の図」
第六号（3／18）「源義平午睡の図」
第七号（4／3）「藤原景清の武勇」
第八号（4／18）「長谷部信連強盗ヲ退ク図」
第十号（5／18）「源頼信の図」
第十一号（6／3）「源頼義の図」
第十二号（6／18）「新田義貞公最後の図」
〔第五年〕明治二十六年
第二号（1／15）「梶原源太勇戦の図」
第四号（2／15）「宇治川先登の図」
第八号（4／15）「能登守教経奮闘の図」
第九号（5／1）「鬼同丸」
第十一号（6／3）「曾我兄弟の夜討」
第十五号（8／3）「平将門滅亡之図」
第十六号（8／18）「平敦盛一谷陣中之図」
第十八号（9／18）「但馬坊奮戦之図」
〔第六年〕明治二十七年
第五号（3／3）「文三家安戦死之図」
第六号（3／18）「佐野了伯聴平語之図」
第七号（4／3）「後醍醐天皇の御夢」
第八号（4／18）「源義家勿来関を過ぐ」
第十二号（6／15）「本間孫四郎遠矢之図」
第十四号（7／15）「畑時能」
第十九号（10／1）「足利忠綱」

いずれも、基本的には口絵と解説文としての読み物とが組み合わされている。『小国民』が『日本之少年』より年齢の低い、尋常小学校の生徒をも読者層とする雑誌であったことを、ここであらためて想起したい。『日本之少年』ではさほど取りあげられなかったこれらの画題が、なぜ『小国民』ではかくも採用され続けるのか。それは、右の人物たちに関わる話題は、大枠としては低年齢の子ども向けの話題だったと考えるのがもっとも自然である。『日本之少年』に関して先に示した見通しは、『小国民』との比較結果とも矛盾しないのである[37]。

四　〈教材〉としての軍記物語関連話

ここまでに確認してきたとおり、『日本之少年』の場合、中世の軍記物語に淵源をもつ知識をすでに相当量身につけている読者が想定されている。見方をかえれば、本誌の刊行当初から、ある層の子どもたちの間にはそうした状況が形づくられていたということである。では、そうした子どもたちに向けて、『日本之少年』では軍記物語関連話がどのように語りなおされていったのであろうか。本節ではその実例を、本誌がもつ教育的側面との関わりから見渡してみよう。

（1）懸賞文の課題として

『日本之少年』では、創刊第一号（明治二十二年二月二十三日刊）

の本文最終頁（三十八頁）に「懸賞文」欄を設け、

○和文問題　第一回

一　梅花詞　　二　後醍醐天皇の御伝記を読む

三　外国の友人となるこへおくる文

○真仮名交り文問題

一　亀井戸看梅之記　　二　足利尊氏論

という募集を開始し、併せて、「本誌ハ時々賞を懸けて少年の作文を募集すること、し追ては英文の懸賞募集を為すべし」とその展望を示している。この第一回懸賞文の締切はおよそ一ヶ月後の三月二十五日、和文は字数制限なし、真仮名交り文は「二十四字詰三十行以上百行以内」とされ、第一等から第三等までに賞品が出されることがうたわれた。そして、このときの入賞作は第六号（同年五月三日刊）～第八号に掲載された。撰者は萩野由之。「足利尊氏論」は計四点（甲・乙・丙賞、他一点）の掲載を確認できる。そしてこの間、第二回懸賞文が募集されており、第十号（同年七月三日刊）にその課題であった「楠正成論」の入賞作計三点（甲・乙・丙賞）が掲載されている。

まずは、はじめての懸賞文の課題として尊氏、次に正成が選ばれたことに注目したい。いうまでもなく、本誌の読者はこの二人について論じることができる、と編集者が想定すればこその課題設定である。これについては、先にみた明治二十年代に用いられた文部省編纂国語教科書のなかで、「後醍醐天皇」「楠正成」といった標題のもと、尋常小学校の段階から彼らの話題が扱われていることとも無関係ではないだろう。子どもたちにもよく知られた存在であり、かつ論じるにはそれなりの難易度もある存在として選ばれたものと思われる[38]。

掲載された入賞作を読み比べてみると、その論点はかなり多様である。つまり、それだけ多面的に人物を評価する価値観が受け入れられていたのである。このことは大いに注目される。たとえば、明治末年以降になると南北朝正閏論とかかわって尊氏が逆賊視されたことはよく知られているが、この時期には必ずしもそうした尊氏評ばかりではない。入賞作の核となる部分を抜粋して引用しておこう[39]。

(a)足利尊氏ハ逆賊ナリ。二千五百有余年間ノ歴史ニ於テ、斯程迄ニ成功シ、斯程迄ニ天寿ヲ全ウシタル逆賊ハ尊氏一人ノミ。…（中略）…人類ノアラン限リ彼ノ罪悪ハ決シテ除キ去ル事能ハザルナリ。逆賊名ハ歴史ニ銘シテ永遠磨滅セザルモノナリ。彼レヲ一個人トシテ論評ヲ下ストキハ、彼レハ乱世ノ逆賊ニシテ平時ノ逆賊ニ非サルナリ。平時ノ政治家ニ非ズシテ、乱世ノ英雄ナリ。余輩ハ斯ノ如ク逆賊ヲ極罰シ、斯ノ如ク不忠ヲ悪ム者ナリトイヘドモ、未ダ平時ノ逆賊程ニ乱世ノ逆賊ヲ非難スル者ニ非ザルナリ。何トナレバ、乱世ノ逆賊ハ要スルニ其行為タル自己ノ企図ヨリ出デ来ルコト少クシテ、寧ロ外部ノ刺激ニ因リテ成リ立ツモノナレバナリ。…（中略）…尊氏ガ行為ハ、外面ヨリ見レバ其逆賊タルニ相違ナキモ、其関係スル所ヲ推シテ之ヲ察スルトキハ、平時ノ逆賊程ニ罰スベキ者ニ非ザルナリ。……

（甲賞「足利尊氏論」　東京神田区神保町　木戸忠太郎　十七年四月）

(b)足利尊氏、知略勇武皆新田義貞・楠正成ニ及バズ。…（中略）…曰是レ頼朝ヲ視テ警戒トナセバナリ。史ニ称ス、尊氏嘗テ直義及師直ニ謂テ曰ク、右大将ハ信賞必罰人心ヲ翕服ス。然レドモ刑ヲ用ヰル苛刻ニシテ、骨肉ヲ殺戮ス。憾ムベシ。我必ズ然ラジ。苟モ降附スル者アレバ、深讐大敵ヲ問ハズ、邑土安堵セシム。況ンヤ有功ノ臣ヲヤ、ト。是レ尊氏ノ術ノ由テ出ヅル所ナリ。尊氏、頼朝ノ後ニ生レ、而シテ其材ハ及バザレドモ反テ頼朝ニ勝ルナリ。…（中略）…而シテ其背叛慮ルニ足ル無シ。是レ尊氏天下ヲ取ルノ術也。此ノ術ヤ頼朝無キ所。然シテ尊氏之レ有リ。唯々頼

朝有スル所ノ智勇無シ。故ニ其ノ無キ所ニ術アリ。異ナル哉、其及バザル所ハ則チ及ブ所以ナリ。

（乙賞「足利尊氏論」東京牛込区　伊藤久太郎　十三年九ヶ月）

(c)……故ニ余云ハントス。尊氏ノ天下ヲ得タルハ、将ニ発セントスル機ニ乗ジタルノミ。然リト雖、若後醍醐帝ヲシテ悉ク藤房ノ諫ヲ納レシメ、悉ク護良親王ノ言ニ従ハシメバ、豈必シモ此ニ至ランヤ。其此ニ至ラシメタルハ、帝ノ過ナリ。亦天ナリ命ナリ。……（中略）…嗚呼、兄弟牆ニ相鬩グモ外能ク其侮ヲ禦ギ、奢侈驕奢ナルモ尚能ク伝ヘテ十有余代ニ至ル者、其事業ノ多ク権謀譎詐ニ出デ、不信不忠ノ名千載青史ヲ汗スヲ免カレザル事ヲ。

（乙賞「足利尊氏論」長崎県合町　川淵楠茂）

引用(a)は尊氏を逆賊とはしながらも、「平時ノ逆賊」と「乱世ノ逆賊」を区別するという見地から、尊氏一個人としては「乱世ノ英雄」であり、「平時ノ逆賊」ほどに非難すべきではないとする論理を展開している。また、引用(b)は頼朝との比較のなかで尊氏の力を評している。引用(c)は尊氏が天下を手にしたことについて、むしろ「帝ノ過」すなわち後醍醐天皇の過ちを指摘している。その結語はむしろ尊氏に同情的ともいえよう。三者三様の論点と論法がそこにはみてとれる。

先に児童・少年雑誌の記事と教科書の内容との関係に触れたが、国語教科書ではじっさい尊氏について次のように扱われている。

(d)其後、天皇、少しく政事に倦み給ひ、大功ありし大塔宮を押しこめ、足利尊氏を用ひさせ給ひしが、尊氏、遂に天皇にそむき、自ら征夷大将軍と称して、官軍に敵したり。

（『尋常小学読本』巻之六第二十五課「後醍醐天皇」）

(e)後、足利尊氏の、天皇にそむくに及び、正成、屡奇計をめぐらして、賊軍を苦めたれど、賊軍、勢猶衰へず、……

（同第二十六課「楠正成　一」）

(f)時ニ足利尊氏ハ、官禄、共ニ新田氏ノ上ニ出デタリシガ、親王ト義貞トノ功ヲ忌ミ、陰ニ是ヲ害センコトヲ謀レリ。親王モ、亦尊氏ノ異志アルコトヲ察シテ、是ヲ誅センコトヲ請ヒシカド、許サレズ。尊氏、益々是ヲ悪ミ、天皇ノ寵姫藤原氏ニ結ビテ、共ニ親王ノ反逆アルコトヲ誣告セリ。天皇、大ニ震怒シテ、遂ニ親王ヲ執ヘテ、是ヲ宮中ニ幽閉セリ。……

（『高等小学読本』巻之四第二十四課「大塔宮」）

後醍醐天皇の政に対する批判的な視線（傍線部）、尊氏を逆賊する理解（波線部）、後醍醐が大塔の宮の言葉を聞き入れなかったこと（破線部）などは、先の入賞作にみえた要素と重なる。懸賞文への応募作品と学校教育の場で語られていたこととが連動していたことを確認できる。

これらは優秀作であって、当時の子どもたちの誰もがこうした多様な価値観をもっていたということではない。しかし、『日本之少年』の誌面にはこれらが共存し、それを読んだ読者たちにこうした考えかたが伝播し、共有されたり批判されたりしていった。そうした連鎖的な動態がもつ意義はやはり見すごせまい。ここに例示したのは尊氏論の場合だが、同様の状況はこれに限ったことではない。そして、こうして形成されていく知的土壌は、『太平記』そのものを享受する現場とも地続きであったにちがいない。

なお、引用(b)の波線部にいう「史」とは、内容からして『日本外史』の足利氏に関する記事にあたるとみてよい。明治二十三年時点でもなお、『日本外史』は子どもたちの歴史理解の源泉であり続けていたのである。南北朝期に関する知識は、『太平記』『日本外史』等から得られる知識が、各種教科書や雑誌などの諸メディアを介して、いずれかが特別視されるのではなく混在した状態で受け止められていたことも、ここから窺い知ることができよう。

（2）英語学習の素材として

続いて取りあげたいのは、英文として軍記物語関連話が加工され、語りなおされていく事例である。

『日本之少年』の誌面では、明治二十三年一月一日刊行の第二巻第一号で誌面改訂が行われ、欄の数がそれまでの十から十六とされた。その際、新たに「英学談」欄が設けられ、以後毎号で英和対訳、漢文英訳、和文英訳の課題・実践例のほか、英文の読み物や懸賞文などが掲載されていった。この誌面改訂の際、「就学案内（附入学試験問題集）」欄を設置することが宣言され[40]、各種の高等教育機関の入学試験問題を抄録するなど、本誌は一部で受験生たちの入試対策という側面も担っていたのであった。

その過程では、「舌きりすゝめ」（第二巻第七、八号）、「Shiobara Tasuke」（第九号）、「靖国神社」（第十三号）、「一休和尚の幼時」（第十四号）、「分福茶釜」（第十五～十七号）、「支那二十四孝」（第十八～二十二号）、「粟田左大臣」（第二十四号）といった、日本の昔話や歴史に材をとった英文読み物が提供されている。英語という外国語に親しませる一方策として、周知のなじみある話を英文化して提供するという営みが続けられていたのであった。そうした流れに、多くの子どもたちに親しみのある軍記物語に根ざしたエピソードが引き寄せられていくのはごく自然なことであったと考えられる。

『日本之少年』では、第三巻第二号（明治二十四年一月十五日刊）の「英学談」に、「KESA-GOZEN」と題する一文が掲載されている。著者は「U. D. K.」とある。内容としては、遠藤盛遠（のちの文覚）に横恋慕された袈裟御前の悲話を『源平盛衰記』に基づいて英文化したものとみてよい。明治二十年代にはすでに、袈裟御前のふるまいは貞節を守るために死を選んだという点において美談として扱われていた[41]。この英文も、

Kesa was the wife of Minamoto Wataru, She was very handsome as well as she was very wise.

と語りだされており、そうした文脈にのせた美しき賢女としてのイメージが袈裟御前に与えられている[42]。そうした点で、明治二十年代調の色づけで語りなおされていることは疑いない。ただし、この文章は「KESA-GOZEN」と題しているものの、最後は盛遠の事情を記して結ばれている。

To his great amazement, great sorrow, and great disappointment he discovered at the light of moon that the head he now cut was not his rival's but his most beloved Kesa's. Alas, he wished so earnestly to get her as he tried to kill her husband but at last he killed her in his own hand! Oh, how unhappy lover was he! This led him to determine to become a priest and to spent his afterlife in consoling the dead spirit of his lover whom he killed without will, and, he called himself Mongaku the name is still very well known to us.

こうしたありかたは、典拠である『源平盛衰記』の当該話が盛遠（文覚）の発心譚としてまとめられていることに対応するのであろう。全体としてみれば、比較的忠実に典拠を英文化した事例となっている。

同じ第三巻の「英学談」欄には、ほかにも軍記物語関連の英文話として、同じ「U. D. K.」の署名のある「MINAMOTO YOSHIIE」（目次では「八幡太郎」。第一号）、「THREE DUTIFUL SUBJECTS AT THE TIME OF GEMPEI」（目次では「源平之三郎等[43]」。第三号～第五号）、「KOJIMA TAKANORI.」（第十号）が掲載されている。これらについても、基本的には典拠である『平家物語』や『太平記』、

またそれに基づく『日本外史』などに基づいた作文がなされていると考えられる。

さて、「英学談」欄でこうした英文記事が紹介されていく動きに応じる形で、読者からは英文の投稿作文が寄せられるようになり、じっさいに誌面に掲載される例も現れてくる。そのなかに、「KANJINCHO.」と題された投稿がみえる(44)（署名「G. V. Azabu」。第二巻第十五号「群芳集華」欄）。それは、奥州をめざして京を発って北陸の道を進む義経一行が安宅の関で引き留められ、富樫入道に厳しく訊問されるという、著名な話題を記した英文である。事件の舞台を安宅とする点からみても、これが『義経記』に基づく理解でないことは明らかである。文中では、義経の手郎等たちのことが、

Then he was going with his vassals — (Kataoka-Hirotsune, Masuo Kagefusa; Akai-Kagetsugu, Kumai-Tadamoto; Bizen-Nariharu,Musashibo-Benkei; Hitachibo-Kaizon; Ise-Yoshimori; Suruga-Kiyoshige, Washio-Tsuneharu, etc). They clothed like the manner of Yamabushi, a seat of religonist, and among them Benkei was a leader.

と記されており、ここに列挙された名前から判断するに、おそらく歌舞伎に端を発する理解がこの土台になっているものと推察される(45)。先に典拠に比較的忠実に英文化した事例を紹介したが、それらを読んでいる読者たちは、こうした軍記物語以外から得た知識をむしろ多く身につけていたのであり、当時はそれらが渾然一体となって軍記物語関連話が理解されていたことがこの記事によって確かめられる。

（3）翻訳者の常識——軍記物語の翻訳

ところで、英語学習の素材として中世の軍記物語にかかわる人物や話題を語りかえる営みは、『日本之少年』の編集者とその読者のみが体験していたことではない。たとえば、本誌に先立って刊行を開始していた『少年園』では、第一巻第一号（明治二十一年十一月三日刊）の「文園」欄に「THE DEATH OF ATSUMORI」と題した井上十吉による英文が掲載されている(46)。誌面ではタイトルの下に、「(Translated from the〝*Sanko Gempei Seisuiki*〟)」とあって、『参考源平盛衰記』の当該話に基づいた翻訳であることが示されている。「敦盛最期」が創刊号に掲載する英文記事として選ばれていること自体、この話の知名度や人気を証するものといえよう(47)。しかし、前述したとおり、明治二十一年頃にはまだ、近代活字本として『源平盛衰記』や『平家物語』を読む環境はじゅうぶんに整ってはいなかった。したがって、これを読む多くの読者側がもつ一の谷の戦いにおける敦盛の討死に関する理解は、『源平盛衰記』や『平家物語』そのものから形づくられたものであったとは考えがたい。

井上十吉によるこの翻訳文と典拠本文との距離についても簡単に触れておこう。まずはその冒頭部分を掲げておく。

①Atsumori, the youngest son of Shuri Daibu Tsunemori, was deemed the most beautiful youth of all the Taira clan. He had broken through the ranks of enemy and reached the sea-shore. ②There he saw Tomomori, the general of his clan, in a ship far out in the sea. He thought to join him and urged his steed through the foam. Soon his steed was seen struggling with the waves, now sinking, now floating with his gallant rider.

Here from the sea-shore, Kumagaya Jiro Naozane who had

been seeking everywhere for a foe worthy of his steel espied Atsumori with joy as he strove with the stubborn sea. ③He took his bow in one hand and with the other he waved a blood-red fan adorned with a golden sun, as with a loud voice he cried, "Is it not a chieftain of the Taira clan that I see before me? It is not meet that thou shouldst thus flee from the shore. Turn back; Kumagaya Naozane, a valiant knight of Musashi, entreats thee to turn back and meet him in combat. ④If yet thou fleest in fear, he will send an arrow that shall slay thee."

⑤"Ha! what haughty foe is this? Is it hard for me to turn back?" thought Atsumori and,turning back, spurred his steed to the shore where Kumagaya awaited his coming.

右の記事の典拠として、『参考源平盛衰記』該当箇所の本文を次に掲出しよう。比較しやすいように、右の英文に合わせて改行した形で示す(48)。

同経盛ノ末子ニ無官大夫敦盛ハ、紺錦直垂ニ萌黄匂鎧ニ白星ノ兜着テ、滋籐弓ニ十八指タル護田鳥尾ノ矢、鵜毛ノ馬ニ乗給、②只一騎新中納言ノ乗給ヌル舟ヲ志テ、一町許游セテ浮ヌ沈ヌ漂給フ。

武蔵国住人熊谷二郎直実ハ、「哀ヨキ敵ニ組バヤ」ト渚ニ立テ、東西伺居タル処ニ、是ヲ見附テ馬ヲ海ニザブト打入、「大将軍トコソ見奉ル。マサナクモ海ヘハ入セ給フ者哉。返給ヘヤ〳〵。角申ハ日本第一ノ剛者、熊谷二郎直実」ト云ケレバ、⑤敦盛何トカ思ハレケン、馬ノ鼻ヲ引返シ、渚ヘ向テゾ游セタル。

（巻第三十八「平家君達最後并首共掛二一谷一事」）

この場面の状況を読者に説明するために、英文では原文よりも多くの筆が費やされている。そのこと自体は、物語の一場面を抜き出して翻訳するという事情に照らせば必然的な対処といえるが、それ以上に踏み込んだ意訳がなされていることもまた事実で、その点には留意しておく必要があろう。

原文になかった情報としては、下線部①で、敦盛が平家一門の中で最も美しい若者とされていること、下線部②で、敦盛が知盛の船を発見し、それをめざそうとする心中を描いていること、下線部③で、直実が片手に弓を持ち、もう一方の手には金色（こんじき）の太陽が描かれた血のように赤い扇を持っていたとされること、下線部④で、もし恐れてここから逃げるのであれば一矢をもって射殺すぞと脅す直実の言葉を記していること、下線部⑤で、「何と傲慢な奴だ、引き返すなどたやすいこと」という敦盛の心中思惟が明示されていることなどを指摘できる。下線部②⑤の場合、『参考源平盛衰記』の当該箇所（傍線部②⑤）を大きく改筆していることは明白である。一方、原文にあった装束描写（波線部）は英文では削られている。

ここに引用したのは冒頭の一部分でしかないが、見開き二頁分の誌面につづられたこの文章は、「(Translated from the *Sanko Gempei Seisuiki*.)」、つまり『参考源平盛衰記』に基づくものと銘打ってはいるが、かなり大胆な意訳がなされていることがわかる。ここで注目したいのは、そうした意訳がなされた際に顔をみせる翻訳者の常識の質である(49)。長大な物語の一場面を切り出して他言語に置きかえ、わかりやすく再構成して提示しようとする際、文中につけ加えられた原典にはない情報は、訳者が典拠の世界を崩さない親和的な情報だとみなしたものにほかならない。つまり、原典のその場面を訳者がどのように読んだのか、訳者にとっての常識的な理解が描き込まれていると考えられるのである。

念のために確認すれば、原典たる『源平盛衰記』はもちろん『平家物語』でも、敦盛の麗しさ（下線部①）は、直実が彼を組み敷いたの

ちに発見する要素であって、前提としてわかっていることではない。また、弓を携え、弓矢をもって威嚇する直実の姿は両書に見いだせない。また、『源平盛衰記』には扇を手に持っているという要素もみえず、『平家物語』には「扇をあげてまねきければ」（覚一本巻第九「敦盛最期」）とあるが、それを赤地に金色の日輪を描いた扇（下線部②）とするのは、明らかに原典から飛躍している。しかし、こうした敦盛と直実の姿は近世以来、絵画や芸能などの視覚的メディアにおいて扱われてきた典型的なものであった。訳者は、『源平盛衰記』や『平家物語』に淵源をもつ、加工された膨大な数の作品群が近世以来培ってきた理解を身につけているのであり、それをあてはめながら物語の本文を読み、英文として語りなおしたのである。

ここには、読者が多くの関連情報をすでに持っており、それに比するとむしろ物語には限られた情報しか記されていないという関係が成り立っている。こうした関係は、先の義経一行の「勧進帳」に関する理解にも通じており、この時期には決して特殊な状況ではなかったものと思われる。明治二十年代半ば、読者は『平家物語』や『源平盛衰記』からどのような内容を読みとったのか。その具体相のひとつとして、自らの既得知識を駆使して本文の記載内容を補足しながら読むという形を確認した今、軍記物語の本文解釈のありようがこの当時なお、必ずしも決まった形をとってはいなかったことを受け止めなければなるまい。

こうした読みかたは、読者の側に多様な関連知識があればこそ可能となる。そうした意味では、初学の子どもにはできない営みである。これらの記事が、英語学習の〈教材〉としての役割を担っていることを勘案しても、『少年園』や『日本之少年』が高めの年齢層を読者として想定した雑誌であったことがあらためて想起されてよい。そうした子どもたちにとって、多くの軍記物語に根ざした話題は低年齢のころからさまざまな局面で親しんできたものであった。また、そこで扱われる人物や出来事は、それ自体として他（たとえば戦国期や近世の武将、著名人たち）と区別されて特別視されているわけではない。むしろ、種々の関連知識と渾然一体となって融合しながら受け止められていたというのが実態である。そうした読者側の理解のありようは、必然的に物語の読まれかたにも大きく影響していたものと思われる。物語をとりまく諸知識のゆるやかな、しかしきわめて豊かな連関が明治二十年代半ばには存在していたことをここでは確かめておきたい。

なお、翻訳というメディアと軍記物語関連話という観点から、もうひとつの課題を見定めておきたい。『日本之少年』第二巻第十四号（明治二十三年七月十五日刊）の「叢譚」欄に、「批評」として新刊書が三点紹介されている。そのなかに次のような記事がある。

○伊勢の三郎（英文、神田南乗物町吉岡書店寄送）

伊勢の三郎義盛。上野岩花の隠家に於いて、初めて源九郎義経に出遇ひ。其武勇の程に敬服して遂ひに主従の契を結ぶ一段を。平易流暢なる英文を以つて物したるものなり。英文学の志想発達の今日。少年学生休暇中の好伴侶と云ふ可し。殊に其製本の体裁。価格の廉。二つながら便利至極なり。

『伊勢の三郎』と題された本書自体は未見だが、内容は右の記事から推測できよう。注目したいのは、これが「英文」の著作物だということである。当時、「英文学の志想発達の今日。少年学生休暇中の好伴侶と云ふ可し」（傍線部）と述べられるような時代感覚があり、それに応ずる形で、軍記物語に根ざした話題が選ばれて英語その他の外国語に翻訳された例はこれだけではないはずである。とすれば、先に『日本之少年』や『少年園』にみた諸事例は、それらと併せて、より広い視野のもとでその意義を検討する必要があろう[50]。この点は、軍記物語の翻訳史[51]とも関わって、今後の重要な課題のひとつとな

る。

五　投稿作文欄にみる軍記物語関連記事

続いて、『日本之少年』の投稿作文欄に現れる軍記物語関連記事を見渡し、いくつかの観点から分析を加えていこう。

『日本之少年』創刊号の緒言に、

「日本之少年」は広く学生の起草に係る論文の投寄を容れ以て我少年の智識の程度を表示するを力むべし

とあったように、同誌では創刊当初から投稿作文欄が設けられ、以下各号に読者の作文が掲載されていった。欄名は「投書」（第一巻第一号）、「寄書」（同第三号）、「群芳摘華」（同第七号）、「群芳摘萃」（同第八号）、「群芳集華」（同第九号～）、「群芳集萃」（同第十四号～）、「群芳集華」（第三巻第一号～）、「芳苑蒐萃」（第四巻第一号～）、「寄書」（同第十四号～）、「小文学」（第五巻第一号～）、「詞林拾芳」（第六巻第一号～）と折々に変化したが、全期間を通じて全国各地からの投稿作文が掲載され続けた。投稿作文欄の盛況ということ自体は、他誌とも連動した、この時期に普遍的ともいえる動向だが[52]、『日本之少年』の場合、こうした事態に対応するべく、明治二十三年の号外で本誌に掲載しきれない投稿作文を掲載した『少年学術共進会』を発行したのち、これが独立した投稿作文雑誌として刊行され続けることになるほどであったことは、ここで思い返しておこう。

投稿作文の内容は多岐にわたるが、そのなかには軍記物語に関わる人物や事件を扱ったものも少なからず見いだせる。そこには、当時の子どもたちが持っていた理解を示す、興味深い実態があらわれている。軍記物語をめぐる明治期の文化環境に読者大衆の側から光をあてる意味でも、投稿欄に掲載された数多くの作文は重要な分析対象となる。

なお、当時の投稿作文は「文範主義」、すなわち文範・名家文集等に基づく「文章模型による形態模倣」だと評されている[53]。そうした意味で、投稿者の個性をどこまで認めうるのか、その厳密な判定は難しい。しかし、本稿のねらいは文芸的な個性を発見したり、文学史的に評価したりすることにはない。没個性的であるという投稿群の特徴は、当時の常識的理解を探ろうとする際にはかえって好都合でさえある。

ここではさらに、模範文例を通して文章の型を学ぶことで、そこに内包された思想や事実認識、思考法等をも自然に身につけていくという学習効果にこそ注目したい。投稿欄に掲載された作文は個々に独立してはいるが、それらが多く集められた誌面を、読者である子どもたちがまとめて読む体験を各号ごとに積み重ねていくということの意義を受け止めたい。のちに言及するように、軍記物語関連の話題への理解についても、そうした均衡が確かに成り立っていたと考えられる。

明治期の児童・少年雑誌各誌に設けられた投稿作文欄には、膨大な量の作文が掲載されている。そのなかの軍記物語関連記事だけをとっても、容易には把握しきれないほどの総量に及ぶ。今後の継続的な検討を期しつつ、本稿では以下、『日本之少年』の投稿作文をいくつかの観点から分析した結果を記しておきたい。

（1）関連投稿作文の概観

まずは『日本之少年』の投稿作文欄に掲載された、軍記物語関連の作文を概観しておこう。**表1**はそれらの情報を整理したものである。

表１　『日本之少年』投稿作文欄にみる軍記物語関連記事

巻	号	刊行月日	欄名	記事題名	文種別	投稿者住所	投稿者名	年齢・学年	掲載頁	内容注記・備考
明治22年										
1	7	5/15	群芳摘華	児島高徳桜樹ニ書スルノ図ニ題ス		千葉	板倉敬二郎	13	40	
1	8	6/3	群芳摘萃	足利尊氏論		三重	品川直	13	39	
1	8	6/3	群芳摘萃	源三位頼政ノ智能ヲ記ス		千葉	笠原明	11	40	
1	8	6/3	群芳摘萃	記源義経陥一谷		兵庫	水越成美		43	
1	9	6/18	群芳集華	題楠公桜井駅決別図	漢文	新潟	山崎柳塘		35	
1	12	8/1	群芳集華	題佐々木高綱宇治川図	漢文	越前	平野太郎		41	
1	13	8/15	群芳集華	書腰越状後	漢文	越前	平野主耕		37	
1	14	9/1	群芳集萃	題楠公図	漢文		義慶		34	
1	14	9/1	群芳集萃	新田義貞論	漢文	新潟	尾田量助	13	34	
1	15	9/15	群芳集萃	書楠公碑本後	漢文	千葉	河合鎮三郎	15	30	
1	15	9/15	群芳集萃	藤原藤房論		安房	小川梅次		32	
1	17	10/15	群芳集萃	書楠公伝後	漢文	福井	平野太郎		26	
1	17	10/15	群芳集萃	記直実敦盛事	漢文	東京	菅谷政恭		27	
1	18	11/1	群芳集萃	謁新田公墓記	漢文	福井	平野太郎		34-35	
1	18	11/1	群芳集萃	源義経論	漢文	山梨	矢田部雅造	尋常中学2	36	
1	18	11/1	群芳集萃	頼朝論		群馬	中村藤二	12・高等3	39	
1	19	11/15	群芳集萃	源義経論	漢文	東京	菅谷政恭	高等4	29-30	
1	19	11/15	群芳集萃	源頼政論		新潟	斎田一郎		32	
1	19	11/15	群芳集萃	青砥藤綱銭ヲ拾フ事ヲ記ス			菅谷たま	高等1	34	
1	20	12/1	群芳集萃	遊金山記		群馬	小島だい子		40	新田神社に言及
明治23年										
2	1	1/1	群芳集萃	平重盛	漢詩	飛騨	森袖水		68-69	
2	2	1/15	群芳集萃	旭将軍	漢詩	常陸	佐藤房蔵		54	木曾義仲
2	2	1/15	群芳集萃	読外史平氏論賛		茨城	佐藤房二		67	
2	2	1/15	群芳集萃	青砥藤綱滑川ニ銭ヲ拾シハ益ナシ		上総	相澤広吉・麻生終蔵・仝長造		69	
2	2	1/15	群芳集萃	源義経論		肥後	梅田末彦		71	
2	3	2/1	群芳集萃	益あり〳〵藤綱が滑川の一事		越後	須藤光久		65	
2	3	2/1	群芳集萃	紀藤房諫龍馬事		岩手	大森繁		67-68	
2	4	2/15	群芳集萃	題楠公決別図		福島	日下部正		65	
2	4	2/15	群芳集萃	損なり〳〵藤綱が滑川の事（駁須藤光久氏の説）		名古屋	林与吉		67-68	

巻	号	刊行月日	欄名	記事題名	文種別	投稿者住所	投稿者名	年齢・学年	掲載頁	内容注記・備考
2	4	2/15	群芳集萃	読青低藤綱		宮城	遠藤圓五郎		68	
2	4	2/15	群芳集萃	相澤広吉君ニ一言ス			石井右力		68-69	青砥藤綱のこと。参照2-2
2	4	2/15	群芳集萃	下総三賢相澤。麻生。麻生。君ニ告ゲ併セテ大方少年諸氏ニ		香川	佐藤久綱		69	青砥藤綱のこと。参照2-2
2	5	3/1	群芳集萃	平薩州眠花図	漢詩	薩摩	西田英世		60	
2	5	3/1	群芳集萃	青砥藤綱滑川撈銭之事ヲ論ズ		東京	山田生		63-65	参照2-2
2	6	3/15	群花集萃	常磐雪行	新体詩	薩摩	美庵みふ・仝すみ		61	
2	8	4/15	群芳集萃	備後三郎題詩図	漢詩	高知	坂本重倫		52	
2	8	4/15	群芳集萃	備後三郎書桜樹図	漢詩	常陸	枝川勇吉		52	
2	8	4/15	群芳集萃	楠廷尉	漢詩	金沢	遠田克巳		52	
2	8	4/15	群芳集萃	信濃少年諸君ニ一言ス		長野・松本	大日向千年		73-74	木曾義仲に言及
2	10	5/15	群芳集萃	湊川	漢詩	桜雲	石沢発身		59	
2	10	5/15	群芳集萃	常磐雪行	漢詩		柴田孝太郎		59	
2	10	5/15	群芳集萃	静奏舞図	漢詩		深野英一		59	
2	10	5/15	群芳集萃	源義経	漢詩	美濃	高井幸次郎		59	
2	10	5/15	群芳集萃	源義経	漢詩	美濃	武藤百峯		59	
2	12	6/15	群芳集萃	八幡公過勿来関図	漢詩	武蔵	小林鍋一郎		66	
2	12	6/15	群芳集萃	経古戦場	漢詩		迂成		66	湊川に言及
2	12	6/15	群芳集萃	小督祠	漢詩	東京	深野英一		67	
2	12	6/15	群芳集萃	静奏曲図	漢詩	東京	柴田孝太郎		67	
2	12	6/15	群芳集萃	湊川懐古	和歌	薩摩	石塚才助		67	
2	18	9/10	群芳集萃	謁楠公廟謹偈賦	漢詩	尾張	湯本庸		67	
2	18	9/10	群芳集萃	四条畷懐古	漢詩	尾張	湯本庸		67	
2	18	9/10	群芳集萃	壇浦懐古	漢詩	周防	高橋静記		67	
2	18	9/10	群芳集萃	源頼政	和歌	周防	高橋静記		67	
2	20	10/15	群芳集萃	信濃人之特色		長野	北村志津男		77-78	木曾義仲に言及
2	21	11/1	群芳集萃	児島高徳	長歌		長谷川淳		68	
2	23	12/1	群芳集萃	鎌倉懐古	漢詩	長門	原氏顕		67	源頼朝墓に言及
2	23	12/1	群芳集萃	楠公訣別図	漢詩		友谷處士		68	
2	23	12/1	群芳集萃	短文三章（一）雨村久清氏ノ陋見		茅台	山岡米華		79-80	児島高徳・太平記に言及
2	24	12/15	群芳集萃	楠公	和歌		坂本真澄		70	
2	24	12/15	群芳集萃	小楠公	和歌		坂本真澄		70	

巻	号	刊行月日	欄名	記事題名	文種別	投稿者住所	投稿者名	年齢・学年	掲載頁	内容注記・備考
		明治24年								
3	2	1/15	群芳集華	鎌倉江ノ島修学旅行記		東京	長井勇	尋常中学校	70-73	
3	3	2/1	群芳集華	袈裟の伝を読みて			野川喜一		77	「筆のすさび」欄
3	4	2/15	群芳集華	関東男児に告ぐ		下野	君島吹路		76	「鎌倉氏」による平家滅亡等に言及
3	8	4/15	群芳集華	八代紀行		鎮西	乾々子		65-67	懐良親王に言及
3	11	6/1	群芳集華	佐渡相川町ノ景況		佐渡	松田作三郎		70-71	順徳天皇・日野資朝に言及
3	18	9/15	芳苑蒐萃	江島日記			板倉勝明		68-69	腰越万福寺、鎌倉宮、頼朝・広元の墓、滑川、北条腹切櫓等に言及
		明治25年								
4	2	1/15	芳苑蒐萃	熊谷寺謁蓮生坊墓	漢詩	信州	広沼凸津		47	
4	6	3/15	芳苑蒐萃	過篠原古戦場	漢詩	東京	中村聖作		45-46	斎藤実盛
4	6	3/15	芳苑蒐萃	源義家	漢詩	信濃松本	花山生		46-47	
4	6	3/15	芳苑蒐萃	古戦場	和歌	備中	小阪寿太		47	屋島合戦に言及
4	6	3/15	芳苑蒐萃	源義朝の不幸を悲むの余り	詩	山梨	井沢尾茂吉		47-48	
4	10	5/15	芳苑蒐萃	勾当内侍		宇都宮	増淵岩三郎		40	
4	10	5/15	芳苑蒐萃	楠公	和歌		中西橋太郎		44	
4	10	5/15	芳苑蒐萃	三芳野	長歌		野村古梅		44	義経と静
4	11	6/1	芳苑蒐萃	北条氏滅亡の史を読む		埼玉	筒井浩		48	
4	13	7/1	寄書	備後三郎	漢詩	安房	島田安治		49	児島高徳
4	14	7/15	寄書	俊寛僧都	和歌	姫路	剛田はる子		47	
4	14	7/15	寄書	吉野山	和歌		倉本慎平		48	
4	14	7/15	寄書	古来吾帝国一偉人なき乎		福島	権田貢		49-50	楠正成に言及
4	15	8/1	寄書	西遊紀行			小西愛花		49-50	須磨寺宝物・平敦盛に言及
4	16	8/15	寄書	芳山懐古	漢詩	南和	藤原清蔵		48	後醍醐天皇陵に言及
4	17	9/1	寄書	篠原の池		播磨	龍峯仙士		48	斎藤実盛
4	18	9/15	寄書	静女怨	漢詩	長門	岡正次		43	
4	18	9/15	寄書	楠正行	和歌	飛騨	蒲水門		43	
4	18	9/15	寄書	源頼朝	詩	越後	小黒民治		43	
4	18	9/15	寄書	弁慶糊ヲ練ル図ヲ観テ感アリ		愛知	竹沢義雄		44	

巻	号	刊行月日	欄名	記事題名	文種別	投稿者住所	投稿者名	年齢・学年	掲載頁	内容注記・備考
4	19	10/1	寄書	短文一編		東京	鉄胆児		50	日本外史・青砥藤綱に言及
4	20	10/15	寄書	書写山にニ登ル記		兵庫	高浜周宝	中学	46	弁慶に言及
4	20	10/15	寄書	楠正行	和歌	薩摩	高味才次		49	
4	21	11/1	寄書	日野阿新丸	詩	東京	加藤一郎		47	
4	21	11/1	寄書	如意輪堂の扉に題す		東京	績川子	國學院	51	
4	23	12/1	寄書	以仁王	和歌	下野	永井のぶ子		43	
4	23	12/1	寄書	足利尊氏	和歌	下野	永井のぶ子		43	
4	23	12/1	寄書	安徳天皇	和歌	下野	永井のぶ子		43	
4	23	12/1	寄書	小楠公	和歌	石見	内田一蓑		44	
4	23	12/1	寄書	看残菊有感			瀧の屋凉城		47	承久の宗行、元徳の俊基に言及
4	23	12/1	寄書	看残菊有感		長野	小林晤山		48	楠家に言及
4	23	12/1	寄書	看残菊有看		東播	鶯句房小史		48	新田、楠に言及
4	23	12/15	寄書	俊傑之神算		東京	筒井総山		38-39	義経、重盛に言及
		明治26年								
5	1	1/1	小文学	詠史	漢詩	東京	晩香亭主人		67	湊川に言及
5	1	1/1	小文学	壇浦懐古	漢詩	東京	前田重岳		67	
5	1	1/1	小文学	題楠公訣児図	漢詩	武陽	萩原堯春		67-68	
5	1	1/1	小文学	剣豈ニ一人ノ敵ナランヤ		佐世保	東洋之猿		73	源義経に言及
5	2	1/15	小文学	詠史		神奈川	宇野元次郎		79	湊川に言及
5	2	1/15	小文学	平忠盛	和歌		井本金之輔		79	「平忠度」の誤り
5	2	1/15	小文学	源頼朝	和歌	近江	菅克巳		80	
5	3	2/1	小文学	明治廿五年鎌倉地方遠足ノ記		東京	本野亭	尋常中学校	70-72	
5	4	2/15	小文学	明治廿五年鎌倉地方遠足ノ記（承前）		東京	本野亭	尋常中学校	75-76	
5	4	2/15	小文学	詠史	漢詩	金沢	宇野元次郎		77	児島高徳
5	4	2/15	小文学	楠公	漢詩	越後	飯吉富士太郎		77	
5	4	2/15	小文学	過須磨	漢詩	東京	前田一川		78	一の谷合戦古蹟
5	4	2/15	小文学	桜井の駅	和歌	東京	江島吾三郎		78	楠正成・正行
5	4	2/15	小文学	楠正成	和歌	遠江	松下純一		79	
5	4	2/15	小文学	「英雄の末路悲しや衣川」	俳句	信濃	倉島		79	
5	5	3/1	小文学	笠置山懐古	和歌	甲斐	雨宮忠佶		59	
5	5	3/1	小文学	飾磨浦ニ遊ブ記		兵庫	高濱鼎		63-64	源頼朝に言及

巻	号	刊行月日	欄名	記事題名	文種別	投稿者住所	投稿者名	年齢・学年	掲載頁	内容注記・備考
5	6	3/15	小文学	至誠論			西村一徹		59	楠公に言及
5	6	3/15	小文学	吹かぬ前の法螺			翁齋妻蘭		61-62	足利尊氏に言及
5	6	3/15	小文学	常磐雪行図	漢詩	金沢	宇野元次郎		68	
5	7	4/1	小文学	小松公	和歌	熊本	木村篤次郎		73	平重盛
5	9	5/1	小文学	行月瀬記			快々憂人掬翠子		55-57	後醍醐天皇・笠置山に言及
5	9	5/1	小文学	香川行		愛媛	森本樵作		57-58	崇徳院・琴平に言及
5	10	5/15	小文学	屹度申渡ス条々		山口	河村唯三		55-56	修羅府大学校体操教員をしている弁慶の代筆という設定
5	10	5/15	小文学	平忠度	漢詩	信州	宮坂斌		59	
5	10	5/15	小文学	題常盤携三子図	漢詩	青山	有川柳仙		59	
5	10	5/15	小文学	謁楠公碑	漢詩	東播	鶯句房小史		60	
5	10	5/15	小文学	楠公訣別図	漢詩		西村孤蝶		60	
5	10	5/15	小文学	湊川懐古	和歌	神戸	桝谷米一		61	
5	10	5/15	小文学	名和長年	和歌	三河	久田咲太郎		63	
5	11	6/1	小文学	六年ぶりの面会		南山	掬翠生		49-52	福引景品。頼朝公愛馬・平氏に言及
5	13	7/1	小文学	楠公	和歌	熊本	白梅軒		79	
5	13	7/1	小文学	平泉古館より東圃をながめて	和歌	岩手	桃牛子		80	
5	17	9/1	小文学	把酒祭北畠公霊	漢詩		鈴木靖		61	
5	17	9/1	小文学	不平心ヲ論ズ		美作	原田徳之助		75-76	平将門に言及
5	17	9/1	小文学	安宅関ノ義経主従		中越	斎賀荘洲子		78	
5	18	9/15	小文学	小楠公	和歌	東肥	野々邨肇		70	
5	18	9/15	小文学	『安宅関ノ義経主従』ニ就テ		羽陽	三浦天外		75-76	参照5-17
5	18	9/15	小文学	安宅関ノ義経主従ニ付テ荘洲兄ニ答フ		大阪	大江多蔵		78	参照5-17
5	19	10/1	小文学	斉賀荘洲子ニ答フ		神戸	野間亀治郎		58	参照5-17　義経安宅関
5	19	10/1	小文学	高徳朝臣	長歌	肥後	木村翠菊子		72	
5	21	11/1	小文学	九十歳		近江	幽花子		80	太平記平家物語保元平治物語を暗記
5	22	11/15	小文学	滞函雑言		煙村	山根良吉		61-65	箱根・曽我兄弟墓に言及
5	22	11/15	小文学	義貞	和歌	滋賀	菅克巳		67	
5	22	11/15	小文学	庭の教へ		上毛	古池庵主人		80	義経・弁慶に言及

巻	号	刊行月日	欄名	記事題名	文種別	投稿者住所	投稿者名	年齢・学年	掲載頁	内容注記・備考
		明治27年								
6	1	1/1	詞林拾芳	源頼政		東京	上野春樹		66	
6	1	1/1	詞林拾芳	平清盛論	漢文	大阪	笹山正次		71	
6	4	2/15	詞林拾芳	護良親王論	漢文	芸州	佐々木俊夫		70	
6	4	2/15	詞林拾芳	源頼朝論		東京	安藤生		75	
6	7	4/1	詞林拾芳	平知盛	和歌		谷島喜四郎		66	
6	7	4/1	詞林拾芳	宜しく特性に従ふべし		薩摩	萩原彦熊		71-73	楠公父子に言及
6	10	5/15	詞林拾芳	備後三郎	漢詩	兵庫	水越竹南		64	児島高徳
6	10	5/15	詞林拾芳	宿芳野	漢詩	兵庫	水越竹南		64	後醍醐天皇陵
6	11	6/1	詞林拾芳	義光朝臣	和歌	東京	上野春樹		58	
6	11	6/1	詞林拾芳	小旅行		山城	波城生		74	平等院・源頼政・足利又太郎に言及
6	12	6/15	詞林拾芳	芳野懐古	漢詩	東京	山本探童		76	後醍醐天皇陵
6	15	8/1	詞林拾芳	日金山に上る記		武州	関忠三郎		64-65	日金の地蔵堂に言及
6	15	8/1	詞林拾芳	鎌倉懐古		東京	加藤益次郎		68	源頼朝・実朝に言及
6	16	8/15	詞林拾芳	楠正成	和歌	北信	柳里常英子		68	
6	16	8/15	詞林拾芳	護良親王	和歌	北信	杉村仙客子		68	
6	16	8/15	詞林拾芳	新田義貞	和歌	愛知	箕浦現遵		69	
6	16	8/15	詞林拾芳	遠藤武者　剣舞歌	剣舞歌	伊豫	余吾闇雲子		69-70	文覚
6	16	8/15	詞林拾芳	須磨懐古	漢詩		赤浦漁人		70	平敦盛
6	19	10/1	詞林拾芳	鎌倉懐古	漢詩	東京	溝口和		73	源頼朝墓に言及
6	19	10/1	詞林拾芳	巴御前	詩	埼玉	武井勝蔵		74	
6	19	10/1	詞林拾芳	嵯峨の琴のね	詩	磐城	吉野甫		74-75	小督・高階仲国
6	19	10/1	詞林拾芳	小督	漢詩	尾張	箕浦現遵		75	
6	19	10/1	詞林拾芳	古戦場に郭公を聞きて	和歌	甲斐	三神美雄		77	屋島
6	20	10/15	詞林拾芳	八幡公過勿来関図	漢詩	金沢	宇野香荘		74	源義家
6	21	11/1	詞林拾芳	備後三郎	詩	札幌	狩川漁隠		73-74	児島高徳
6	22	11/15	詞林拾芳	古戦場虫	和歌	武陽	大畑省輔		67	小手指原
6	22	11/15	詞林拾芳	常盤抱三子図	漢詩	相模	天行生		69	
6	24	12/15	詞林拾芳	源頼政ノ墓側ヲ過グ			波城生		51-52	

注　「文種別」には記入がないのは普通文である。「投稿者住所」は判明するもののみを県・旧国名レベルを基本として記した。「年齢・学年」は明示されているもののみを記した。

この一覧表を熟覧するだけでもさまざまな要素を読みとれるが、本稿では次の四点にとくに注目してみたい。

A．人物を論じたもの

記事題名を通覧すると、「源義経論」「頼朝論」「常磐雪行」のように、軍記物語に関わる人物を主題とする文章が多いことがわかる。人物への関心が投稿者たちの側に強く存在していたことが、この点からも確認できる。本稿の問題関心に照らすと、まずは、ある人物の事績を論じようとする際、軍記物語がどの程度、いかに関与していたのかが問題となる(54)。

なお、複数の投稿者から、同一人物に関する文章が寄せられている場合もしばしばみられる。それは当該人物の知名度、人気とも比例するのであろう。この点は、他誌の状況も含めて別の機会に検討することにしたい。

B．「絵を見る」という形式をもつもの

「題佐々木高綱宇治川図」（第一巻第十二号）、「平薩州眠花図」（第二巻第五号）、「常盤抱三子図」（第六巻第二十二号）のように、軍記物語のなかの一場面を描いた絵を見て、その印象を記すという作文形式が成り立っていたことがわかる。ここにいう「図」は、広い意味で歴史画と呼んでよいものだろうが、大和絵や錦絵の武者絵のようなもののほか、本誌をはじめとする児童・少年雑誌の口絵も含まれていると考えられる。当時の子どもたちがどのように絵と向きあい、何を読み取り、そこに軍記物語がどのように関わっていたかが問題となる。

C．論戦・応答をなすもの

ひとつの投稿に対して、読者から反論や意見が寄せられ、論戦・応答が展開されるという事例がみられる。「筆戦」と呼ばれたこうした現象は、さまざまな話題についてしばしば生じた現象であるが、投稿を採用する編集者側の裁量がそのやりとりに少なからず関与していることは確認しておこう。こうしたやりとりをすることで文章力や思考方法を鍛えるという学習効果が期待されている。読者である子どもたちの関心を引くような論が編集者によって選択されて、それぞれの論戦が誌面に提供されていることからすれば、そこで扱われている話題はそれだけ子どもたちの関心事であったということを意味しよう。各議論の内実と軍記物語とがどのように関わるのかが問題となる。

D．郷土意識の形成と関わるもの

「謁新田公墓記」（第一巻第十八号）、「遊金山記」（同第二十号）、「信濃少年諸君ニ一言ス」（第二巻第八号）、「鎌倉江ノ島修学旅行記」（第三巻第二号）、「西遊紀行」（第四巻第十五号）のように、軍記物語にかかわる諸地域の史蹟に言及した投稿も少なくない。そこに底流する意識と、投稿者がもつ地域に根ざした歴史意識や郷土意識の形成過程とが深く関わることはいうまでもない。史蹟や関連人物などを顕彰する心性が培われていくなかで、軍記物語関連話が個々の地域とどのように関わったのか、また軍記物語はどのように読まれていったのか。その多様性と普遍性を把握することがまずは求められよう。

以下、これら四点についての具体相を確認していこうと思う(55)。

(2) 人物を論じたもの——源頼政論を例として

まずは人物を論じた事例の具体相をみていこう。ここでは源頼政に関する投稿を取りあげる。

『日本之少年』に掲載された頼政関係の投稿は次の六点である（各記事の詳細については**表1**参照）。頼政は、刊行当初から最終号まで扱われていた題材のひとつである。

①「源三位頼政ノ智能ヲ記ス」

第一巻第八号　明治二十二年六月三日刊

②「源頼政論」
第一巻第十九号　明治二十二年十一月十五日刊
③「源頼政」
第二巻第十八号　明治二十三年九月十日刊
④「源頼政」
第六巻第一号　明治二十七年一月一日刊
⑤「小旅行」
第六巻第十一号　明治二十七年六月一日刊
⑥「源頼政ノ墓側ヲ過グ」
第六巻第二十四号　明治二十七年十二月十五日刊

このうち、③は『源平盛衰記』巻第十六「菖蒲前事」に基づく次のような和歌である。

あやめひくにごりし心なかりせば雲井に清き名をやあぐらん

この話自体は、すでに近世のころから『源平盛衰記』から派生したさまざまな書物や芸能、絵画等に取りあげられているため、典拠を特定することはできない。ここでは、一覧表にみえるように、軍記物語関連話はこの例に限らず歌題としても頻繁に扱われていること、そしてそれは近世以来の詠史という和歌のジャンルに属する営みの一様態とみなしうることを指摘しておく(56)。

さて、①は、治承元年（安元三年）のいわゆる御輿振事件で、達智門を護る無勢の頼政が言葉をもって比叡山の僧兵たちの心を操り、平重盛が大勢で護る陽明門へと向かわせた話を記した文章である。

○源三位頼政ノ智能ヲ記ス

千葉県下総国千葉郡作草分校温習生　笠原　明　十一年六ケ月

治承元年、叡山ノ僧徒、神輿ヲ擁シテ闕ヲ犯ス。頼政ハ達智門ヲ守ル。僧兵来リ、大ニ之ヲ攻ム。頼政冑ヲ免シ下リ拝シ、之ニ云テ曰ク、「頼政ノ山神ヲ崇ムル、年アリ。不幸勅ヲ奉ズ。敢テ弓ヲ関テ神輿ニ向ハズ。昔源平氏並ビ、朝廷ヲ守ル。保元以降ハ平氏益々盛ニシテ、源氏大ニ衰フ。況ンヤ頼政ノ老憊ヲ以テ寡兵、敝甲以テ公等ヲ迎フニ足ラズト。左近衛大将平重盛大ニ兵ヲ以テ陽明門ヲ守ル。彼ヲ避ケテ此ヲ攻ム、勇ト云フベカラズ。公等、之ヲ思ヘ」ト。僧兵則チ陽明門ニ向ヒ、敗レ還ル。世ニ頼政ノ智能ヲ以テ琵琶ヲ還スヲ記ス。

〔参考〕『日本外史』巻之二・源氏正記「源氏　上(57)」

治承元年、比叡山の僧徒、神輿を擁して闕を犯す。諸々の武臣に詔してこれを拒がしむ。頼政、達智門を守る。僧兵来り攻む。頼政、冑を免いで下り拝し、その裨将を遣してこれに言はしめて曰く、「頼政、山神を崇敬すること年あり。不幸にして勅を奉ず。敢て弓を関き神輿に向はず。昔は源・平氏並に朝廷を衛る。保元以降、平は盛に、源は衰ふ。況や頼政の老憊、寡兵敝甲を以てしては、以て公らを迎ふるに足らず。左近衛大将平重盛大兵を以て陽明門を守る。彼を避けて此を攻むるは、勇と謂ふべからず。公らこれを思へ。即は許されずば、頼政、衆卒と輿前に駢死せんのみ」と。僧兵乃ち陽明門に向ひ、敗れ還る。世、頼政の智弁を以て禍を免るゝを称す。

その行文は語彙レベルまでほぼ全面的に『日本外史』に依拠しており(58)（『日本外史』該当部分に傍線を付した）、文範主義といわれる時代における作文のありかたを典型的に表す事例である。したがって、その文章中に、文体面や思想面での筆者の独創的個性を認めることは難しい。しかし、こうした形の作文体験を重ね、またこうした内容の投稿記事を読む体験を重ねることで、おのずと当事者たちの理解や思想も方向付けられ、定まっていったであろう。その過程にある一局面として、こうした事例を軽視することなく受け止めたい。

なお、この投稿が掲載されたのは明治二十二年であるが、そこに記

された知識の源泉が『日本外史』であることにも注目しておきたい。この投稿者にとっては、当時なお『平家物語』や『源平盛衰記』よりも『日本外史』（とその注釈書）のほうが身近な存在であったことがわかる(59)。

続く②は、大義名分という観点から、保元・平治の乱以後の頼政の行動を批評した文章である。まずは全体を四つにわけて、その論の展開を追ってみよう。

●源頼政論　越後新発田　斎田一郎

(a)夫レ士ニ貴ブ所ノモノハ大義名分ナリ。士ニシテ大義名分ヲ知ラザレバ、何ゾ士ト称スルヲ得ンヤ。而シテ遇不遇アリ。戦ニ勝敗アリ。是予メ期スベカラズト雖、此大義名分ヲ欠クトキハ、尊氏巧ニ天下ヲ掠奪シ、身至尊ヲ奉ズト雖、猶罪ヲ万世ニ免レズ。義貞・正成功成ラズト雖、生死是ヲ守リ、猶芳名ヲ千歳ニ垂ル。

(b)夫レ保元・平治ノ際、王政已ニ衰ヘ、覇業方ニ盛ナリ。所謂武門武士ナルモノハ、只ニ名利ニ吸々トシテ東奔西走、大義名分ノ何物タルヲ知ラズ。独リ頼政之ヲ維持スル者ニ似タリ。或人曰、頼政源平二氏ノ間ニ依違中立シ肯テ為義父子ニ属セズ。亦清盛ニ党セズ。其始清盛・義朝ニ与シ、上皇ヲ拒テ為義ヲ攻メ、義朝反スルニ及デハ則義朝ヲ誅ス。後亦清盛ト戦ヒ勝タズシテ死ス。何ゾ進退拠ルナキヤ。世、蝙蝠ノ両端ヲ抱クヲ以嘲ル。頼政実ニ是ニ類スト。余曰、語ニ曰、大義親ヲ滅スト。其頼政ノ謂乎。苟モ大義ノ有ル所、何ゾ親戚兄弟ヲ撰ムヲセンヤ。為義逆ナルトキハ則為義ヲ誅シ、義朝叛スルトキハ則義朝ヲ誅ス。何ノ不可ナル所アランヤ。

(c)或人復曰、道善ナレバ天之ニ与シ、不善ナレバ天之ヲ滅ス。頼政ノ終リヲ見レバ、亦以其不善ヲ知ルベキナリ。余曰、語ニ云ハズヤ、人多キトキハ天ニ勝チ、人定テ而シテ後天之ニ勝ツト。彼尊氏、不忠不義ト雖遂ニ其志ヲ遂ゲ、而シテ其子孫未ダ暴悪ニ至ラザルモ、其下ノ為ニ覆滅セラルヲ以テ鑑ミルベシ。

(d)夫レ平治ヨリ以来、平氏漸ク盛ニ、田園天下ニ半バ、公卿大夫率ネ其門ニ出テ、天子亦其成ヲ仰グ。天下其専横ヲ怒ルト雖、敢テ之ヲ犯スモノナシ。清盛跋扈已ニ極レリ。独リ頼政奮然蹶起、単立無援ノ身ヲ以テ事ヲ仇家環視ノ地ニ挙ゲ、身死スト雖、然レドモ天下ノ武夫ヲシテ大義名分ヲ知ラシメ、人民ヲシテ帰スル所アラシム。壮ナリト云フベキナリ。然リト雖、其倹要ニ拠ラズ、寡兵ヲ以テ四戦ノ地ヲ守ルハ、得策ト謂フ可ラズ。世徒ラニ其成敗ノ跡ヲ以テ順逆ヲ判ズ。謬矣。嗚呼、頼政一紙ノ徴、諸道響応遂ニ以テ平氏ヲ亡シ太平ノ基ヲ開クニ至ル。其首唱ノ功ニ非ラズト云フベケンヤ。

(a)には、大義名分を知る者こそが「士」つまり武士であり、これを貴ぶ者こそが後世に芳名を残すことになるという考えが表されている。類例として提示されているのは、大義名分を欠いた足利尊氏とこれを守った新田義貞・楠正成である。続く(b)では、保元・平治の乱のころ朝廷の権威は衰えていて、武士たちが名利にとらわれたふるまいを重ねるなかで、頼政のみが大義名分を保っていたとする。そして保元・平治の乱および治承四年の挙兵において、頼政が立場を転ずるような行動をくり返したことを批判する声を紹介して、それは叛逆者を滅ぼすという大義のもとで行動したがゆえの結果に過ぎず、何の落ち度もないとしている。また(c)では、最期を迎えるときに天の加護がなかったことをみれば、頼政の不善なることがわかるとする主張に対して、「人多キトキハ天ニ勝チ、人定テ而シテ後天之ニ勝ツ」という諺を引き、具体例として不義不忠ながらもいったんは志を遂げ、そのうちに滅びた尊氏のことを提示する。そして(d)では、平治の乱以降に清盛の専横が続くなかで、頼政だけが決起し、その身は死したけれども

武士たちに大義名分を知らしめたとし、これを「壮ナリト云フベキナリ」と評する。そして、頼政から発した「一紙ノ徴」（以仁王の令旨のこと）の影響が全国に及んでついに平氏が滅び、「太平」の世となったのであるから、頼政には「首唱ノ功」があると主張している。

頼政の武名は、たとえば『平家物語』や『源平盛衰記』が記す鵺退治の話によって中世・近世を通じて広く流布してきた。先にみた投稿作文③で扱われた菖蒲前の話も本来はそこから派生する話題である。明治期に入ってからも、鵺退治をした弓の名手としての頼政イメージはくり返し語り継がれていたが[60]、そのいっぽうで頼政を批判する声も小さくなかったことを伝えている点で、この投稿は貴重である。じっさい、頼政への負の評価は当時かなりの存在感をもっていたようである（投稿⑥参照。後述）。そうした声を払拭するという構えで、この投稿者は頼政の再評価を試みているのである。

ここでの批判は頼政の武勇そのものや、武芸の巧みさには向いていない。いくさに際して、それまでの立場を翻すような行動を重ねたことが問題視されているのである。ここには頼政の生涯・生き方を評価するという姿勢が認められる。『保元物語』『平治物語』『平家物語』は頼政の言動を随所に描きだしてはいるが、一個人としての生涯を大局的に提示したり、評価したりしようとする指向をそもそも備えていない。そうした意味で、こうした評価は軍記物語が提示する枠組みとは異なる視座にたったものといえよう。

軍記物語の作中人物に向けられた、当時の子どもたちの批評眼が顕在化する現場のひとつが投稿作文欄であった。頼政の場合、その生涯をどう評価するかという観点にたつと、世の評価は決して高くはなかったようだ。「世、蝙蝠ノ両端ヲ抱クヲ以嘲ル。頼政実ニ是ニ類ス」といった「或人」の言葉は、それを如実にものがたっている。

ところで、この投稿作文②は、④「源頼政」（第六巻第一号　明治二十七年一月一日刊）を視野に収めることで、また別の意味を帯びて立ち現れてくる。というのは、じつは②と④は全面的にほとんど内容、行文が合致しており、一部に違いはあるものの、基本構造を等しくしているのである。これもまた当時の作文の実態をあらわす現象といえよう。

②と④との間には約四年強の時間差がある。④が②に基づいた作文なのか、あるいは両者がともに共通の模範文に依拠した作文だということなのか、現時点では判断しかねる。ただし、こうした頼政評が投稿作文という文化のなかで保持され、子どもたちの間でひとつの枠組みとして機能し続けていたことを、この事例は明確に示している。文章の型が、そこに内在される思想を伴って流布している実態のひとつをここに見定めることができる。

以上、頼政を論じた投稿作文をみてきた。最後にあらためて、その文章中には『平家物語』などの軍記物語そのものからの直接的な影響は見えにくいことを指摘しておきたい。このことがもつ意味は、今後いっそう幅広い視野のもとで吟味してみなければなるまい。そうした課題を見定めつつ、現時点では、『平家物語』などを参照せずとも、その主な登場人物たちの事績を論じることができるほどの知識を得られる状況が、『日本之少年』誌を読める環境にあった子どもたちの周囲には成り立っていたという事実を受け止めておきたい。なお、投稿作文⑤と⑥については後述する。

（3）「絵を見る」という形式をもつもの

続いて、軍記物語に関わる一場面を描いた絵を見て記された作文を取りあげよう。子どもたちはそうした絵をどのように見つめ、何を受け止めていたのであろうか。そしてそこに軍記物語はどのように関

わっていたのであろうか[61]。

このモチーフの作文の多くは漢詩文形式をとっている（**表1**参照）。前近代から続く画賛という様式がどこかで意識されているのだろう。たとえば、平治の乱ののち、三人の子を連れて都を落ちる常盤御前の姿を描いた絵にかかわる作文例をみてみよう。次の三例である。

①「常磐雪行図」（第五巻第六号　明治二十六年三月十五日刊）

雪撲笠簷寒刺肌　誰知貞婦意中悲　源家運命婦纖手　博得名声是此時

②「題常盤携三子図」（第五巻第十号　明治二十六年五月十五日刊）

雪中辛苦不堪憂　破操可哀従此讎　何料呱々懐底子　終除宿怨致奇猷

③「常盤抱三子図」（第六巻第二十二号　明治二十七年十二月十五日刊）

花顔憔悴美人姿　独抱三児迷雪逵　一念唯存源氏統　委身讐敵亦可悲

牛若を胸に抱き、今若と乙若の手を引いて雪道を進む母常盤の姿は、当時すでに著名な画題である。これらはすべて、そうした絵を見た投稿者が記した文章である。いずれにおいても、常盤の悲しみ、苦しみ、憂いといった感情とともに、憔悴しながら三人の子を連れて雪道を進む常盤の姿をまずは語っている。そして、後半で源氏の運命を背負い、義朝の血をひく三人の子を助けるために敵（平清盛）にわが身を委ねたことを取りあげている。

これらの詩には、投稿者たちのこの絵に対する関心のありかたが鮮やかに表れている。彼らは雪中の常盤親子が描かれた絵を静止画としてはみていない。常盤がその後決意して六波羅の清盛のもとに出頭するまでの悲話を読み取っているのである。そして、常盤の心中に分け入って、「寒」「悲」「辛苦」「憂」「憔悴」といった感覚を共有し、「哀」れんだり、「悲」しんだり、賞讃したりしている。絵を見ることとは、絵を契機として物語を心中に呼び起こし、作中人物の感覚を追体験することであったといえよう。したがって、その詩はいずれも、あたかも物語を読んだ印象を記したようなものとなっている[62]。例示は控えるが、この点は他の題での作例にも共通する特徴となっている。

こうした漢詩文に比べ、仮名交じり文で書かれた作文ではいっそう投稿者の姿勢が明らかである。第一巻第七号（明治二十二年五月十五日刊）に掲載された「児島高徳桜樹ニ書スルノ図ニ題ス」という文章を見てみよう。

○児島高徳桜樹ニ書スルノ図ニ題ス

千葉県上総国山辺郡大網宿共研会　板倉敬二郎　満十三年

春夜沈々、細雨霏々、庭中桜樹アリ。高キ事数十仞、側ラ一士アリ。下ニ甲冑ヲ装ヒ上ニ蓑笠ヲ着テ手ニ文具ヲ持シ、愁ルガ如ク慨クガ如ク桜樹ニ対スル者、是レ児島高徳桜樹ニ書スルノ図ナリ。抑モ公ハ後醍醐天皇西遷ニ当ツテ、千辛万苦シテ精忠大節至ラザルナシ。然レドモ時運未ダ至ラズシテ事成ラズ。乃チ服ヲ変ジテ潜カニ帝館ニ入リ、詩ヲ桜樹ニ書シテ以テ勤王ノ意ヲ表ス。天顔之レガ為メニ開ク。嗚呼其精忠大節、天地ト共ニ今日ニ存ジテ凛々タリ。余毎ニ桜花ヲ観ルゴトニ、未ダ嘗テ公ノ題詩ノ春ヲ想ハザルナキナリ。是レ又忠臣人ヲ感ゼシムルナリ。

『太平記』が語る児島高徳のこの一件もまた、独立した画題として広く扱われてきたものであった。やはりここでも、傍線部のように後醍醐に対する高徳の忠節を語る物語が想起され、そのあとでこうした高徳の心性に共感する投稿者の熱を帯びた言葉がつづられている。

また、第二巻第四号（明治二十三年二月十五日刊）には次のような文章も載っている。

●題楠公決別図　　福島県安積郡　如松　日下部正

其誠忠巍々トシテ諸葛亮ノ上ニ秀デ、其智謀峨々トシテ孫呉ノ上ニ超ル者、其レ唯我楠公カ。予公ノ伝ヲ読ミ、千窟城守ノ段ニ至レバ則案ヲ拍テ而テ感ジ、湊川訣別ノ段ニ至レバ則巻ヲ掩フテ泣ク。頃者友人某、予ニ公父子訣別ノ図ヲ贈ル。予乃チ装潢シテ之ヲ楣間ニ掲ゲテ朝夕之ヲ見テ感泣已ム事能ハズ。昔シ蘇子美張良ノ伝ヲ読テ感奮斗酒ヲ傾ク。今乃チ予ハ公ノ伝ヲ読ミ感泣斗涙ヲ注ガントス。

楠正成・正行親子のいわゆる桜井の別れの場面を描く絵もまた、先の常盤親子や児島高徳の例と同様、極めて著名な画題である。興味深いのは、この文中にはこれまでに述べてきた絵と物語の関係がとくに顕著に現れていることである。投稿者である「予」は、先に「公ノ伝ヲ読」んでその名場面に深い感銘を受けていた。そんな「予」のもとに「父子訣別ノ図」が贈られると、彼は朝夕これを見て絶えず「感泣」しているという。もちろん、そこには文飾があるのだろうが、その「感泣」の涙は、ひとつの絵を契機としてすでに知っている物語を想起し、その内容に心動かれて流したものといえよう。

美の表象として絵画を扱ったり、描画技法を堪能したりするような鑑賞の姿勢が未熟であったこの時期、絵に対する感動はその絵にまつわる物語抜きには語り得なかったことがわかる。そしてそうした絵の見方は、特別な美的感性の持ち主でなくともごく自然におこなっていたことであった。先に『日本之少年』の口絵の検討を試みたが、それらが解説文と組み合わされていたことも、こうした構図において理解できる。

そして、こうした関係の存在をふまえてみると、数々の歴史画の質を支える物語を、人々はどのように身につけていたのかという問題がやはり浮上してくる。この投稿作文では、「予公ノ伝ヲ読ミ、千窟城守ノ段ニ至レバ則案ヲ拍テ而テ感ジ、湊川訣別ノ段ニ至レバ則巻ヲ掩フテ泣ク」とあった。「公ノ伝」という表現からみると、それが『太平記』そのものであった可能性はむしろ低いように思われる。明治期に入ってから語り直された歴史読み物の類や教科書の記事であったのかもしれない。ここでは、投稿作文の形として「絵を見る」という形式が確立しており、それが成り立つ基盤として、読者である子どもたちが絵の奥にひそむ物語に対する相応の理解を持っていたこと、そしてそこには、軍記物語そのものではない情報源から得た知識が大きく関与していたであろうことを見通しておきたい。

（4）論戦・応答をなすもの

次に、投稿作文によって軍記物語関連話をめぐる論戦や応答、すなわち「筆戦」がなされた事例を取りあげてみたい。当時の投稿作文欄では、ある問題に関する論戦、応答が数号にわたって続くという現象がしばしばおこっている。それはもちろん、掲載作品を決定する編集者側の意図や裁量に方向付けられている側面があるのは否めないのだが、軍記物語に関わる話題の受け止められかたを探ろうとする目には、じつに興味深いやりとりとして映る。『日本之少年』のなかでは、第二巻第二号「青砥藤綱滑川ニ銭ヲ拾シハ益ナシ」（明治二十三年一月十五日刊）が発端となった論戦と、第五巻第十七号「安宅関ノ義経主従」（明治二十六年九月一日刊）から始まる応答の二つを確認できるのだが、ここでは後者の具体相を追ってみよう。

ことの発端は次のような投稿であった。

安宅関ノ義経主従　　中越　齋賀荘洲子

予ハ浅学不才敢テ本題ノ如キ事ヲ論ジ得ル者ニ非ズ。然レドモ胸中ノ疑団遂ニ解ケズ。此ニ賢明ナル諸君ヲ煩ハス。抑彼義経ガ実

兄頼朝ト相和セズ、遂ニ修験者ニ扮シテ陸奥ニ逃ルヽヤ、加賀安宅ノ関ニ至ル。関吏其通行ヲ拒ム。此ニ於テ僕弁慶偽リテ勧進帳ヲ読ミ、無難ニ関門ヲ通過セシハ妙計トシテ世人ノ称誉スル所ナリ。然レドモ予ハ之ヲ称誉スルニ躊躇ス。何トナレバ、彼義経主従ノ戦場ニ於テ計略ヲ用ユルハ即チ軍人タルノ名誉ナレドモ、安宅ノ関ニ於テハ軍人ニ非ズシテ一個ノ国民ナリ。此一個人ノ官吏ヲ欺キ法綱ヲ逃ル所、所謂関破リノ罪人タルニ非ズヤ。又義経ヲ此ノ如キニ至ラシメシ者ハ頼朝ノ私怨ニ出ツルトセンカ。然レドモ当時ノ頼朝ハ日本総追捕使ナリ。政事ノ主宰者ナリ。此頼朝ノ発布スル法律ハ即チ天下ノ大政ニシテ、此大政ヲ犯スモノハ即チ天下ノ罪人ト云ハザルヲ得ズトハ、予ノ愚想ナリ。三万ノ青年諸君、明教ヲ惜ム勿レ。

義経一行が安宅の関で訊問された際、弁慶が偽りの勧進帳を読むという計略をもって関を通過した話についての投稿である。投稿者はこれを「妙計トシテ世人ノ称誉」していることに疑義を呈している。「一個ノ国民」たる義経が「官吏ヲ欺キ法綱ヲ逃」れたこと、そして当時の「政事ノ主宰者」であった頼朝が発布した「法律」を犯したことからみて、義経は「天下ノ罪人」ではないか、というのである。

これに対する反応は、半月後に刊行された第十八号に早くも二つ掲載されている。郵便事情や編集の手間を勘案すれば、第十七号のこの記事を読んでごく短期間のうちに意見文をつづって投稿したものと思われる。

まず、「『安宅ノ関ノ義経主従』ニ就テ」（羽陽　三浦天外）では、先の主張の要点を「彼等ハ法律ニ背ケリ。故ニ彼等ハ天下ノ罪人ナリト云フニ過ギズ」と整理し、「果シテ然ラバ子ガ英雄ヲ論ズル又過酷ナリト云フベシ」と主張している。義経に同情的で、その存在を「英雄」として絶対視する投稿者の姿勢は、続く文章からもよく読みとれる。

義経非凡ノ才器ヲ懐キ、或時ハ峨々タル巌石ニ駿馬ヲ策チ、或時ハ漫々タル大海ニ風波ノ難ヲ凌ギ、功アツテ而モ賞セラレズ、却テ鎌倉ニ入ヲ許サレズ。其感慨ソモ如何ゾヤ。其抜山倒海満腔ノ経綸、将タ何ノ処ニカ用ヰン。義経（安）宅ノ関ヲ越ユルノ時、或ハ後日蝦夷ヲ征シ満洲ヲ界スルノ雄図アラザリシナラム。然リ、真ニアラザリシナルベシ。然レドモ彼モ亦英雄ナリ。何ゾ不世出ノ英才ヲ懐イテ草奔ノ間ニ隠ルヽヲ是ナサムヤ。土地広ク人少キノ奥羽二州ニ拠リ、以テ一大事実ヲ成サムト期セシナラム。此英雄ニシテ此雄図アリ。区々タル破関、彼レニ於テ何カアラム。況ンヤ、其逮捕ハ正名ナク正理ナル一片ノ猜疑心ヨリ出ヅルニ於テオヤ。此破関ハ義経ノ義経タル所以、大功ハ細瑾ヲ省ズト云フニアラズヤ。……

その見解を簡潔に整理すれば、義経は「非凡ノ才器」「不世出ノ英才」のある「英雄」で、奥州に逃れたあとの「雄図」を持っていた。「大功ハ細瑾ヲ省ズ」という考えかたに照らせば、「区々タル破関」など問題ではなく、むしろ「此破関ハ義経ノ義経タル所以」なのだ、ということになろう。二人の投稿者の間には、法を遵守するという精神について根本的な違いがある。義経をめぐる英雄論や判官贔屓という感性は、こうした近代的な法意識を超越したところで成り立っていたことにあらためて気づかされる。

この投稿者は義経の活躍として、鵯越の坂落としや暴風雨のなかでの四国への渡海のほか、蝦夷渡り、さらには大陸への渡海伝承までを視野に入れている。もしこの主張がここまでで終わるのであれば、義経への過度な思い入れにまかせた議論とみなされるだけであろう。しかし、これに続けて当時の頼朝の立場に関して次のような主張もつづっている。

子ガ論法ヲ以テスレバ、古来革命ヲ以テ鳴リ、改革ヲ以テ轟クノ人皆罪人トナツテ終ラムノミ。試ニ見ヨ。…（中略）…又子ガ天下ノ主宰者ト称スル源頼朝ハ如何。彼ハ蛭子島ヲ逃レテ平氏ニ背キタルニアラズヤ。而シテ平氏ハ当時天下ノ主宰者タリシナリ。其他ナポレオンハ如何、シーザーハ如何。彼等ハ皆子ガ所謂天下ノ罪人ナリ。子尚彼等ヲ目シテ総テ罪人ナリトセバ、予又何ヲカ云ハン。将タ何ヲカ論ゼムヤ。是ヲ要スルニ、義経主従ガ安宅ノ関ノ一条ハ、道徳ノ最高標準ヲ以テ論ズレバ、或ハ欠クル処ナシトスベカラズト雖モ（兎ニ角偽言ヲ以テ人ヲ欺キタルガ故ニ）未ダ以テ是ヲ非難スルヲ得ザルナリ。否寧ロ予ハ是ヲ称誉スルニ躊躇セザルナリ。宜ナリ。古来謡曲ニ造リ演劇ニ仕組ミ、津々浦々ニ至ルマデ嘖々トシテ其妙計ヲ称誉シ措カザル事ヤ。

同様の論法によって、頼朝やナポレオンやシーザーといった「革命」「改革」をなした者たちはみな「天下ノ罪人」になるというのである[63]。この投稿は人を欺いたという欠点を認めつつも、自分はむしろ「称誉スル」ことへの躊躇はないと結論している。最終的には、論理ではなく感情に傾いた結論となっている。そのためでもあろうか、古来「謡曲」や「演劇」でその「妙計ヲ称誉」してきたことに同調することで、自らの見解の妥当性を保とうと努めている（波線部）。

近代法の精神では、武力による革命を行う権利を法的に保証することはない。したがって、この一件を近代的な法意識では理解しきれないのは当然のことである。二人の投稿者がそのことを自覚していたとは思えないのだが、ともかくも自分たちのよく知っている義経の問題を例題として議論を重ねながら、近代国家を支える法とそのもとで生きることについて思考をめぐらす少年たちの営みをここに見いだすことができる。

さて、この第十八号には、「安宅関ノ義経主従ニ付テ荘洲兄ニ答フ」（大阪　自適生　大江多造）と題された文章も掲載されている。そちらでは、政事の主宰者たる頼朝の発布する法律を犯した義経を「天下ノ罪人」とした見解について、それは「兵乱既ニ治マリ、万民其還スルトコロヲ知ルノ時代ノ事ナリ」としている。頼朝が日本総追捕使となった時期はまだ義経と「干戈ヲ交ヘツヽア」るような状況下であったのだから、「泰平ノ世ニ於テ万民ガ仰グトコロノ政府ト其性質ヲ異ニスルモノ」であり、また頼朝が総追捕使となったのは「一般戦争ニ兵器ヲ用ユルト異ナルナキ」政略だったのたという意見を示している。その上で、義経はこのとき軍人ではなく一国民だったのだからという見解に対して、次のように反論して自らの意見をしめくくっている。

当時義経ハ尚ホ軍人タリ。タヾ修験者ニ仮装シタルノミニシテ、軍人ハ如何ニ仮装スルモ尚ホ軍人タルヲ失ハザレバ、義経ガ其身ヲ全フセンガ為メ如何ナル奇計ヲ運スモ、敢テ咎ム可キニアラズ。サレバ彼等主従ガ巧ミニ関吏ヲ欺キ、安宅関ヲ通過シタルハ、天下ノ法律ヲ破リタル破関ノ罪人トシテ論ズベキモノニアラズ。戦略上ニ於テハ之ヲ称誉スルモ敢テ不可ナク、却テ守関ノ吏ニシテ彼等ノ手段ニ瞞着セラレタルヲ笑ハルヲ得ザルナリ。

義経を罪人としないという点では、この投稿者も先の投稿者と同じである。ただし、こちらは、当時はまだ戦時中だったという理解にたつことで、先の反論投稿では到達できなかったひとつの論理性を示しているといえるだろう。戦時中には日常とは別の価値観がはたらきはじめる。相手を欺くことは戦略として称賛の対象ともなりうる[64]。ただし、最後に「戦略上ニ於テハ之ヲ称誉スルモ敢テ不可ナク」と述べ、関吏を「笑ハルヲ得ザルナリ」と評する姿勢からみて、これを、戦争がもつそうした本質を自覚するがゆえの見解とみることはできまい。投稿者の関心は、根底において、戦時中におこなった義経の「戦

略」に向けられていると考えられる。こうした観点からも、この話題の意味が読み取られていたのであった。それは、明治二十六年当時、戦争における「戦略」への関心が子どもたちをとりまく日常にも広がっていたことの表れともいえるのだろう。

続く第十九号にも、最初の投稿に寄せられた意見が一点掲載されている。「齋賀荘洲子ニ答フ」（神戸　野間亀治郎）と題されたその文章では、

夫レ天下ノ事物ヲ処スルニ正奇ノ別アリ。正ニ処スルニハ正ヲ以テシ、奇ニ処スルニハ奇ヲ以テス。…（中略）…義経主従ノ行為タルヤ、奇ニ処スルニ奇ヲ以テシタルモノニシテ、決シテ咎ムベキモノニアラズ。

という、また新たな観点からの議論が展開されている。ここでいう頼朝がおこなった「奇」とは「私怨」によって義経を追ったこと、義経がおこなった「奇」とは修験者として関を通過したことである。義経は、「苟クモ将来為スアラン事ヲ欲シテ、一時ノ小恥ヲ忍ビ、仏家ノ所謂方便ヲ行」ったのだ。関を通過したのは、「伊豫守タル源義経」ではなく「一ノ修験者」である。修験者が関を通過することに咎はなく、頼朝の命令は「源義経」を捕らえることであった、とその主張は続いている。

加えて、「夫レ当時ノ法律タルヤ、現今ヲ以テ決シテ比較シ得ベキモノニアラズ」と、当時と今との法観念の違いに言及していく。そして、大和春日の神鹿を殺すと「石詰ノ刑」に処せられていたころ、犬と間違ってこれを殺してしまったある人を町の人々が憐れみ、表面上これを犬殺しとして扱って罪を宥めた話があるとして、次のように主張をまとめている。

当時ノ事、裏面即チ其真相ハ如何ナルモ、表面上其弁疎理アレバ可ナリ。義経主従ノ安宅関ヲ通行セシ時ハ、一ノ山伏ニ過ギザリシナリ。安宅ノ関吏之ヲ宥ス、何ノ罪カアランヤ。余ハ弁慶ノ頓智ヲ感ズルモノナリ。敢テ答フ。

今とは遵法観念が異なっており、当時はともかくもつじつま合わせができればそれでよかったのだという。したがって義経にも関吏にも罪はなく、こうした見地にたてば、万事丸く収まる方法を見いだした「弁慶ノ頓智」が最終的に称賛されることになるのは必然の流れといえよう。

これ以後、関連する投稿は掲載されていない。あらためて全体を見返してみると、義経は罪人ではないかとする最初の問題提起を肯定する意見が掲載されることはなかった。ただし、これを単なる義経人気ゆえとするわけにはいかない。どのような観点からその議論が交わされたかに注目しなければなるまい。すでに確認してきたとおり、その過程では多様な観点が提示されていたが、それらはこの話題を解釈したひとつひとつの形なのである。そうした意味で、まずはこの話の読まれかた、受け止められかたがかくも多様性をもっていたことを確認しておきたい。

その上で、こうしたやりとりを記す少年たちが、明治二十六年現在を生きる自分たちをとりまく社会事情に照らし合わせながらこの出来事を解釈していたことに注目したい。とくに、法意識が議論の焦点となっていたことは、憲法発布から年の浅い時期であることを勘案しても象徴的である。近代的な法治国家たらんとする日本の国民としていかにふるまうべきかを教え、考える素材として、子どもたちに周知の、軍記物語に根ざした人や出来事が用いられていたのであった。ここにみた投稿作文のやりとりは、子どもたちが自らおこなっていたそうした思考体験の形にほかならない。

歴史上の著名な人物たちの言動が、明治二十年代を生きる子どもたちの価値観の前にさらされ、近代的なまなざしをもって問い直されて

いた。軍記物語関連話もまたそうした観点から確かに受け止められていたのであった。先の投稿作文にみえたように、この時期の知識基盤としては軍記物語そのものよりも、「謡曲」や「演劇」の力のほうが圧倒的に大きかったと考えられる。この後、次第に軍記物語そのものの本文を多くの人たちが読める環境が整備されるにつれて、物語そのものの読者も確実に増えていったとは考えられるが、その際にどのように物語を読んでいたのかについては決して自明なことではない。そのことは、ここまでに確認してきたことからも十分に見通すことができるだろう。

(5) 郷土意識の形成と関わるもの

さて、次に取りあげたいのは、地域に根付いた歴史伝承としての軍記物語関連話をめぐる状況である。まず指摘したいのは、これが自分が住む地域意識の内実と深く関わっていたことである。信濃における木曾義仲の場合を例として概観してみよう。

信濃少年諸君ニ一言ス　長野県東筑摩郡松本　大日向千年

我ガ親愛ナル信濃少年諸君ヨ。眼ヲ縦チテ日本ノ歴史ヲ一観セヨ。一鞭叱咤、平氏ヲ栗殻壑ニ鏖殺セシ木曾義仲、兵ヲ用ユル鬼神ノ如ク、出没変幻人ヲシテ震慄セシムル真田幸村、彼レ果シテ信濃男子ニアラザルカ。博学英才、後世ヲ洞観セル佐久間象山、魁梧多力貢育テ壓スルノ雷電、彼レ果シテ信濃男子ニアラザルカ。古代ニ在テハ英雄豪傑此ノ如ク輩出シ、傲然海内ニ雄視シタルニモ係ハラズ、今ヤ倏忽変ジテ又後ニ落チ、唯々黙々、嘗テ一言モナキモノハ何ゾヤ。……

右のように書き出されるこの文章は、この投稿作文欄で信州人の気勢があがっていない状態を嘆き、意識改革を訴える内容となっている。「此レ果シテ信濃男子ノ真相乎。余輩ハ信ズ、信濃男子斯クマデ勇気ナキモノニアラズ、斯クマデ柔弱ナルモノニアラズ」とも述べるこの投稿者の意識のなかには、「日本ノ歴史」に名を刻む「英雄豪傑」たちを輩出した土地としての信州観が横たわっている。そのなかに、倶利伽羅合戦で平氏軍に圧勝した木曾義仲も含まれている（傍線部）。

第二巻第二十号掲載の「信濃人之特色」（長野県尋常中学校生徒北村志津男）もまた、信濃国が気候温和、土地豊饒、山水秀麗といった特色をもつことについて、史上に著名人を輩出してきたのはそうした特色ゆえのことだと述べている。

之ヲ古昔ニ考フルニ、彼ノ平氏ヲ西海ニ奔竄セシメ、意気一旦天下ヲ併呑セシ豪傑ハ乃チ木曾義仲ナラズヤ。麾下ノ剛勇四天王ノ如キ、其他、真田氏父子ノ智謀ニ於ケル、太宰春台ノ儒学ニ於ル、佐久間象山ノ海防論ニ於ル、将タ力士雷電ノ怪力ニ於ル如キ、近世ニ至レバ田中平八郎ノ商業ニ於ル如キ、彼等ハ皆我信州古来ノ質直剛勇ノ気風ニ仗リテ其大名ヲ為スモノニシテ、是実ニ我信ノ特色ニ非ズヤ。嗚呼、此最モ尊重スベキ信山ノ特色ヲシテ万古泯滅ラザラシムルハ、抑我輩信人ノ一大義務ニ非ズヤ。……

表現こそ異なるが、ここには先の投稿と重なる類型化した信州観が認められる。そのなかに木曾義仲は確かな地位を占めているのである（傍線部）。なお、波線部にいう義仲麾下の四天王の剛勇なる活躍を語るのは『平家物語』や『源平盛衰記』ではない。ここには『義仲勲功図会』に代表される近世の読本類からの影響が認められてよいだろう。これもまたこの地域ならではの特色といえる(65)。

義仲のみが特別扱いされているわけではないが、こうした数々の偉人たちを産んだ郷土を愛し、そこに誇りを持つ心性を涵養していく土壌が、この地域に培われていたことを察することができる。その現場では、当然、郷土の「英雄」としての義仲の物語も共有されていたは

ずである。こののち明治三十二年（一八九九）になって、浅井洌作詞の郷土唱歌「信濃国」が制作されることになるが、右の投稿にみえる義仲、象山はそのなかで、「旭将軍義仲も／仁科五郎信盛も／春台太宰先生も／象山佐久間先生も／皆この国の人にして／文武のほまれたぐひなく／山と聳へて世に仰ぎ／川と流れて名は尽きず」と歌われている(66)。こうした歌詞につながる感性が歴史的に育まれてきた過程にも、地域における軍記物語の読まれかたという問題は関わってきたのである。

ところで、こうした郷土意識を支える史蹟を訪れるのは地元の人たちだけではない。子どもたちの場合でも、旅行や修学旅行でやや離れたところから現地を訪ねる機会などがありえたのである。第四巻第十五号（明治二十五年八月一日刊）には「西游紀行」（小西愛花）と題された紀行文が掲載されている。投稿者は、同年六月五日に大坂梅田駅から「官線」の汽車で「須磨明石ノ勝」を探る旅に出たのであった。そして神戸停車場で山陽線に乗り換え、須磨駅で下車したのちに上野山福祥寺（いわゆる須磨寺）に向かい、修復工事中の本堂に参った。そのあと、投稿者は寺の宝物を観覧している。

宝物ニハ弘法大師作青葉ノ笛、祐学上人ノ高麗笛、敦盛ノ南無阿弥陀仏ノ赤旗等ニテ、見料二銭ナリ。有名ナル若木桜ハ門前ニアリ。是レハ源氏須磨ノ巻ニ、須磨ニハ年かへりてなくつれ〳〵なるに植し若木の桜ほのかに香ひそめて空の気色うららかなりトアルニ因リ名ケシモノナリトゾ。弁慶ノ制札ニ一枝ヲ折ル者ハ一指ヲ斫ルト云ヒシハ、即チ是ナリ。……

この投稿は、明治二十五年（一八九二）当時の須磨寺の様子を伝える貴重な証言でもある。その記述から察するに、若木の桜の『源氏物語』に発する由緒は現地ではじめて知ったものかと思われる。それに対して、弁慶の制札のこと（もとは浄瑠璃「一谷嫩軍記」に由来）は以前から知っていたようである。敦盛の赤旗のこと、またそもそも敦盛と須磨寺との関わりについての理解は当然身につけていたと考えられる(67)。ここでもやはりその理解の基盤には、浄瑠璃や歌舞伎から得た知識が大きく作用していたことがわかる。

第三巻第二号（明治二十四年一月十五日刊）に載る「鎌倉江ノ島修学旅行記」（東京府尋常中学校生徒　楊堂　長井勇）は、修学旅行で鎌倉を訪れ、神社・仏閣・史蹟を巡見するさまをつづった長文である。そのなかに鶴岡八幡宮の宝物を一見したくだりがある。

其所蔵ノ宝物ヲ一見セント欲シ、左ニ折レテ社ノ周囲ヲ繞レバ、七神輿ト住吉明神ノ像トテ安置セリ。抑モ本社ハ応神天皇・神功皇后・仲哀天皇ノ三神ヲ祭リ奉ツリ、其周囲ハ八十二間アリテ、頼朝是ノ処ニ於テ政治軍務ノ秘密会議ヲ開キタル処ナリト云フ。而シテ宝物ニハ神功皇后ノ三韓征伐ニ用ヒ玉ヒシ鎧、頼朝ノ愛撫セシ池月・磨墨ノ硯ヲ始メトシ、静御前ノ舞踏ニ用ヒシ衣服、頼朝ノ後白河帝ヨリ賜ハリシ硯箱等、凡ソ十余品アリ。余等一々之ヲ見終リ、方サニ階ヲ下ラントス。……

頼朝や静や後白河院といった史上の人物たちゆかりの遺品が、池月・磨墨という『平家物語』が伝える名馬の伝承とも重なりながら、渾然一体となって八幡宮の由緒に関する投稿者の理解を彩っている。

このあと、修学旅行の一行は「静御前、政子ノ切望ニヨリ法楽ノ舞踏ヲナセシ所」である「若宮」で「案内者ヨリ種々ノ説明ヲ聞」き、さらに移動して「頼朝卿ノ墓」や「大塔宮神社」の「土窟」などを見学しながら歩みを進め、そして「滑川」に至る。

……滑川ヲ渡ル。是ノ川ハ実ニ細流ナリト雖モ、昔時青砥藤綱ノ十銭ヲ水中ニ落シ、五十銭ノ炬火ヲ以テ之ヲ拾ヒタリシト云フ最モ人心ニ膾炙セル有名ナル古蹟ニシテ、其是非利害ニ至テハ已ニ文壇諸氏ノ喋々スル一問題ナリ。日本之少年紙上ニ於テモ、嘗テ

筆戦セシ事ナリシヲ回想シ来レバ、万感胸裡ニ刺衝シ来レリ。

傍線部にいう「万感」とはどのようなものであったか。滑川での青砥藤綱の話はもとは『太平記』に根ざしている。この話ゆえに、滑川は「最モ人心ニ膾炙セル有名ナル古蹟」であった。投稿者はこの話を現地で想起したわけだが、それに加えて、この一件の是非について「文壇」で議論がなされており、『日本之少年』誌上でもかつて筆戦が行われたこと（前述[68]）をも想起して心を動かしたのである。誌上に掲載された投稿作文を読むという体験は、読者の心に数々の記憶となって確実に刻まれ、日常のなかで折々に想起されるさまざまな物語の情報源ともなっていたのであった。こののち、当日の宿の室内では「或ハ鎌倉ノ古跡ヲ談ジテ当時ヲ回想スルアリ、或ハ大塔宮ノ弑逆ヲ語リテ直義ノ不忠ヲ憤ルアリ、或ハ滑川ノ古事ヲ論ジテ其是非ヲ争フアリ」といった状況であったという。

さて、ここであらためて、先に取りあげた源頼政に関する投稿のうち、論じ残したものに目を移してみよう。

第六巻第十一号「小旅行」（明治二十七年六月一日刊）と同第二十四号「源頼政ノ墓側ヲ過グ」（同年十二月十五日刊）は、同一投稿者（山城　波城生）の作である。前者には、宇治周辺に住むかと思われる投稿者が、同年四月十七日から翌日にかけて一人で京都市街や洛西を旅したさまでつづられている。その帰り道の記述において「宇治の清流」に言及し、

……長堤漸く尽き、老健児頼政が千古の恨を止めたる平等院を過ぎ、快男児又太郎が吶喊して渡りきと伝ふる旧跡を過ぎ、青山青川の間を行く。家に帰れば足頓に重きを覚へ、郊外静に車声なく、後園の鶯啼声高し。

と結ばれている。波線部にあるのは、『平家物語』等が記して著名な、宇治川の戦いでの足利又太郎の渡河戦にもとづく史蹟紹介である。傍線部の平等院が頼政が歿した故地であるという理解とともに、『平家物語』に根ざしたこれらの話題が、地元住民にとっての郷土意識を形づくる大きな要素となっていたことが窺える。

投稿という行為は、そうした郷土意識を全国に発信するという意味も帯びていた。右の文章を記したあと、この投稿者は頼政の墓に焦点をあわせた文章をしたため、あらためて同誌に投稿している。それが約半年後に掲載された「源頼政ノ墓側ヲ過グ」である。

宇治川の南岸、平等院にある「一株ノ老松」の陰に「一個ノ碑石」がある。それが「源家ノ老雄三位頼政」の「枯骨ノ遺レル処」なのだという導入ののち、戦死した頼政への思いがつづられていく。

吾レ嘗テ史ヲ読ミ、頼政戦没ノ段ニ至ル毎ニ、未ダ長嘆ノ声ヲ作サヾル事ナキ也。夫レ武人一タビ雄志ヲ樹テ、胸中策スル所ヲ行フ。若シソレ運到ラズ時利ナラズ、一敗広野ニ屍ヲ晒スモ、亦敢テ恨マザル可キ也。ソレ然リ敢テ恨マジ、然レドモ彼レ頼政ヤ、蓋世ノ雄略ハ以テ天下ニ将タルニ足リ、絶代ノ武勇ハ以テ三軍ヲ叱咤スルニ足ル。真ニコレ好箇将軍ノ器也。シカモ始終失意ノ地ニ在リ、満朝皆コレ平族、赤旗独リ色鮮カニ、白旗マタ威ヲ競フ事能ワズ。彼レノ勇ニシテ而シテ其ノ志ヲ伸ブルノ処ナク、彼レノ武ニシテ而シテ其ノ腕ヲ試ムルノ時ナシ。頼政タル者豈胸中不平ノ浪、躍ラザラントスルモ得ザランヤ。

傍線部にあるように、すでにこの投稿者は何度も「史」を読み、頼政の事績に親しんでいたという。ここにいう「史」は、これまでに確認してきた明治二十年代半ばの状況に照らせば、『平家物語』や『源平盛衰記』そのものではなく、『日本外史』などの、物語に基づく後世の史書や歴史読み物とみるのが妥当であろう。まずは、頼政の墓と向き合い、関連する物語を想起し、その人物の心を思いやって感をもよおすという様式は、先にみた「絵を見る」という形式の作文から読

みとれるものと同質であることを指摘しておこう。

また、「頼政戦没ノ段」を記した「史」を読むごとに発するという「長嘆ノ声」の質にも注意したい。それは、「蓋世ノ雄略」「絶代ノ武勇」を備える「好箇将軍ノ器」でありながらも、世情ゆえにその「志」や「腕」を発揮する場がなかった頼政の胸中を思いやっての「声」である。頼政の内心には、表にはみせなかった「不平ノ浪」が「躍」っていたのではないかというわけだ。

これについては、投稿者が読んだ「史」にそう書かれていたのではなく、「史」の文章を読んでそこから察した事情と考えるのが妥当であろう。つまり、投稿者は頼政の忍耐する精神性に心打たれているのである。ここでは、「史」の叙述に、実人生をせおったひとりの生身の人間としての頼政の姿を見出し、その心のありようを察し、それをもとに人物評を下すという営みがなされている。これこそがこの当時の「史」の読みかたのひとつの形なのであった。

右の引用に続く文章もあげておこう。

某ノ論客頼政ノ事ヲ挙ル、ソノ挙グ可キ時ニ非ズ、彼レハ則チ挙グ可カラザルノ時ニ事ヲ挙ゲ、自ラ亡ヲ招ケル也ト論ゼリ。夫レ然リ豈夫レ然ランヤ。憶フニ頼政ノ器、蓋シ自ラ時運ノ可ナラザルヲ知ラザリシニアラジ。然レドモ其ノ境界ヤ彼ノ如ク、其ノ失意ヤ彼ノ如シ。頼政老ヒタリト雖、堂堂恥ヲ知ルノ血性男児也。憤起一番天下ニ呼号セント欲スルモノ、蓋シ勢ヒ自ラ然ル可キ也。皮悲ノ見ヲ以テ妄リニ英雄ヲ論責ス、過レリト謂ツ可シ。彼レハ実ニ好箇ノ将才ヲ有シテ、シカモ志ヲ常世ニ得ズ。快快失意ノ境界ニ住ヒ、終ニ悲憤ノ裡ニ死セリ。彼レノ一世ハ実ニ失意ノ一世也。彼レノ最期ハ実ニ悲憤ノ最期也。嗚呼不遇ノ英傑、吾レ汝ヲ悲シム。吾レ汝ヲ悲シム。

先には別の投稿作文をとおして、明治二十年代当時、頼政を批判する声が少なくなかったと考えられることを指摘した。そのことは右傍線部の表現から再確認できよう。だが、この投稿者は波線部のように、頼政批判の声について、「皮悲ノ見ヲ以テ妄リニ英雄ヲ論責ス、過レリト謂ツ可シ」とみる立場に立っている。頼政の「器」「好箇ノ将才」を前提として、「堂堂恥ヲ知ルノ血性男児」の「失意」「悲憤」の「最期」に同情し、この「不遇ノ英傑」を「悲シム」のである。ただし、それはあくまでもこの投稿者が特別な思い入れのもとで「史」を読んだ結果に基づいているといわざるをえない。二重傍線部の「憶フニ」という語がそのことを象徴的に示しているからである。

ところで、ここで投稿者が頼政に注目しているのは、自分が生活する地域に関連史蹟があるからにほかならない。この投稿者にとって、「史」を読むこととはそうした地域の歴史への関心を満たすことでもあったと考えられる。ここでは、「史」の読まれかたのひとつの形として、史蹟の由緒と関わる事例に注目し、それが子どもたちがもつ地域の歴史に関する意識を更新する役目を折々に果たしていたことを確認しておきたい。

ここまでにみてきたような、寺社に伝えられた宝物や墓・碑といった史蹟は、その土地の歴史的由緒を象徴するものとして、訪問者あるいはその土地での生活者である子どもたちに受け止められていた。そして、こうした直接体験に根ざした文章が投稿作文欄に掲載されることで、全国に向けてその土地の由緒が発信されることになる。それによって、子どもたちが、他とは違うその地域やわが郷土への特別な思いを涵養する環境をいっそう整えていったと考えられる(69)。そうした知識の環のなかで軍記物語関連話は想起され、読みなおされ、地域社会のなかで意味づけなおされてもいくのである。

六　読まれかたの歴史を問う――結びにかえて

本稿では明治二十年代に刊行が始められた総合誌としての児童・少年雑誌のひとつである『日本之少年』にみえる中世の軍記物語関連記事に注目し、その様相にいくつかの観点から分析を加えてきた。その結果、本誌が刊行されていた明治二十二年から二十七年のころには、『平家物語』や『源平盛衰記』などの軍記物語そのものではなく、『日本外史』や演劇・芸能といった後世になって仕立てられたものたちを通して、子どもたちが理解を深めていた様子が浮かび上がってきた。軍記物語そのものはほとんど読まれていないけれども、著名な人物や出来事についての話を中心として軍記物語関連話への相当量の理解をもっているという関係が、『日本之少年』を読めるような社会層の子どもたちの間には成り立っていたと考えられるのである。そして、どうやらそれは他誌の読者にも共通する、この時期の軍記物語をとりまく環境を特徴づける一現実であったと考えてよさそうである。こうした見通しの妥当性は、今後さまざまな観点から論証していく必要があるが、これまでの軍記物語研究のなかではまったく顧みられてこなかった、児童・少年雑誌等[70]の資料にも調査の裾野を広げ、明治期から大正・昭和期へと続く期間における、この物語の読まれかたの歴史を丹念に追いかけてみる必要があるように思われる。

その過程では大きな変化が生じたのであろうことは、現時点でも十分に見通しうる。たとえば、本稿でみたような、著名な登場人物への関心を核とした名場面主義といえるような享受姿勢に長く慣れ親しんできた人々が、近代活字本として軍記物語が大量に制作され、それが広く流布するようになったからといって、ただちに物語の全巻をはじめから最後まで通読するようになったとは考えがたい[71]。長期にわたる社会的体験をとおして養われた感性や価値観は、たやすく変わるものではない。

本稿で扱えたのは、明治期の児童・少年雑誌にみる軍記物語の受容と再生に関わる研究のうちのごくわずかな問題のみである。『日本之少年』以外の各誌に関する分析という大きな課題が残されている。また、『日本之少年』についても、たとえば歴史読み物として書かれた軍記物語関連話の様相は本稿では扱えなかった。さらには、こうした記事を載せた雑誌を読むことをとおして培われていく子どもたちの感性――たとえば尚武・忍耐・忠・英雄・敵などと関わるもの――が、対外戦争を体験していく日本社会のあゆみとどう関与していくのかという重要な検討課題もある。

私たちは軍記物語をこれから将来へどのように読み継ぐことができるのか。そのことの意義は、軍記物語がどのように読まれてきたのかを問うことなしにはつかめまい。そうした課題と向き合おうとするとき、明治期の子どもたちに向けられた言説、明治期の子どもたちが発した言説はこれから多くの重要な示唆を与えてくれるにちがいない。

注

（1）鈴木彰『平家物語の展開と中世社会』（二〇〇六・二　汲古書院）の「終章」において、「〈平家物語〉の文学史」という課題を提示した。この課題については、それ以後、「斎藤別当実盛の選択――老武者の恥辱と武勇――」（「神奈川大学評論」55　二〇〇六・十一）、「近世・近代の木曾義仲――『義仲勲功図会』から『木曾義仲勲功記』へ――」（鈴木彰・松井吉昭氏・樋口州男氏編『木曾義仲のすべて』収　二〇〇八・十二　新人物往来社）などで論じてきた。

（2）こうした問題については、鈴木彰「交響する平清盛像（イメージ）――近世から近代・

現代へ」（樋口州男氏・鈴木彰・錦昭江氏・野口華世氏『図説　平清盛』収　二〇一一・十一　河出書房新社）でも取りあげた。

（3）佐々木八郎氏『平家物語の研究』（早稲田大学出版部　一九四八・五）がその先駆的位置を占める。最新のものは、大津雄一氏・日下力氏・佐伯真一氏・櫻井陽子氏編『平家物語大事典』（二〇一〇・十一　東京書籍）において、「近・現代文学」と題して、「明治以降、平成二〇年までに刊行された『平家物語』と関連する小説・戯曲・評論」作品の一覧表が掲載されている（大津雄一氏作成）。また、この間の過程については同項参考文献参照。

（4）柴田芳成氏「児童読物・教科書の中の八幡太郎義家」（武久堅氏監修『中世軍記の展望台』収（二〇〇六・七　和泉書院）、大津雄一氏「戦時下の『平家物語』」（『国語と国文学』85・11　二〇〇八・十一）、榊原千鶴氏「「女子の悲哀に沈めるが如く」――明治二十年代女子教育にみる戦略としての中世文学」（飯田祐子氏・島村輝氏・高橋修氏・中山昭彦氏編『少女少年のポリティクス』（二〇〇九・二　青弓社）、鈴木彰「明治期の子どもたちと源頼光の物語」（『歴史と民俗』25　二〇〇九・二）などがこうした問題にかかわる。

（5）一つの試みとして、軍記・語り物研究会でシンポジウム「軍記物語と近代」（二〇〇六年一月二十九日　於早稲田大学）がおこなわれ、報告者である佐藤泉氏・大津雄一氏・佐伯真一氏の論文が「軍記と語り物」43（二〇〇七・三）誌上に掲載されている。また、兵藤裕己氏『太平記〈よみ〉の可能性　歴史という物語』（一九九五・十一　講談社）が近代における『太平記』問題を射程に収めている。

（6）参考として明治十年～二十年生まれの各界著名人を確認してみよう。この世代が、本稿で注目する明治二十年代に幼少年期を過ごしたことになる。明治十年……荒木貞夫、窪田空穂、辻善之助、中田薫、明治十一年……有島武郎、鏑木清方、下中弥三郎、寺田寅彦、野間清治、前田光世、与謝野晶子、吉田茂、吉野作造、明治十二年……荻原守衛、河上肇、菊池契月、大正天皇、滝廉太郎、永井荷風、正宗白鳥、明治十三年……熊谷守一、松岡洋右、米内光政、明治十四年……会津八一、岩波茂雄、小山内薫、明治十五年……青木繁、有島生馬、生田長江、小川未明、金田一京助、五島慶太、斎藤茂吉、種田山頭火、野口雨情、橋本進吉、明治十六年……安倍能成、植芝盛平、北一輝、北大路魯山人、小林古径、志賀直哉、高村光太郎、鳩山一郎、三船久蔵、諸橋轍次、明治十七年……石橋湛山、下村湖人、竹久夢二、東條英機、長谷川伸、安田靫彦、山本五十六、明治十八年……大杉栄、川端龍子、北原白秋、正力松太郎、田辺元、土岐善麿、中里介山、前田青邨、山下奉文、若山牧水、明治十九年……石川啄木、伊藤忠兵衛、谷崎潤一郎、中村吉右衛門（初代）、萩原朔太郎、藤田嗣治、武者小路実篤、山田耕筰、明治二十年……芦田均、荒畑寒村、折口信夫、片山哲、児島喜久雄、重光葵、東久邇宮稔彦王、山本有三。

（7）勝尾金弥氏『黎明期の歴史児童文学　「歴史読本」から「日本お伽噺」まで』（一九七七・六　アリス館）、香曽我部秀幸氏「歴史絵本と絵雑誌にみる歴史英雄像」（三宅興子氏・香曽我部秀幸氏編『大正期の絵本・絵雑誌の研究　一少年のコレクションを通して』収　二〇〇九・十一　翰林書房）等、明治期から大正期以後にも及ぶ。

（8）石井研堂氏「明治初期の少年雑誌」（『太陽』33・8　一九二七・六）、滑川道夫氏『日本作文綴方教育史1〈明治篇〉』（一九七六・八　国土社）、鳥越信氏編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』（二〇〇一・四　ミネルヴァ書房）、向川幹雄氏「総合児童雑誌の出現」（同氏『日本近代児童文学史研究1―明治の児童文学（上）―〔児童文学研究年報　第9号〕』収　一九九九・三　兵庫教育大学向川研究室）、印刷博物館編『ミリオンセラー誕生へ！――明治・大正の雑誌メディア――』（二〇〇八・九　東京書籍）、甲斐雄一郎氏『国語科の成立』（二〇〇八・十一　東洋館出版社）等参照。

（9）木村小舟氏『改訂増補　少年文学史　明治篇上巻』（一九五二・二　童話春秋社）。木村氏の業績とその意義については、飯干陽氏『木村小舟と『少年世界』』（一九九二・十　あずさ書店）参照。

（10）続橋達雄氏『児童文学の誕生――明治の幼少年雑誌を中心に――』（桜楓社　一九七二・十）。

（11）続橋氏「『少年世界』の登場」（同『児童文学の誕生――明治の幼少年雑誌を中心に――』収　桜楓社　一九七二・十）

（12）浅岡邦雄氏「明治期博文館の主要雑誌発行部数」（国文学研究資料館編『明治の出版文化』収　二〇〇二・三　臨川書店）参照。なお、二年目からは平均六万五千部程度となるという指摘もなされている。

（13）おもに、木村小舟『改訂増補　少年文学史　明治篇上巻』（一九五二・二　童

話春秋社）、上田信道氏「『日本之少年』解説」（『日本之少年【復刻版】解説』収　二〇一〇・十一　柏書房　→以下、「上田氏解説」と略称）による。なお、誌名の読みかたは「にほんのしょうねん」である。第四巻各号表紙に、「THE NIHON NO SHONEN」とローマ字表記されていることから、「にっぽんのしょうねん」ではないことがわかる。

(14) 坪谷善四郎氏『博文館五十年史』（一九三七・六　博文館）参照。

(15) 他にも、明らかに大人向けの商品広告が含まれていることからもわかる。

(16) 木村小舟氏『少年文学史　明治編』は「三面六臂の勢猛く」と述べている。その他、同書では須永の人格面への言及もある。

(17) 第一号掲載の定価表によれば、一冊の場合は前金五銭、郵税共六銭、六冊の場合は同二十九銭と三十五銭、十二冊の場合は同五十七銭と六十九銭、二十四冊の場合は同一円八銭と一円三十二銭であった。

(18) 滑川道夫氏「明治の児童雑誌」（福田清人氏・山主敏子氏編『日本児童文芸史』収　一九八三・六　三省堂）は、「学術欄（学習を含む）の充実に比して、文芸欄読み物は貧困であった。エリートの立志少年を対象としている感がある」と評している。また、「初期には読者の進学のための学校情報に力を入れ、次には歴史談（小中村義象、萩野由之ら）に力点が置かれていることは指摘されている。「譚園」（文芸関係欄）には「力が注がれていない」ともある。

(19) 木村氏『少年文学史　明治編』。ただし、滑川氏に「大衆読者に迎合しない毅然さを最後まで持続した編集子の気位が感じられる」という見解もある。

(20) 本稿では検討しきれないが、博文館から発行された他の児童・少年雑誌の状況との関係の把握は、今後の課題として見定めておきたい。

(21) 佐伯真一氏「『平家物語』の注釈史的研究　近代」（山下宏明氏編『平家物語批評と文化史』収（一九九八・十　汲古書院）に指摘がある。高木市之助氏・永積安明氏・市古貞次氏・渥美かをる氏編著『平家物語』（増補国語国文学研究史大成9　一九七七・四　三省堂）所載の「平家物語平曲研究文献目録」でも、「平家物語の本文と註釈書」のなかにこれをあげている。なお、同欄には明治十九年の高井蘭山『絵本平家物語』が載るが、その内容は『平家物語図会』であるから、本文としては『平家物語』そのものではない。

(22) 注（21）佐伯論文。

(23) ただし、軍記物語の版本を一揃いで持っていてもどれだけの人が通読していたかはわからない。『平家物語』の版本では、延宝五年（一八七七）版、元禄十一年（一六九八）版の目録には章段名ごとに該当丁数が記されている。こうした配慮も、章段ごと場面ごとに本文を選択して読むことを前提とするがゆえのことであろう。

(24) デイヴィッド・バイアロック氏「国民的叙事詩の発見――近代の古典としての『平家物語』」（ハルオ・シラネ氏・鈴木登美氏編『創造された古典――カノン形成・国民国家・日本文学』収　一九九四・四　新曜社）が、「「歴史」から「文学」へ」という章を設けて、こうした動きを分析している。

(25) なお、大津雄一氏「文学としての規定と評価」（『平家物語大事典』収）によれば、明治期に日本文学史を生み出そうとする動きと並行して、『平家物語』を叙事詩として定位していく動きもあり、それはすでに明治七年にはみえることが指摘されている。ただし、明治二十年代という時期は、それが本格化する前の段階に位置する。

(26) もちろん、それが文学史というものなのだという理解もありうるだろう。しかし、前述したように、私は作り手側だけではなく、享受する側を視野に入れ、両者の間で生々流転するさまざまな均衡関係を把握することで、これをとらえるという立場にたつ。

(27) こうした問題については、中世文学会平成二十三年度春季大会での報告をもとにして、戦国期の薩摩・大隅地域の事情を例として論じた。鈴木彰「「佚文」の生命力と再生する物語――薩摩・島津家の文化環境との関わりから――」（『中世文学』57　二〇一二・六）。

(28) 『尋常小学読本』および『高等小学読本』の引用は、海後宗臣氏編『日本教科書大系　近代編第五巻　国語（二）』（一九六四・三　講談社）による。

(29) 第十八課「源平あそび」、第十九課「平清盛」については、鈴木彰「近代教科書と平家物語」（川合康氏編『平家物語を読む』収　二〇〇九・一　吉川弘文館）で触れたことがある。

(30) 当初は歌川年方ら浮世絵師の手になる木版画（第五、十号）も交じるが、その大半は銅版画・石版画である。第一号から第三号の表紙には、日吉丸（のちの秀吉）と蜂須賀小六（正勝）の出会いの場面（いわゆる矢矧橋の出会い）を描く月岡芳年の絵が使用された。

(31) 菜花園主人すなわち主筆須永金三郎による記事である。なお、その記事の末尾に、

因に云ふ巻頭掲くる所ろの木版画ハ過る日上野桜ヶ岡に於いて開かれた青年絵画会出品中尾形月耕氏の門人耕一（本名日本橋区新乗物町七番地小林有実氏）の揮毫にして賞状を得たるものなり

という口絵の由来も紹介されていることが注目される。口絵の問題は、当時の美術絵画界における画題選択の志向という問題ともつらなる。また、月耕以後の浮世絵師たちの活動を伝えるという点でも興味深い。

(32) 事実、第十三号（八月十五日刊）は「帝国法理文三分科大学之図」、第十四号（九月一日刊）は「東京第壱高等中学講堂」であることが示唆的である。これらにあこがれる年齢層が想定されていると考えるのが自然であろう。

(33) 注（8）石井氏「明治初期の少年雑誌」。

(34) 鳥越信氏『児童雑誌「小国民」解題と細目』（二〇〇一・一　風間書房）、上笙一郎氏「解説『小国民』――近代最初の〈児童〉雑誌」、上田信道氏「解題　小学生むけ雑誌のスタイルを開拓した『小国民』」（ともに『小国民　解説・解題・総目次・索引』収　一九九九・十　不二出版）。なお、加藤理氏は安倍能成ほか多くの人たちの回想談に本誌のことが出てくることを指摘している。同氏『駄菓子屋・読み物と子どもの近代』（二〇〇〇・五　青弓社）第2章「児童の世紀」と読書の喜び」参照。

(35) 注（34）鳥越氏著書。

(36) これは後述する投稿作文欄でもくりかえし扱われるテーマである。

(37) 『少年園』も口絵を掲載していくが、外国の風景や外国人の肖像画などが中心で、軍記物語関連話が題材となることはない。『少年園』読者の年齢層と関わるものと考えられる。

(38) なお、第三回懸賞文では「豊公論」が課題とされている（同年九月十日締め切り）。また、第二回懸賞書画では、「八幡公勿来関詠歌の図」が題とされ（明治二十三年五月三十日締め切り）、第二巻第十三号に優等作が掲載されている。

(39) 以下、記事の引用に際しては適宜句読点・濁点等を補うこととする。なお、引用(a)(b)は第六号、(c)は第七号からの引用である。

(40) 「本誌改良の趣旨を述へて新年の祝辞に代ふ」（第二巻第一号。「日本之少年」欄）。じっさいには「附録」欄となった。ただし、これ以前にも「入学試験問題集」欄は存在した。

(41) 注（4）榊原論文。

(42) 『源平盛衰記』では袈裟の美しさは強調されているが、賢さ（very wise）は具体的な言葉としては押し出されてはいない。

(43) 内容は、「Ⅰ. Watanabe Kiso」（渡辺競）、「Ⅱ. Yaheibyoye Munekiyo」（弥平兵衛宗清）、「Ⅲ. Ito Sukekiyo」（伊東祐清）の三題からなる。

(44) 同号に掲載されたものは、他に「A LETTER OF THANKS FOR A HELP」、「SAKURAJIMA」、「JAPAN」の三点。

(45) 『義経記』、能〈安宅〉にはこうした手郎等たちの名前は出てこない。人名でいえば、「御摂勧進帳」（安永二年〈一七七三〉中村座顔見世狂言）の役名に近いようである。

(46) 「文園」欄には他に伊沢修二「天長節の児歌」と饗庭篁村「紅葉」が載る。

(47) 第一巻第十一号の「文園」欄には、「URASHIMA: A JAPANESE RIP VAN WINKLE」と題した浦島太郎の物語が全文掲載されている。著者は「MASAYUKI KATAOKA」とある。

(48) 引用は改訂史籍収覧本による。私に句読点、かぎ括弧等を付した。また、行間に書き込まれた諸本異同の注記は省略した。

(49) 訳者井上十吉は「翻訳」としてこれを行っており、『源平盛衰記』に取材した「創作」とは考えていない。もちろん、当時そうした概念が厳密に識別されていなかったことも考えられる。

(50) 明治期における軍記物語およびその関連話の翻訳という、より大局的な見地にたつと、幕末から明治期にかけて日本を訪れた外国人たちの手になる日本体験記・見聞記類に収められた数々の記事（そのなかにも多くの軍記物語関連記事がみえる）が西洋社会を中心として日本のイメージ――とりわけここでは〈武〉の国日本というイメージを念頭におく――を発信していったことや、明治十八年以降大正期へと続くちりめん本の制作と流通といったことも地続きの問題であることは容易に見通しうる。おそらくこれだけでも大きな文化史的動向として把握しうるものであり、今後取り組むべき大きな課題といえるだろう。なお、ちりめん本の日本昔噺シリーズには、『俵の藤太』（B・H・チェンバレン訳。明治二十年）、『羅生門』（ジェイムズ夫人訳。明

治二十二年）、『大江山』（同訳。明治二十四年）が収められている。石澤小枝子氏『ちりめん本のすべて』（二〇〇四・三　三弥井書店）、田嶋一夫氏「ちりめん本「日本昔噺」シリーズと中世説話文学」（「説話文学研究」45　二〇一〇・七）参照。

(51) マイケル・ワトソン氏「『平家物語』外国語翻訳一覧」（『平家物語大事典』収）はこの分野で最も充実した成果であるが、現時点では日本国内でなされた外国語翻訳文献については扱われていない。今後の課題となろう。なお、軍記物語の翻訳論としては、同氏「『平家物語』外国語訳の限界と可能性」（「軍記と語り物」45　二〇〇九・三）がある。

(52) 齋藤希史氏「作文する少年たち――『穎才新誌』創刊のころ――」（「日本近代文学」70　二〇〇四・五）などで取りあげられた、これ以前から続く投稿作文をめぐる文化的土壌のうえにおきた現象であり、これ以後に継続していく。土居安子氏「読書投稿欄から見る明治期の『少年世界』――『少年世界』創刊号当時の『小国民』との比較を通して――」（「国際児童文学館紀要」23　二〇一〇・三）等参照。

(53) 注（8）滑川氏『日本作文綴方教育史1（明治篇）』。ただし、「型を学んで、型を出でてじぶんの型を創っていく」（同書）という側面が備わっていたこともまた事実である。

(54) ここでは軍記物語に関わる人物に絞って掲出しているが、じっさいには神話や古代から幕末・維新期、明治期に至るまで、史上のさまざまな人物が扱われている。そうした人々との違いという観点からも軍記物語の存在感が問われる。

(55) このほかにも、同一投稿者の投稿が複数回掲載された事例があることや、普通文のみならず漢文・漢詩・和歌・長歌・俳句・新体詩など、いろいろなジャンルの作文、文芸の材として軍記物語関連の話題が定着していることなども興味深く、示唆的である。別の機会に掘りさげてみたい。

(56) 「詠史」という題での和歌の投稿もしばしば認められる。

(57) 引用は、頼成一氏・頼惟勤氏訳『日本外史（上）』（一九七六・九　岩波書店）による。仮名交じり文の投稿作文と比較するために、あえて訓読文を引用した。

(58) ただし、一部に誤解を含む。

(59) 第五巻第十九号には、「頼山陽」（東豫　森本竹南）と題した山陽の伝記を記した投稿作文が載る。文中では、「幼にして外史を読み政記を学び亦詩鈔を誦し、新居帖を習ひ其伝を読みて、芸州の一傑頼山陽を敬慕して、自ら之に至らんと欲するもの也」という決意が述べられている。

(60) 草双紙や武者絵、絵馬など、子どもたちの周辺にもそれは確実に流通していた。

(61) この形式についても、史上のあらゆる時代の人物・事件を取りあげた絵が扱われている点で、前節「人物を論じたもの」の場合と同様である。

(62) たとえば、第二巻第十号（明治二十三年五月十五日刊）の「常盤雪行」は、

　綽約婢妍桃李姿　雪中携子不堪悲　衾裯破操常盤績　残夢未醒飄日旗

とある。題名からは判断しかねるが、絵を見て記した本文中の三例と内容、観点ともほとんど差はない。また、常盤の物語として子どもたちが想起したものの一例として、第二巻第六号（明治二十三年三月十五日刊）に掲載された作文をあげておく。

●常盤雪行（倣新体詩）　美庵みふ　薩摩　仝　すみ

四季の中にも冬の日は。哀れを添ふるものぞかし。風ふき落しふる雪に。何処とも同じ銀世界。枯れし草木も時ならぬ。花さし春に相生の。松の緑を吹きすさぶ。嵐の音のいとゞしく。ふりつもりける白雪に。色は真白に変れども。わがきみにつくす節操をば。いかで破らんさかしめの。昔を思ひめぐらせば。覚へず袖に一時雨。紅葉と共にちり〳〵と。散り行く方もなさけなや。またみどりごと二人まで。童をつれて唯一人。路もそれける白雪の。吹きまく風にも撓みなく。有為転変は世の習ひ。きのふに変る紫陽花や。歩む姿は花あやめ。深きうれいの深み草。胸なでをろすなでしこや。風のかどはす女郎花。みづから心を丶にゆりと。身をまかせしは中〳〵に。よのつねならぬ心とは。知るや知らずや白雪の。きえての丶ちはりんどうの。旗を再び飄し。鹿もかよわぬひよどりの。峯より落とす布引の。淵より深く山よりも。高き響を著して。弓矢の恥をも雪ぎしは。実に勇ましきさかしめの。心は雪より潔し。都に遠き村里の。女童に至るまで。誉る其名の香しや。嗚呼勇ましき賢女よ。嗚呼勇ましきさかしめよ。

(63) この点、福沢諭吉が明治十年二月に「時事新報」に連載した「丁丑公論」で、西南戦争をおこした西郷隆盛のことを論じて、「唯物の名のみに拘泥し、苟も政府の名あるものは顛覆す可からず、之を顛覆するものは永遠無窮の国賊なりとせば、世界古今、何れの時代にも国賊あらざるはなし」と述べた論理と同質である。

(64) 佐伯真一氏『戦場の精神史　武士道という幻影』（二〇〇四・五　日本放送出版協会）参照。

(65) 注（1）拙稿参照。地域性を考えれば、朝敵扱いではなく英雄として義仲を描く物語のほうを選んで読むのはある意味で自然なこととともいえよう。

(66) 松本市教育会浅井洌遺稿集編集委員会編『浅井洌』（松本市教育会一九九〇・十二）参照。明治三十二年六月、『信濃教育会雑誌』第一五三号に「長野県小学校用唱歌新作」として掲載された。昭和四十三年五月二十日、「信濃の国」は長野県歌に制定されて今日に至る。同歌と「信濃」イメージの関わりについては、上條宏之氏「近代における「信濃」に託されたイメージをめぐって」（地方史研究協議会編『生活環境の歴史的変遷』収二〇〇一・十　雄山閣）が論じている。

(67) 文章中にはこのあと、明石の人丸塚の隣にある月照寺について、「宝物ハ敦盛ノ鎧其他二、三ニシテ、観覧料は任意ナリ」とか、帰り道について、「列車来ル。乃チ乗車シテ、敦盛塚、鐵拐ヶ峰ヲ見テ進ミ……」とかいう記事がある。この土地柄ゆえということもあるが、この投稿者の敦盛や一の谷の戦いへの関心と理解は深かったものと思われる。

(68) 第二巻第二号「青砥藤綱滑川ニ銭ヲ拾シハ益ナシ」（明治二十三年一月十五日刊）に始まるものであった。約一年前の誌面での出来事にあたる。

(69) 第五回懸賞文では、「わが郷里」が課題とされている。第六巻第十二号で披露された優秀作では、さまざまな史蹟の由緒を盛り込みながら、全国各地の「わが郷土」が紹介されている。

(70) 他にも、新聞、一般雑誌、歴史読み物、絵本なども無視できない。小説・戯曲・評論は明治期における文芸活動の一部にすぎない。

(71) 注（23）で、各章段に対応する丁数をつけた目録を巻頭に備えた版本が制作されていたことを述べた。

〔附記〕資料調査の際には、大阪府立国際児童文学館および大阪府立中央図書館国際児童文学館の関係各位にたいへんお世話になりました。心よりお礼申し上げます。

明治大学人文科学研究所紀要　第七十二冊（二〇一三年三月三十一日）縦　八十一―一〇二頁

大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究

岩井憲幸

—— *Abstract* ——

A Study Regarding the Text of Ōtsuki Gentaku and Shimura Kōkyō's *Kankai-ibun*, 1807

IWAI Noriyuki

The purpose of this paper is to propose a currently available way to obtain the best text of *Kankai-ibun*, the original manuscript of which has been lost. *Kankai-ibun* is a full report on the experiences of 16 sailors of the Sendai Clan over the years 1793-1803, during which time they were cast adrift, landed in Russian territory, remained there for some time, and finally returned to Japan via both the Atlantic and Pacific Oceans. Four of the men were returned to Japan by Nikoraj Rezanov, the second envoy to Japan from Russia, after Adam Laksman. They traveled on a ship under the command of Ivan Fyodorovich Kruzenshtern, the commander of a Russian fleet that was attempting the first Russian circumnavigation of the globe. It would be the first circumnavigation, as well, for any Japanese. After reaching Japan and having been refused in his bid for trade negotiations, Rezanov handed over the four Japanese sailors to the authorities, and in 1805, he left Japan.

In Edo, end in December, 1803, the sailors were interrogated for more than 40 days by Ōtsuki Gentaku, a court physician of the Sendai Clan and a famous *rangakusha* (a scholar undertaking the study of Western sciences by means of the Dutch language), as well as by Shimura Kōkyō, a Confucian scholar, also of the Sendai Clan. In February, 1804, Gentaku and Kōkyō produced a rough-draft report, but Gentaku was unsatisfied with it, and it was not until May, 1807, that a full report, the product of continued investigations and repeated rewritings, was completed and presented to the Clan. It was entitled *Kankai-ibun*, consisted of 16 volumes, and reportedly contained 115 beautiful illustrations. Unfortunately, this original manuscript was later lost.

There are over 50 manuscript copies in existence today. *Kankai-ibun* texts have been printed several times since the Meiji period, but the authenticity of their sources is in doubt. From among a number of well-preserved manuscripts, I have selected three for particular study: one owned by the Miyagi Prefectural Library (=*D*), one owned by the Ichinoseki City Museum (=*I*), and one owned by the Aijitsu Collection in Ōsaka (=*A*). *A* is famous for having been granted to Yamagata Shigeyoshi, a merchant under Sendai Clan patronage in Ōsaka, but it has been little studied, and it has been of particular interest for the purposes of this paper.

Briefly expressed, the major features of the three manuscripts are as follows;

A: officially copied from the original, given to Shigeyoshi by the Lord of Sendai in 1808, i.e., only one year after Gentaku had presented that original to the Clan. The text-lettering is in the official-copyist style, and the text contains a few lacunae, including words regarding sexual relations and illustrations related to Christianity, which were intentionally omitted by the copyists.

D: evaluated as being next-best to the original, with many fine illustrations. While the text contains, unfortunately, many worm-eaten parts, it has no lacunae and has only rarely undergone any revision.

I: recopied from a manuscript that had been copied from Gentaku's duplicate of the original. That manuscript had been produced by Ōtsuki Bankei, Gentaku's son, who presented it to Itō Genboku, a famous *rangakusha*, to express Bankei's gratitude for financial help. The text of *I* is, generally speaking, similar to that of *A*, and from this we may imagine that it provides a reasonably accurate reflection of the original compiled by Gentaku.

Among the *A*, *D*, and *I* texts, there are no passages or individual words which reflect different meanings, and it would seem safe to assume that we can currently obtain the best *Kankai-ibun* text by emending on the basis of a comparison of *A* with *D*.

《個人研究第2種》

大槻玄沢・志村弘強編『環海異聞』本文確定の基礎的研究

岩井憲幸

一　はじめに

本稿は、文化四年（一八〇七）成立の『環海異聞』が比較的多数（注1）今日迄伝存してはいるものの、いわば原本というべき書が現存不明であり、従って最良の本文翻刻（注2）がなされていないという現状に対し、最良の本文を確定する為の第一段階を模索した報告である。ここでは、従来あまり知られていなかった愛日文庫所蔵本につき詳しく述べ、この書を中心にすえ、さらに善本と目される宮城県図書館所蔵旧伊達家本・一関市博物館所蔵本（注3）との比較を通じて、愛日文庫本が『環海異聞』の本文確定にとり必須の書であることを示す。紙幅が限られているゆえ、『環海異聞』の成立事情等々は諸家の研究（注4）に任せ、かつ既知のものとして不問に付し、即課題に入る。以下では上記三本をそれぞれ愛日本（略号A）・旧伊達家本（D）・一関本（I）と適宜略称する。

二　愛日本の書誌

大阪の市立開平小学校に存する愛日教育会所蔵の『環海異聞』（A）については海野一隆氏による〈資料紹介〉がある（注5）が、従来あまり知られていなかった故、重複を厭わずやや詳しく記す。

(1)通番号：130(1)～(16)、木崎番号288（注6）

(2)著者：大槻茂質・志村弘強編（注7）

(3)冊数等：美濃判十六冊、即ち〈序例附言〉の首巻一冊、〈巻之一〉～〈巻之十五〉迄十五冊。

(4)成立：文化四年（一八〇七）序

(5)刊・写、装幀：写、和装本、四針眼、袋綴

(6)書名等：内題に〈環海異聞巻之一〉のようにある。

(7)本文体裁：毎半葉八行取り、注双行。挿図多数（別表参照）

(8)各巻紙数：別表参照。なお丁付けなし。

(9)印顆：『愛日文庫目録』によれば〈思貽堂圖書記〉（注8）

(10)箱書等：二重の木箱に保存。外箱蓋オに中央より左へ〈環海異聞　全十六巻／維文化五年歳次戊辰／季冬従／仙臺君拝領／重芳謹記〉、内箱蓋オ中央に〈環海異聞　十六冊〉、内箱内押さえ板オには書名を中央に配し、右より〈文化五年歳次戊辰季冬従／仙臺君拝領／環海異聞　全十六巻／思貽堂重芳謹記〉と、それぞれ墨書が存する。

いくつかの項目につき補う。(3)の〈美濃判〉だが、実際は第一冊目〈序例附言〉において二六・七×一九・三センチ前後。(4)成立は〈序例附言〉三六オに〈文化四年丁卯初夏　醫臣大槻茂質謹識〉とある。(6)

についてはやや説明を要する。各冊は拝領直後に施されたと推量される保護表紙に厳重に包まれ、かつ題簽も貼られているが書名を欠く。原装の表紙は紺地で、書き題簽を有するものと思われるが、確認できず。全冊に施されている保護表紙は、書冊全体をくるみ込み、かつ要所要所糊づけされている。この保護表紙は上端に龍をあしらった紋様が薄青で刷られおり、右端に貼られた題簽紙にも双龍で枠をなす紋様が薄赤で刷られものを用いる。題簽にはすべて書名が大書されておらず、右下隅に〈序例附言〉〈一〉…の如く小書きがある。これが筆によるかペンによるか不明。さらに保護表紙左下隅にペン（鵞ペンか）により〈mok. 1〉(注9)〈1〉…〈Eind. 15〉の文字が直書きされている。〈1〉の字形は大文字の〈J〉を用いる。蘭学者流である。保護表紙の仕立てとペン書きは山片重芳によるものであろう。なお、保護表紙右端には後代の図書ラベルが全冊に貼付される。⑽の箱書だが、内箱蓋オを除き、他は山片重芳による直書きとみられる。〈文化五年…冬〉は重要な年紀の記述で、⑷の補記中の〈文化四年…初夏〉脱稿時から早くも一年半程後に山片は拝領したことになる。蛇足だが、重芳は大坂の豪商山片家の四代目当主であり、山片蟠桃はその番頭職にあった。重芳は好学でも知られ、蟠桃は『夢の代』の著述をもつ学者でもあった。同家は二代重賢の時、仙台藩の蔵元となり、四代重芳にあっては殊に仙台藩との格別な結び付きを有していたようで、商売上のみならず、種々の海外情報をも得ていた様子が現存資料からうかがえるのである。

三　愛日本の本文と丁数　愛日本の各巻は、それぞれ一冊仕立てになっていることは上述したが、その本文の構成はどうであろうか。第一冊〈序例附言〉の巻首には次のようにある。

環海異聞　序列附言

同36オにはこうある。（丁数は私に算えた）。

文化四年丁卯初夏　醫臣大槻茂質謹識

さらに巻尾42ウには次のようにある。

総計拾五巻巻首序例目録壹巻共拾六巻図一百十五／従寛政五年癸丑迄文化三年乙丑拾三ヶ年となる也

後二者の記述から本書の成立と編者が知られるのだが、編者については大槻のみで、序例本文中に志村の名が記されている点は注意すべきである。拙稿では草稿本を重視し、大槻の単著とはみず両人の著作とみる。

37オ以下には〈目次〉と題する記述が続く。全体の内容を知るに簡便であり、かつ後述の挿図の数も記すので以下全体を引用する。

目次

巻之一

寛政五年癸丑石巻出帆後難風に逢ひ」数ヶ月漂流し甲寅六月オンデレイツケといふ嶌に漂着しナーツカといふ湊に」壱ヶ年に向（ナンく）んとして滞留せし記　三図

巻之二　」（37オ）

ナーツカ滞留中の記并に魯西亜舩の」護送を得て乙卯四月此湊を發し」其本領の内地オホーツカといふ湊に」着岸し数日逗留其八月より翌丙辰」の年迄拾五人之者共追〻三ヶ度に」オホーツカ出立ヤコーツカといふ處に」到るまての道中記　拾五圖

巻之三　」（37ウ）

ヤコーツカ江着暫く滞留夫よりイルコーツカ」迄被送届惣人数追〻丙寅十二月」同所に相會せし迄の道中記并に」此所に数

年足を止る事になりたる記」

八ヶ年滞留中紀事分類

街衢居室　弟一　七図
巻之四
飲食　弟二
服飾　弟三　卅図
巻之五
寺觀道教　弟四
産育及赤子命名　弟五　六図
婚　弟六
巻之六
葬　弟七
祭　弟八
衙廳並官名職掌政治兵卒武備」　弟九
刑獄　弟十
銭貨　銭鈔　弟十一　三図
巻之七
尺度并里程　弟十二
秤量　弟十三
楽器　弟十四　五図
氣令　弟十五
耕農　弟十六
交易　弟十七
醫療　弟十八　三図
物産　弟十九
數量　弟二十
土俗風習　弟廿一

」（38オ）

」（38ウ）

」（39オ）

巻之八
言辭　弟廿二
天文　地理（諸國地名本國通称）　時令
人倫　身體　居室
動物　器財　衣服織段
飲食　言辞　二図
各門譯語並ニ名物ノ解其下ニ譯セリ
巻之九
癸亥の年三月王命下りて拾三人の者」（40オ）イルコーツカ出立七千里の道中へ首途し」舊都ムスクワを經て新都府ペトルブルカ江」到れる道中の記并旅舘滞留中の記」これ享和三年也
巻之十
國王江目見以来の次才并に都下巡覧」の記　六図
巻之十一
都府滞留中の記二
此所にて（癸亥六月）儀平等四人の者日本」使節舩同伴帰朝すへき旨申渡され」出立してカナスダといふ港より大舩に乗」組迄の記　九図
巻之十二
六月十六日カナスダ出帆第那馬尓加（デ子マルカ）と」諳厄利亜（インゲリア）江舟を泊め加那里亜（カナリア）嶋江舩を」（41オ）寄せ夫より赤道直下の海上を經過し」南亜墨利加洲（アメリカ）伯西児（ブラシリー）の内ヱカテリイナ」湊江着岸の海路及同所滞留出帆して」其大洲の岬を乗廻し西海に向ひし」迄の記　三圖
巻之十三
甲子（文化元年）四月下旬マルケイサといふ裸（ハタカ）」嶌江舟を繋（カ）け此所を發し

」（39ウ）

」（40ウ）

て再ひ」（41ウ）赤道直下を西に距りサイペイツケ嶌を歴（へ）夫より北亜墨利加（アメリカ）洲を右にして亜細亜（アシヤ）」洲なる魯西亜領分の盡境カミシヤーツカ」といふ湊江七月初旬着岸の海路并に」同所数日逗留用意整ひ八月五日出帆」蝦夷地より日本の東南にあたる大洋を」渡海し薩摩海江向ひ九月初旬肥前」長崎江入津迄の記　五圖　」（42オ）

巻之十四

長崎港入舩上陸後の次弟並乙丑（文化二年）」三月御奉行所御請取迄之記

巻之十五

往来滞留前後の間の雑事

以上〈目次〉の末に上に引いた巻尾（42ウ）の引用文が総括として記されている。ここで図を〈一百十五〉としていることに注意されたい。

次に各冊の丁数であるが、次表のようである。ここでは墨付が半丁の場合も一丁と算した。表中の丁数は比較の便を考えアラビア数字を用いる。単純に加算すれば全十六冊で全五六〇丁となる。又、最終巻がもっとも厚いことが容易にみてとれよう。

巻	A丁数	D丁数	I丁数	備考
序例附言	42	42	42	
巻之一	34	34	34	
巻之二	33	33	33	
巻之三	33	33	33	
巻之四	34	34	34	
巻之五	34	34	34	
巻之六	36	36	36	
巻之七	34	34	34	
巻之八	30	30	30	
巻之九	36	36	36	
巻之十	32	32	31	*
巻之十一	34	34	34	
巻之十二	33	33	33	
巻之十三	31	31	31	
巻之十四	36	36	36	
巻之十五	68	68	70	*

注　＊巻之十においてIが〈31〉であるのは、A・Dが32オに〈環海異聞巻之十終〉と記すのに対し、Iはこれを欠き、白紙が続くゆえ、算えなかったためである。＊巻之十五の〈70〉は、上述の跋・後書き2葉分を算えたからである。実の処、三本共に本文は各半葉末の文字がすべて一致する。

四　愛日本の挿図　『環海異聞』は本文中に説明の為に挿入された図の豊富なことでも知られる。後述するような理由でも重要ゆえ、次に煩を厭わず一覧を掲出する。概して、図は見開き一丁、半丁、本文中の小図の別を有するが、タイトルを有する場合はこれを引用し、無い場合は［　］を付して筆者の命名による題名を掲げる。（欠）を不在を示す。なお、ここには地図・文字表等も含めるものとする。題名中〈…〉は省略である。又、下方の欄は後に問題とするものであるが、愛日本（A）に掲載する図が旧伊達家本（D）・一関本（I）にも存在するか否かを比較する項である。存在は○、存在するが重要点で異なりを示す場合は△、存在しないは×で表示する。備考欄には注のあることを＊で示すが、写本間で多数の差違が認められるものの、最小限の言及に留める。

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
1	序例附言	4ウ～5ウ	魯西亜使節船本朝江渡海せし船路於長崎書キ上ケしといふ図	△	○	*
2		32ウ	魯西亜國字	○	○	
3		33オ	又一體	○	○	
4	巻之一	28オ	オンデレイツケ島穴居并嶋人其土室江出入之図	○	○	
5		28ウ～29オ	コージキ圖	○	○	
6		30ウ8	［楫の図］	○	○	
7		34ウ	オクチヨ鳥之圖	○	○	
8	巻之二	4オ	島人男女並少女之圖	○	○	
9		4ウ	額上頭（ヒタイノウヘカシラノアタリ）圍にはめる冠（カフ）物の圖	○	○	
10		5ウ	嶋の婦人［の鼻・耳飾り］全図／衣服の縫目［に飾るオクチヨの觜］図／紡錘（ツム）之図	○	○	
11		5ウ～6オ	セイウチ圖	○	○	
12		6ウ～7オ	嶋人…皮舩に乗り…猟をなす図	○	○	
13		7ウ	皮舩全図	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
14		8オ	猟（モリ）全図／猟（モリ）を使ふ手法の圖／頭迄冠（カフ）る皮衣全圖	○	○	
15		8ウ～9オ	ナアツカ魯西亜人居處圖	○	○	
16		9ウ	［墓標の図］（欠）	○	△	*
17		16ウ～17オ	氷山圖	○	○	
18		20ウ	オホーツカ家屋図	○	○	
19		21ウ～22オ	犬に荷を積たる雪車（ソリ）を為レ牽図	○	○	
20		26ウ	旅行用意せし人の図	○	○	
21		27オ	ゼリワチカ図／荷を固（コホ）り結ひめをわなにしたる圖／馬に荷を駄したる図	○	○	
22		32オ	アウタンより以西人家土室図	○	○	
23	巻之三	4ウ～5オ	人の乗たる雪車（ソリ）を四疋の馬にて河氷の上を牽する図	○	○	
24		9オ	セイチカ圖	○	○	
25		27オ	ベイチの下地	○	○	
26		27ウ	ベイチ全図	○	○	
27		28オ	椅子図	○	○	
28		29オ5	［厠の穴の図］	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
29		32オ	浴室圖	○	○	
30		32ウ〜33オ	浴者の登る店の図／小桶	○	○	
			桜の葉付の枝箒の圖／焼石に水を…圖			
31	巻之四	13ウ	牛肉等入れて灶に入れ煮る瓶の圖／瓶をのせて竈の内へ出し入れする鉄器の図	○	○	
32		14オ	食盤三ッ道具図	○	○	
33		21オ	カリトース	○	○	*
34		21ウ	カリパーカ	○	○	
35		22オ	ヲリパーシカ	○	○	*
36		22ウ	[同] 背面	○	○	
37		23オ	カミゾー	○	○	*
38		23ウ	[同] 背面	○	○	
39		24ウ	フハイカ／[その紋様の図]	○	△	*
40		24ウ	[同] 背	○	○	
41		25オ	ガミゾ	○	○	
42		25ウ	[同] 背	○	○	
43		26オ	ヲリバシカ	○	○	
44		26ウ	[同] 背	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
45		27オ	シタノイ	△	○	*
46		27ウ	[同] 背	○	○	
47		28オ	シタノイ／ビラスケ]ニツ	○	○	*
48		28ウ	[同] 背	○	○	
49		29オ	シ子リ	○	△	*
50		29ウ	[同] 背	△	○	*
51		30オ	シタノイ	△	○	*
52		30ウ	[同] 背	○	○	
53		31オ	シ子リ	○	○	
54		31ウ	[同] 背	○	○	
55		32オ	シタノイ	△	○	*
56		32ウ	[同] 背	○	○	
57		33オ	チヨロケ／シャーカ	○	○	
58		33ウ	ポロケンツサ	○	○	
59		34オ	ラチセアラ	○	○	
60	巻之五	6オ	鐘楼圖	○	○	
61		6ウ	鐘楼の内にて数〳〵の鐘を手足にて拍子よくふりならす図	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
62		9オ	大寺表面図	○	○	＊
63		9ウ～10オ	同堂内圖	○	○	＊
64		13ウ	アリヘレイ大和尚帝より賜る冠帽図	○	○	
65		14ウ	轉車の斗（マス）に人を乗せて旋轉する戯の図	○	○	
66	巻之六	10ウ～11オ	［衛兵立番の図］	○	○	
67		15オ	龍吐水に皮袋をつけたる火消道具／木造りの家横木を引かけ取崩す道具	○	○	
68		31ウ7	［銀貨中の十字］	○	○	
69		33オ1	金銭［の大きさを示す円形］	○	○	
70		35オ	當十銭／ゼニシカ／スエレブロ	○	○	
71	巻之七	1ウ4	［曲りかねの図］（欠）	○	×	＊
72		6オ	［法馬の図］	○	○	
73		7ウ	ゴーシケ	○	○	
74		8オ	ドウチカ／ケレプコ	○	○	
75		8ウ	パライカ	○	○	
76		16オ	ソーボリ（昭襲）圖	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
77	巻之八	18ウ	ハナレ［二種の図］	○	○	
78		20オ	十露盤	○	○	
79	巻之九	10ウ～11オ	車馬図	○	○	
80		13ウ～14オ	風扇（カサクルマ）之図	○	○	
81		15ウ2	［韃而靼人の帽子の形の図］	○	○	
82	巻之十	10ウ～11オ	魯西亜當國帝夫婦肖像	○	△	＊
83		13オ	シャリ図	○	○	
84		14ウ～15オ	風舩飛走圖	○	○	
85		30ウ～31オ	天地大球の図	○	○	
86		31ウ	［天象を示せるもの］	○	○	
87	巻之十一	3ウ	街衢圖	○	○	
88		5ウ～6オ	［鉢植物の室の図］	○	○	
89		6ウ	［鉢植三種の図］	○	○	
90		7ウ～8オ	［異木の］圖	○	○	
91		9ウ	蘭書所載ウヲルテルボーム（根樹）図	○	○	
92		13ウ～14オ	市中大戯場圖	○	○	
93		19オ	［ペトル　バイトロ　バウロイチ王像］	○	○	
94		25ウ～26オ	［食盤上の小人の図］	○	○	

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
95		29ウ～30オ	加那斯達（カナスダ）湊築出しの図	○	○	
96	巻之十二	23オ	［バナナの図］	○	○	
97		24ウ	［亀に似たる魚の図］	○	○	
98		27オ	ガルカルゼル図	○	○	
99	巻之十三	3オ4	［鉄箍の断ち切れの大きさの図］	○	○	
100		7オ	黥（イレズミ）器（ドウク）図	○	○	
101		7ウ	島人男女圖	○	○	
102		8ウ～9オ	マルケイサ嶋舩図	○	○	
103		13ウ	サンペイツケ嶋人男女図	○	○	
104		19ウ～20オ	バウラツケガワ湊圖	○	○	
105	巻之十四	12ウ	［オロシア船頭部屋平面図］	○	○	
106		13ウ～14オ	長崎湊口図	○	○	
107		14ウ	魯西亜國舩印小旗図	○	○	
108		14ウ後3	［宝器の図］	○	○	
109		14ウ後2	［笏の図］	○	○	
110		15ウ～16ウ	魯西亜舩入津図	○	○	
111		17ウ	魯西亜人客舘図	○	○	
112		24オ	ニコラ　レサノット	○	○	＊

通し番号	巻	丁	題名	存否 D	存否 I	備考
113		24ウ	上案針役ラートマノフ	○	○	
114		25オ	歩卒（サウダ）（アシカル）	○	○	
115		25ウ	同背面	○	○	
116		26オ	冠帽［八種］	○	○	
117		26ウ	オ、ストロ	○	○	
118	巻之十五	7ウ	［オロシイア本領惣國全図よりの写し］	○	○	
119		8ウ～9オ	抜乙（バイカル）蛤鹿湖漁猟圖	○	○	
120		11ウ7	［箭の鏃の図］	○	○	
121		42ウ～43オ	新造軍舩圖	○	○	
122		45ウ～46オ	［水車による製材所の図］	○	○	
123		67オ4	［光太夫のいう斗の図］	○	○	

注（＊の下は通し番号を示す）

＊1. A・Iは〈赤道〉の文字のみ示され、それを示す実線が描かれず。Dはともにあり。　＊16. A・Iは説明の文字のみにて、描線なし。Dともにあり。　＊33～59. 総題として20ウ末に〈漂客帯来冠帽衣服諸圖　共廿八〉とある。　＊35. D題名中〈ハ〉に濁点と半濁点が重なる。　＊37. D・I〈ガミゾー〉。　＊39. I折返しあり。(注10) A・Dなし。　＊45. D折返しあり。A・Iなし。　＊47. A・D・I折返しあり。　＊49. I折返しあり。A・Dなし。　＊50. D折返しあり。A・Iなし。かつAは肩掛けなしで描かれる。Aに不審紙あり。　＊51. D折返しあり。A・Iなし。　＊55. D折返しあり。A・Iなし。　＊62・63. 総題として8ウ1に〈寺院之圖〉とあり。　＊71. A図なく、

重芳の貼紙〈此圖落乎〉あり。I〈図欠〉と小書きする。＊82. I 2図ともに背景描かれず。＊112～116. 総題として23ウに〈使節レサノット等之像／并 冠帽諸図〉とある。

図の数は〈序例附言〉で〈一百十五〉とするが、表に示したように小さな図を含めるとこの数を上まわる。又、愛日本と他本の間に、問題にしなければならない点がいくつか存在する（後述）。

五　洋字の問題　本文中、ロシア文字やラテン文字の洋字が行中に書かれる場合、少なくとも愛日本にあっては写し手は原則的に別の人物であったように看取される。恐らくは多少洋文字に通じている人物が任に当たる要があったのだろう。このようなケースを掲げてみると次表のようになる。（ルビは問題のある箇所のみ表示、他は省略して引用）。

通し番号	巻丁行	A	D	I	備考
1	序列附言33ウ8	АГДЕІКЛМПРТФ	АГДЕІКЛМОПРТФ	（Dに同）	＊
2	34オ1	[ЯЧΨΘの筆記体]	（Aに同）	（Aに同）	＊
3	〃　4・5	[Ψの筆記体と]Ψ	（Aに同）	（Aに同）	＊
4	巻之十一32オ7	（欠）	KPOHIIINTamЪ	（欠）	＊
5	巻之十二32ウ8	m（ヌム）	M（ヌム）	（ヌム）	＊
6	33オ1	m（マイ）	MAN（マイ）	□（マイ）（虫損）	＊
7	巻之十五17ウ2	Thobayleÿ london 26864,	Thobayleÿ london 26864.	Thobayleÿ london 26864.	
8	22オ3	ГОЛЛАНД.	ГОЛЛАНД.	ГОЛЛАНД.	
9	22オ4	НОВ. ГОЛЛАНДІЯ.	НОВ. ГОЛЛАНДІЯ.	НОВ ГОЛЛІНДІЯ.	
10	〃　5／6	（欠）	Г.	（欠）	
11	〃　7	（欠）	C.	（欠）	

注　＊1・2・3・5　原文縦書き。＊2　第1字存疑。＊4　Aはルビとして〈コロンシタト〉とあり、本文空白。その箇所に重芳による〈此處蠻字可有乎〉の貼紙あり。D〈コロンシタト〉のルビと右表のロシア文字あり。Iルビのみ。＊6　A原文縦書き。

六　旧伊達家本と一関本　現在宮城県図書館に蔵される旧伊達家本は、前述のごとく県の指定文化財に登録されているが、元は伊達伯爵家観瀾閣に蔵されていた。玄沢によって藩に提出された原本の存否を確認できぬ今、この書は玄沢上呈本に次ぐ書とみなされている。一方、一関本は、近時の購入というが、大槻磐渓が家蔵の玄沢自筆本を写して伊東玄朴に贈ったものと考えられている。

一般的にみて、玄沢自筆本は完成時に藩に提出され、後、写し方と称される専門家により通常正・副一揃いづつが浄書献上されると考える。（『官途要録』（注11）第二冊によれば、玄沢の提出は文化四年五月九日だったようである。）この流れにおいて、愛日本・旧伊達家本はどの位置にあり、又一関本にいう大槻家の家蔵玄沢自筆本と、文化四年、藩に提出した玄沢自筆本とは同一か否か、の検討が必要となる。本文確定の為には不可欠な作業であろう。なお筆者が一関本に関心を寄せたのは、洋学者が洋学者に対して写本を行なう場合、どのような態度が筆写に反映されるかを知りたかったゆえである。愛日本は全体的印象を一言でいえば、上品な精写浄書本であろう。旧伊達家本と比較するとそのことがより明白となる。しかし両者は本文に関してどうであろうか。

これらの点を検討する前に旧伊達家本と一関本につき、書誌を略記せねばならない。前者については濱田直嗣氏の報告書（注12）より摘記する。（原文横書き。今、縦書きに変更して引用）

『環海異聞　15巻・首1巻』　大槻玄沢、志村弘強編著　筆写本16冊（3帙）　伊達伯観瀾閣図書印　宮城県図書館伊達文庫印　挿図・彩色画（一部墨画）　原本は文化4年（1807）夏脱稿　同年秋伊達家へ献上（現存の伝存は不明）［中略］（注13）美濃判　和装本　袋綴　各27.2×18.9cm　巻首序例目録一巻　共16巻　115図

上掲引用文の次に各巻の内容が示され、さらに〈特記事項〉中に次の一文をみる。

図様に関しては巻十、巻十四の描写は特に精密で、出来の良い巻とされる［中略］。なお、各巻の内容に準じて行数・文字数などの様式は異なるが、書体、図様はほぼ同種と見られ、各一人、多くとも二人による筆写と考えられる。

「環海異聞」の善本は、内閣文庫本（文政12年書写・小柴直裕）、早稲田大学大槻文庫本、大阪愛日文庫本、京都大学本、一関博物館本が知られるが、和綴じ本、十六冊、彩色挿絵の、体裁もほぼ同じな当宮城県図書館本はこれらと比較しても、遜色のない内容を持つものであり、貴重な存在といえる。大槻玄沢らが脱稿して間もない文化3年秋、仙台藩に献上したといわれる遺品の現存確認ができない現状にあって、伊達伯爵観瀾閣図書に属していた当本は、献上本に次ぐ位置にあると考えることができる。更に、宮城県内に現存する「環海異聞」としては、最上位の内容と体裁を保つものである。（以下略）

補記するが全十六冊中五冊を除き、他は和紙一枚を前後の保護表紙として施す。元来全冊がそうであったろう。これに直書きで書名を墨書する。元表紙は明るい茶色で、左に金を散らした短冊を題簽とし、書名を墨書。観瀾閣の印顆は各巻首右に認められる。残念ながら虫損が多数かつ随所にみられる。挿図はきわめて細密で、淡彩をほどこし上品である。なお各冊本文前に遊び紙一葉を施す。さらになお、巻之一に綴じ違いがある（後代のものか）。

一関本は、平成十九年特別展カタログ（注14）に依ると、次のようにある。

環海異聞　大槻玄沢撰　紙本墨書　手彩図　16冊　縦26.8　横18.4　文化4年（1807）成稿　［解説上略］この写本は、磐渓が家蔵の玄沢自筆本を写して伊東玄朴に贈ったものである。

カタログ十四ページには本書がカラーで掲載され、十六冊揃い全体とロシア皇帝皇后肖像の見開き、観覧車の図の計二点が示されている。

ここでも補記する。近時購入したとのことで、すべて本文は洗浄後裏付ちされている。よって上下やや切断される。すなわち補修済み。かつ巻之八末付近に再製本時の綴じ違いあり。各冊とも表紙は明るい紺。書き題簽にて元来のものであろう。各冊巻首のど下に〈本姓佐野〉角田來□〉の印顆を有する。（末字不読）。全体を通して行草体多く、末に従い草書的な字体が増加する。全体からみて善本といえよう。ただこの一関本の最大の特徴は、写本の成立事情をあかす次のような跋文等を有することである。第一に巻十六末オに五行に亘り次のようにある。

右此環海異聞一部十六巻伊藤氏（東）」所蔵也（不佞）有故為佐野氏手寫焉」
年将晩繁事之際故（日）○書或至五十」紙因墨痕不勝見汗顔々々」鬻窓
外史

同ウに十行、さらに次葉オに五行が存する。前記引用文とは一見手が異なる。

近日余貧甚冲齋伊東君為出數十金盡償負」債而不問返完之期
義氣曠懐今世安得此人哉」銘心之餘自述五絶句以申謝悃時中
元前二日也
感泣滂々欲濕巾救窮恩不減君親錐刀争利滔々」是曠達如君有幾
人」
滿街燈火近蘭盆奔走依稀歳事紛討鬼今宵容易」散不須更造送窮
文」
半生歳路太崢嶸今日縁君特地平一片猶餘豪氣」在山河萬里可横
行」（ウ）
也無剥啄到柴門一枕清風午夢閑自咲先生窮未了留将文債重於山」
炎威漸退葛衣清秋動庭梧葉上聲只合深宵貪誦」讀十年燈火報君
情蓋此詩在寧静閣文中」
辱愛　盤渓　大槻崇拝草」（オ）

さらにウに次の十行がある。

大槻茂質（元琢）之環海異聞冲齋伊東氏之所藏也其書」則茂質之手書其繪
則男大槻磐」渓之所圖矣往磐」渓有世路之急愬諸伊東氏伊東氏即
為出數十金」以救之以故至今磐渓之得全業者頼獨伊東氏之」恩矣
後磐渓返金而不受因贈致此書一部請謝恩」義冲齋容之今藏伊東氏
此之故也予與冲齋有故」獲聞傳来之由并借其謄寫之也因又記記
由」於尾亦録磐渓當時之詩以實其事而已矣」
安政乙卯年春正月　櫻岳居士書」（ウ）

さてこの三つの文章をどう解するべきか。配置の順、筆跡の二点から次のように考える。

（一）第一の跋文と第二・第三の後書との二群に分けるが、すべて同筆とみる。第一の跋文は写し手本人の手が前面に出たケースと考える。（二）第一の跋文は伊東氏所蔵本の写し手（鬻窓外史）が時間に追われて佐野氏の為に書写したことを言う。従って現一関本は伊東氏所蔵本の写しである。（三）第二・第三の後書中、第二の詩文は第三の後書のいわば証拠である。第三の後書は重要で、大槻家家蔵本（注15）は玄沢の手書、その息・磐渓の図からなる。この家蔵本から、おそらく磐渓が、伊東氏に一写本十六冊を製したと、筆者は考える。これが伊東氏所蔵本であろう。さらに、伊東氏所蔵本の由来を櫻岳居士が聞いており、又後者もこれを借写した。その由を安政二年（一八五五）に誌した。この後書（第二・第三）は、伊東氏本に誌されてあったのではないか、そこ迄を跋文に出る写し手、鬻窓外史は書写したのではないのであろうか。別の考え方も存在するだろうが、ここではかく推量しておく。いずれにせよ、一関本は伊東本そのものではなく、伊東本の写本と見るべきであろう。しかし大槻家家蔵本の面影をとどめて

いる点で重要な写本である。

七　本文の異同　さて、もっとも肝要である本文だが、そこにはどのような問題が潜んでいるのだろうか。すなわち具体的な異同はどうであろうか。ここでは巻之八につき、例示する。(注16) 愛日本を基準とし、旧伊達家本（D）、一関本（I）と対比すると本節末の別表のようになる。

本文確定上、もっとも問題となるのは(a)欠文あるいは項目の欠落であろう。通し番号49の愛日本における欠落は、献上本原本から公式に書写された際、意図的になされたとみられる。逆に、愛日本が〈仙臺君〉が見たであろう本に極めて近い写本であることを証するともとれる。一方、71の場合はDにのみ存し、愛日本・Iに欠落している理由はわからない。語彙集の最后の位置にあること、部門分けにこの項目があわないこと、直前のグループが日本語にロシア語の順で立項するのに対し、その逆の立項である点からみて、後に巻之七の本文中から拾いあげて加筆されたものであろう。（なお内閣本（函架番号二七一・七）にあるが、早大大槻本にはない）。大槻の原本には本来存在しなかった可能性がある。

上記(a)ほど重要性がないものとして、(b)主要部分以外の脱落、これに含められるかも知れない(c)ルビの脱落があり、これらには恣意性が感じられる。さらに単純なものとして(d)軽微な変更、(e)スペースの誤認がある。これらの例を通し番号で示せば次の通りである。

(b) 1・2・42・43・47・49・52・63・64　(c) 8・22　(d) 38
(e) 59・62

次に問題となるのは、数量の点で多くみられるところの(f)半濁点・濁点の混同、および(g)清・濁音表記の異なりである。これらは当時の日本語表記のルースさと、対象が未知の外国語であることに起因する不可避的現象といえよう。次のように多数にのぼる。

(f) 6・13・15・19・21・23・24・28・30・31・37・38・54・56・57・58・67・68・70　(g) 14・16・17・20・25・29・33・46・48・51・53・55・60・70

第三の問題は(h)字形の相似による混同・誤写であり、巻之八の場合、ロシア語表記に用いられる片仮名でのケースが目立つ。例　ロ／コ（通し番号4）、ス／フ（5）、コ／ク（9）、テ／ラ（11・22・41・61・65・66）、ツ／ワ（12）、ク／タ（13・44）、ナ／チ（18）、ラ／ウ（23）、テ／ケ（27）、ツ／フ（34）、ソ／ツ（36）、ウ／ワ（45・52）、ニ／ヒ（50）、テ／チ（69）、子／と（32）

これに準ずるものとして、(i)くずし字に起因する異なり（39・73）がある。さらに、最終的には同一と認めてよい漢字における(j)同字（10・22・72）あるいは一種の異体字（35）のケース、仮名における(k)片仮名・平仮名の変更（26・40）がある。以上、第二の問題以降、ロシア語を扱うという本書の性格上、注意を要するのは(f)(g)(h)である。

巻之八以外につき、若干本文にかかわる問題を取り上げておきたい。語句に関するものとして、〈序例附言〉35ウ4にでる〈張三李四〉を〈朝三暮四〉と誤まる写本が存するが(注17)、本文確定作業上論外と言わざるをえない。本書では方言に言及する条も多いが、ここでは方言と明記せず本文に紛れ込んでいる例を紹介したい。巻之九のうち馬車の車輪を説明する文中に次のようにある。（愛日本による。7オ）

前なる小輪ハ後輪の半分程あり此小輪に付きて上の方にづく出て有り其づく三ッ一ッだけは上へ向ふなりこれ故其車輪下タへ落着ク所ハ後の大輪と同等になる也扨づくの上ハ撞木形（シュモクナリ）のうで木ありて是を前なる馬の胸の前へ施す

又この続きの末の条にこうある。（9ウ）

又前の車輪を一ッにして小ㇷたるハ直行したる車右往か左往かに横にめぐらさんとする時づくの所の旋轉によりて自由をなす様に工夫したる物と見ゆ

上記引用文中に現われる「づく」の語は、大友喜作校訂本が採用する「ぢく」であろう。校訂注がなく詳細は不明だが、「軸」の訛り、すなわち方言形であると考える。石井研堂校訂本系の諸本は、ほとんど原形「づく」を採用している。池田晧現代語訳では「銑」をあて、これを参照したものかゴレグリャードのロシア語訳本〈注18〉は〈чугунная болванка〉の訳語を用いる。「銑」は普通、銑鉄を言うが、ここでは銑鉄製の部品を意味すると解したとみられ、ロシア語訳はまさにその意の語を用いている。しかしここでの「づく」＝「軸」は、小車輪と車体をつなぐ支柱の意であり、広義の「軸木」を言うと解される。（10ウ～11オ〈車馬図〉を参照せよ）。上記引用文は恐らく大槻による記述とみなせるが、初めに「づく」の語を発した者が漂流民か、大槻か。少なくとも後者は方言と了解した上での記述か、あるいは特殊なタームとして誤認した上での錯誤か。後世の校訂者もこれを尊重したのか、不明であるが、本稿では発音の訛りとみる。

今ひとつ言及すべきは、元来原本において書かれていなかった箇所が存在するという点である。その典型例は巻之九・29オ3〈一　ガラフの服飾ハ上へに無地何色羅紗の［…］〉。〈色〉字の上の文字が空白になっている。右に小さく別筆で〈何〉とあるのは、筆写後の校正者によるものであろう。だが、恐らく原本において空白になっていたものと推量され、失念かあるいは質問せずにあって後考を俟って一字あけておいたものとみられる。従って、本文確定作業の際、元来空格がある場合もあったことは念頭に入れておくべきものと考える。

巻之八対校表

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
1	1オ7	ナ.	ナ	ナ.	
2	〃8	ナ.	ナ	ナ.	
3	1ウ7中	オロニ	オコニ	オロニ	
4	〃8上	ザカタ子	ザカタヨ	ザカタ子	
5	3オ8下	オストロ	オフトロ	オストロ	
6	3ウ1上	ポヤツ゚ア	ボヤツ゚ア	ボヤツ゚ア	D消しあとあり

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
7	〃1下	ヱノスタンノ	ヱノフタ□ノ	ヱノスタンノ	D虫損
8	7オ8	果し	果し(ハタ)	果し	
9	8ウ6	蒙古(モンコ)	蒙古(モンク)	蒙古(モンコ)	
10	9オ1	弟(デ)[…]	第(デ)[…]	弟(デ)[…]	
11	13オ5上	オラツ	オテツ	オラツ	
12	〃	オセイツ	オセイワ	オセイワ	
13	14オ5上	ポロクスケ	ボロタスケ	ボロクスケ	D「ボ」の濁点「ヿ」
14	14ウ3上	サウタ	サウダ	サウダ	
15	〃7上	カベタン	カペタン	カペタン	
16	15オ3上	コーハ	ゴーハ	ゴーハ	
17	〃7上	ソーパ	ゾーパ	ソーパ	
18	〃8中	シペチ	シペナ	シペチ	
19	15ウ3上	ビヨースト	ピヨースト	ビヨースト	
20	16オ6下	サプロートー	ザプロートー	サプロートー	
21	〃7下	バニヤ	バニヤ	バニヤ	
22	〃8中	席(シキモノ)　ポスライ	席(シキモノ)　ポステイ	席(シキモノ)　ポステイ	
23	16ウ7中	ペレツワ	ベレツワ	ペレツワ	
24	17オ1上	パロス	バロス	バロス	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
25	〃中	檣（ホバシラ）	檣（ホハシラ）	檣（ホバシラ）	
26	17ウ2中双行左	[…]チカと	[…]チカト	[…]チカと	
27	17ウ3上	ゴーシテ	ゴーシケ	ゴーシケ	
28	〃6下	バラカ	バウカ	パラカ	
29	19オ3双行右	翮（ハクキ）	翮（ハケキ）	翮（ハケキ）	
30	〃4中	キリベイシ	キリペイシ	キリペイシ	
31	〃5中	ベイチ	ペイチ	ベイチ	
32	20ウ1	用に	用と	用に	
33	22オ3上	ワリイノアレハ	ワリイノアレバ	ワリイノアレバ	
34	〃5上	サツタラガ	サフタラガ	サフタラガ	
35	22ウ2中	禾	木	禾	
36	〃下	ソウェトーカ	ツウェトーカ	ソウェトーカ	
37	23オ5下	ゴルボーカ	ゴルボーカ	ゴルボーカ	
38	23ウ1中	子．ケレブコ	子．ケレプコ	子、ケレプコ	
39	23ウ5中双行右	前又	若又	前又	
40	〃双行左	ホロシヨイと	ホロシヨイト	ホロシヨイと	
41	23ウ8上	チヤラレ．	チヤテレ．	チヤテレ．	
42	24オ4下	ウィツソーカ（ウェ）	ウィツソーカ（ウェ）	ウェツソーカ	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
43	〃6下	プピラマ	プピラマ	ピラマ	
44	〃8上	スクワル	スタワル	スタワル	
45	〃8下	子　ザボウイ	子　ザボワイ	子　ザボウイ	
46	24ウ4下	スワツハ	スワツバ	スワツハ	
47	〃5上双行右	将接	将レ接	将接	
48	〃	タイハ貸せ	ダイハ貸セ	タイハ貸セ	
49	〃左	（欠）	将ニ消魂セント一ブラル　ザシローシヤ　已ニ消ス　ザー	将ニ消魂一ラル　ザシローシヤ　已ニ一消ス　ザーブ	
50	25オ5上	バラヒウ	バラニウ	パラヒウ	
51	〃6上	スポカル	スポガル	スポガル	
52	25ウ4上	・ドロウ	ドロワ	ドロウ	
53	〃8中	ルーヒー	ルービー	ルーヒー	
54	26オ1上	ポルノ	ボルノ	ポルノ	
55	〃2双行右	花面イモカホ	花面ガホ	花面イモカホ	
56	〃3上	ゴノワポルノ	ゴノワボルノ	ゴノワポルノ	
57	〃4中	ポリノ	ボリノ	ボリノ	
58	〃7中	ボラゴタリヨ	ボラゴタリヨ	ボラゴタリヨ	
59	26ウ1上	モイポタレ	モイ　ポタレ	モイポタレ	
60	〃7双行右	崇アガ	崇アガ	崇アガ	

通し番号	丁・行・段	愛日本	D	I	備考
61	〃8上	ゴシラ	ゴシテ	ゴシテ	
62	27オ1下	チョワスタイ	チョワ　スタイ	チョワスタイ	
63	〃6上	ウイチ（ウィ）	ウイナ（ウィナ）	ウイナ	
64	27ウ2双行右	咄	咄ナ	咄	
65	〃4下	ラーゴーレ	テーゴーレ	テーゴーレ	
66	〃6	スモラレル	スモテレル	スモテレル	
67	〃8上	なせ	なゼ	なゼ	
68	〃8下	ポシトウ	ボシトウ	ポントウ	
69	28ウ2	ゼイライチ	ゼイライテ	ゼイライテ	
70	〃5下	ヒオロプノ	ヒオロブノ	ヒオロフノ	
71	29オ3	（欠）	ポマタ　髪に付る油也	（欠）	
72	30オ6	質聞	質問	質問	
73	30ウ6	覚へける	覚へ来る	覚へ来る	

Ⅰにおいて他本の27丁、28丁が逆に綴じこまれている。

八　三本の比較と各本の特徴

愛日本（A）・旧伊達家本（D）・一関本（I）につき、冊数・各冊の丁数、插図の有無と相違、洋字の問題、本文の異同等を検討してみたところ、それぞれ当該の表および注に示したような結果を得た。ここでは細部にわたる議論は割愛し、総合的な観点から三本を比較すると、次のような各本の特徴が浮上する。

愛日本（A）は『環海異聞』成立の翌年に〈仙臺君〉より下賜された本であり、さらにきわめて保存がよい。これらは特筆に値する。恐らく、大槻玄沢が藩に提出した原本から藩のしかるべき書写方の写しであり、従って字様がそれ風になっている。図も丁寧・細密に模写され、完備する。ただし、本文中や小図に若干の、時には意図的、時には不注意な欠落を有する。旧伊達家本（D）は、保存が良ければ、三本中最も重要な写本であろう。ただし玄沢提出時の原本にやや後の加

筆が認められる（注19）。諸家が指摘するように插図は圧巻で、描線・彩色もみごとだが、ことに人物の目が活写されている点は魅力である。残念ながら全体に虫損が激しく、おうおうにして本文にかかるのが、大きな難点である。一関本（Ⅰ）は『環海異聞』の周辺事情の一斑を明らかにする。かつ又、本文・図等の諸点において、全体として愛日本に近い。恐らく玄沢呈上の原本の控えとも考えられ、そうであれば、間接的に愛日本の特徴を考慮する上での証左ともなる写本である。

九　まとめとして

前述したように、三本とも全冊において毎半数末の文字は一致する。この点からしても、玄沢が藩に提出した原本の体裁は、全冊美濃判にして、〈序列附言〉一巻、巻之一から同十五まで本文十五巻、各巻に一冊をあて、計十六冊で一揃いであったろう。毎半葉八行取り。插図は公的に〈一百十五〉図（注20）。本文字様は誤読を恐れ割合平易な字体を選んだと思われる。さらに、未処理の箇所をごく少数含んでいたと思われる。

結論的には大局的にみて三本にあっては本文中、文意を大きく左右する異文は存しないといってよい。本文確定作業に際しては、愛日本と旧伊達家本が第一の資料となる。なお、例えば巻之十に存する〈魯西亜當國帝夫婦肖像〉の画質、換言すれば出来具合の良さは、本文の質の良さとは一線を画して扱うべき判定基準であろう。多数の写本間での比較検討にあっては、ひとつの有力な目安となることは否めないが、善本間においては慎重にとり扱うべきものであろう。

さらに、流布に関し一言述べたい。成立後間もなく堀田正敦に貸し出された（注21）『環海異聞』は、愛日本系のものなのか、旧伊達家本系のものなのか。いずれにせよ、伊達家・大槻家・堀田家に存した写本から、さらに筆写されて巷間に広がったと覚しく、概して二種に大別される写本が流布したであろう。

本稿では、『環海異聞』の本文確定に関し、愛日本が果すべき重要な役割につき、基礎的なデータを提供しえたと考える。よって現在にあっては、最良の本文を得るためには、愛日本を中心に据え、これと旧伊達家本を対校しつつ作業を進めることが肝要である。

注

1. 『図書総目録』によれば五十セット以上伝存。なお、中村喜和〈環海異聞の中の人情　北槎聞略と比較してみて〉（「なろうど」五八号、二〇〇九年四月）、亀井高孝〈足利学校本『環海異聞』について〉（『葦蘆葉の屑籠』、時事通信社、昭和四四年）を参照。さらに滝沢馬琴が『環海異聞』を読んでいたことについては、杉本つとむ『馬琴、滝沢瑣吉とその言語生活』（至文堂、平成一七年）を見よ。
2. 今日迄の本文翻刻本等主なものについては参考文献Aを見よ。なお注5海野論文中に主な翻刻につき要領を得た対照表あり。
3. 函架番号、前者KD299-カ1-16・1～16、後者カタログ（注14を見よ）番号168。
4. 参考文献Aで示した諸書の解説、ことに池田晧〈序文〉〈解題〉を見よ。又、石山洋〈『環海異聞』の成立をめぐって―大槻玄沢の海外事情研究の一駒〉（参考文献B2所収）、さらに羽仁五郎訳註『クルーゼンシュテルン日本紀行』上・下（駿南社、昭和六年）を見よ。
5. 海野一隆〈『環海異聞』の知られざる善本〉（『東洋地理学史研究日本篇』、清文堂、二〇〇五年）。初出は「日本古書通信」六〇巻一〇、一一号、一九九五年。
6. 木崎好尚『愛日文庫図書目録』（大正八年）での番号。
7. 大槻茂質（しげかた）（宝暦七（一七五七）―文政十二（一八二七））は、仙台藩医臣にして蘭学者。通称、玄沢、号、盤水ほか。志村弘強（ひろゆき）（明和八（一七六九）―弘化二（一八四五））は仙台藩儒臣。養賢堂副学頭兼藩主侍講。通称、篤治、号、蒙庵ほか。

8. 筆者未確認。末中哲夫・楚上衛『愛日文庫目録』（大阪市立愛日小学校愛日教育会、昭和六一年）による。
9. 原本横書き二段。〈mok〉はオランダ語ではなく日本語の〈目次〉をローマ字風に綴ったものの省略か。〈Eind〉はいうまでもなくオランダ語。
10. ここでは衣服の仕立てを示す為、必要部分を展開できるようにした仕掛け。
11. 杉本つとむ編『大槻玄沢集1』（早稲田大学蔵資料影印叢書　洋学編　第4巻、早稲田大学出版部、一九九四年）による。参照、吉田厚子〈大槻玄沢『環海異聞』と北方問題〉「日蘭学会会誌」第14巻第2号、一九九〇年三月。
12. 濱田直嗣〈環海異聞、奥州名所図会、仙台東照宮御祭礼図、仙台藩美術資料等について〉（「平成16年度宮城県図書館貴重資料専門調査報告書」、二〇〇七年。筆者注、書名のルビは省略）、又、次も参照せよ、内馬場みち子〈伊達文庫蔵『環海異聞』のものがたり―資料の価値再発見の取り組みについて―〉「叡知の杜」第6号、宮城県図書館　二〇〇九年。
13. この箇所に〈「図書総目録」宮城県図書館本では手島惟敏写とある。〉の記述があるが、誤認であろう。手島は宮内庁書陵部九冊本の写し手。
14. 「大槻玄沢生誕250年　GENTAKU～近代科学の扉を開いた人」一関市博物館、平成十九年九月。
15. この大槻家家蔵本が、現在複数存する旧大槻本のどれにあたるのか、あるいは伝存しないのか、残念ながら未詳である。
16. 杉本つとむ他上掲書〈底本（内閣文庫本）〉と〈大槻本〉の比較〉以下も参照せよ。
17. 大友校訂本、宮崎編石井校訂本にみられる。なお池田晧〈序文〉参照。
18. 参考文献A8。
19. これが元来玄沢によるものか否かも不明。しかしおそらく成立後まもなくなされたであろう。
20. 『宮途要録』によれば、松原右仲・山村才助。参照、岡村千曳〈忘れられた銅版画家松原右仲〉（『紅毛文化史話』創元社、昭和二八年）、鮎沢信太郎『山村才助』吉川弘文館、昭和三四年。後者に言及あり。
21. 吉田上場論文参照。

参考文献（＊注で掲げたものは再掲しない）

A

1. 石井研堂『校訂漂流奇談全集』博物館、明治三十三年
2. 大友喜作『環海異聞』（北門叢書第四冊）北光書房、昭和十九年
3. 宮崎栄一編『環海異聞』叢文社、昭和五十一年
4. 杉本つとむ他『環海異聞　本文と研究』八坂書房、一九八六年
5. 池田晧訳『環海異聞』（海外渡航記叢書2）雄松堂出版、一九八九年
6. 山下恒夫再編『石井研堂これくしょん　江戸漂流記總集』第六巻、日本評論社、一九九三年
7. В.Н. Горегляд, Канкай ибун (удивительные сведения об окружающих морях) ; Тетрадь восьмая, Словарь, АН СССР, Институт Азии, М., 1961
8. В.Н. Горегляд, Канкай ибун, «Удивительные сведения об окружающих [землю] морях» ; Японская рукопись XIX в. из рукописного фонда СПб ИВР РАН, Институт Восточных рукописей РАН, СПб., 2009.

B

1. 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』Ⅳ・Ⅴ　早稲田大学出版部、昭和五十六年、五十七年
2. 洋学史研究会編『大槻玄沢の研究』思文閣出版、一九九一年
3. 田保橋潔『増訂近代日本外国関係史』刀江書院、昭和十八年
4. 高野明『日本とロシア　両国交流の源流』紀伊国屋書店、一九七一年

C

1. 『通航一覧』第八　国書刊行会、大正二年
2. 大槻如電『新撰洋学年表』柏林社書店、昭和三十八年再版
3. 荒川秀俊『日本漂流漂着史料』気象研究所、昭和三十七年

〔謝辞〕 初めに愛日教育会の出崎俊雄、丸山悦治の両氏に感謝申し上げます。ことに丸山氏は献身的に愛日本全十六冊を撮影し、電子化して下さった。研究推進の為、全巻写真撮影を慫慂して下さった末中哲夫先生にも御礼申し上げます。又、次の諸機関において貴重書を熟覧し、多くの方々のご協力を得ました。

愛日文庫、宮城県図書館、一関市博物館、国立公文書館内閣文庫、早稲田大学図書館、相馬美貴子、イサベル・田中・ファン・ダーレン

なお、英文要旨はマーク・ピーターセン氏の校閲を得ました。以上記して、謝意を表します。